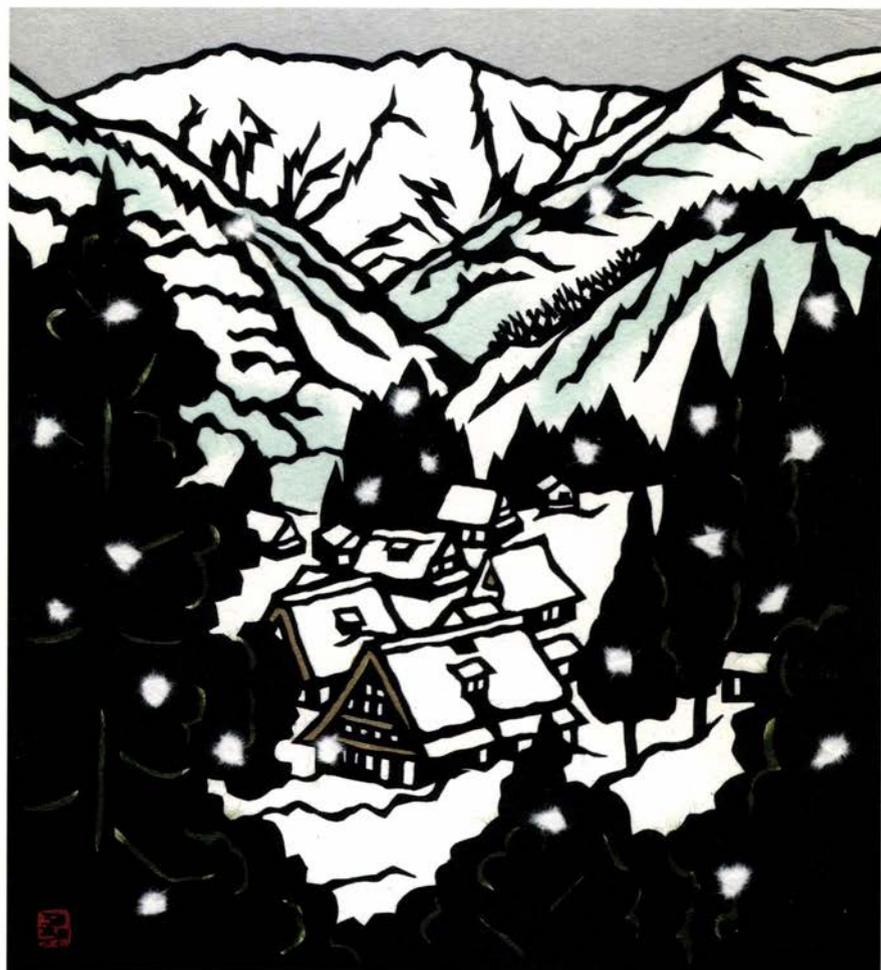


川柳塔



創刊大正十三年 通卷一〇〇五号
平成二十三年二月九日発行（毎月二日発行）
昭和四十七年二月九日発行（毎月二日発行）

日川協加盟

No. 1005

二月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

・放射線科・ホスピス

・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

楢元紋太展

小島 蘭 幸

神戸で開催される川柳大会に出席すると、私はいつも楢元紋太先生の句碑に会いたいという衝動に駆られます。

よく稼ぐ夫婦にもある一休み 紋太

生田神社の句碑の前に立つと大きな愛に包まれているようで、ポツとあたたかくなるのです。

自宅開放みどりの中の紋太展 蘭幸

これは昨年の5月9日、第21回時の川柳交換川柳大会に出席した折、楢元世津さんのご案内で、ご自宅で開催されている楢元紋太生誕百二十年記念川柳作品展を拝見させて頂き、家族を思う美しいところに沢山ふれることが出来た私の実感句です。

「川柳は人間である」と主張し、生活に密着した句を作り続けた楢元先生の川柳は、やさしさと包容力があふれています。昨年の12月10日、神戸文学館で開催されていた楢元紋太展を拝見して、その思い

はますます強くなりました。

神戸文学館は赤いレンガ造りで教会のような美しさでした。入口では大きなポスターと、書齋で執務中の写真と和服姿で笑顔の紋太先生の写真が迎えて下さいました。

展示場には「よくかせぐ夫婦にもある一休み」の額を囲むように、写真、書物、短冊、色紙、川柳を染め抜いた手拭等があり、ゆっくりと味わい楽しむ事が出来ました。写真コーナーでは、若き日の増井不二也さんを見つけて「盃の順日本の祝いごと」と色紙に書いていただいた時のことを、懐かしく思い出しました。

日本の子冬將軍に勝つんだぞ 紋太

十二歳のお嬢さんを疎開させる時に詠まれた先生の作品です。私はこの作品に紋太川柳の真骨頂を見た思いがして、しばらくその場を動けませんでした。9時50分に入館して11時までの一時間は正に至福の一刻でした。

二〇一一ふあうすと川柳大会は4月3日に開催されます。



座右の句

風の糸伸ばして風に逆らわず

(茗人)

私の句

気を抜くとルーズな風が忍び寄る 両川無限

川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「五箇山」

■巻頭言 梶元紋太展	小島蘭幸	1
漢字とつきあう	仁部四郎	2
川柳塔(同人吟)	小島蘭幸	4
自選集		48
温故知新		51
川柳塔の川柳讃歌(74)	木津川 計	52
麻生路郎句抄		53
水煙抄	西出楓楽	54
誹風柳多留一 一篇研究 66		76
■寄稿『麻生路郎読本』鑑賞	堺 利彦	78
愛染帖	新家完司	82
檸檬抄「極める」	三宅保州・山本希久子共選	86

漢字とつきあう

仁部 四郎

英語の先生が肩をすぼめ、漢文の先生が胸を張る時代に旧制中学校に入ったたからか、戦後の日本語の変化、特に漢字をめぐる環境の大変化にはずつとまどっている。もともと、中国の方が簡略化は進行しているから、私などがツベコベ言うには及ばないのだろう。

「ヒエイザンシオツボケンジョウ」という漢字の書取りが当時(昭和二十年三月まで)の最難関だったが、シオもケンも旧漢字は六年生になっても遂に書けなかった。

川柳は、もともとは、座の文芸だから、披講の段階では、選者にしか文字は判っていない。「亡父です」というふうには選者が説明することはままあるが、例えば、「なれる」の題で、「慣」「馴」「狎」「熟」を説明しつつ披講するようなことはおそらくないだろう。

聞いている側が、漢字を使い分けていくことになる。聞く側はそれでいいとしても、漢字は、それぞれ意味がちがうのだからこの句でこの漢字では「チョット」というケースが選者の眼に映ることがある。

ワープロ、パソコンが入ってきて、変換が

『麻生路郎読本』余滴 (1)

栗原道夫 … (89)

一路集

鈴木公弘選 … (90)

「太い」

安芸田泰子選 … (90)

「豆腐」

鈴木いさお選 … (91)

「リスト」

鈴木公弘 … (92)

初歩教室「影」

夏目一粹 … (94)

秀句鑑賞

高田美代子 … (96)

「水煙抄」

新家完司 … (97)

「同人吟」

中川 一 … (98)

「水煙抄」

内海幸生 … (101)

「飛行船(2)」

一月本社句会 … (102)

「冬二さんの句帳」

各地柳壇(佳句地十選/井上じろう) … (106)

「二月份各地句会案内」

柳界展望 … (120)

「二月各地句会案内」

■エッセー 葎乃先生と猫 … (122)

■エッセー 冬二さんの句帳

清水白柳 … (123)

■編集後記(ひとこと/森松まつお)

朱夏・光久 … (124)

座右の句

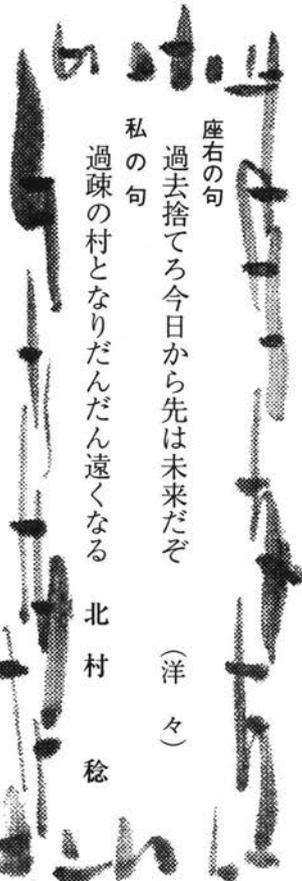
過去捨てろ今日から先は未来だぞ

(洋々)

私の句

過疎の村となりだんだん遠くなる

北村 稔



不十分だと、字画は正しいが用法が違う漢字が文章のなかで浮き上がって、短詩型文芸では致命傷になることがある。新聞や雑誌に投稿して、そういう憂き目に遭ったことがある人は存外多いのではあるまいか。

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇号記念の『麻生路郎読本』を頂いて、頑張って読んでいるところだが、編集にあたった方々の緊張ぶりを尊いものと感謝している。

「古くとも僕には仁義禮智信」という句は私の大好きな句で、本歌取りの真似事を時どきさせてもらっているが、「禮」は「礼」になってしまふ。旺文社の「高校基礎漢和辞典」には(仁義礼(禮)智)と載せてあるから「礼」でも間違いにはならぬと安心している。ところで、私が「川柳塔」の同人になったのは昭和五十七年で五十歳のときであったが、地方からも役員を出すという機構改革の都合によって、平成十四年には副主幹になり、定年の年からは相談役になっている。

そこで、気になるのは、「自選集」に句が載るようになってしまったことである。敷居が高いことになってしまったことである。七年も八年にもなるから、もう「なれている」ことになったが、漢字を当てるとすれば、さて、「慣」「馴」「狎」「熟」のどれなのか気になってしかたがない。



小島蘭幸選

堺市 楽原道夫

一日乗車券が見ているよい景色
吊革を持つている隣の基督も
時代錯誤がうれしい「エクボ美容室」
車窓から見つめる暗い刃物店
この町楽しカレーショップ「ナイス」
踏切を挟んではにかみ合っている

和歌山市 牛尾緑良

関白とよばれないまま古稀に入る
余生とは言うまい今日も二十四時
長生きはエコに背いているのです
割り勘で味わうボジョレーヌーボー
踊り場よ回れ右するチャンスだよ
余生また夢を広げてみようかな

西宮市 緒方美津子

笑うな吠えるな動くでない土台
愛用の猪口で一献月に酌む
松茸は人を見おろす位置にあり

新そばの香り大盛りで楽しむ
猫嫌い猫もあんたが嫌いです
議員より信頼できる菜のラベル

神戸市 両川無限

遊び疲れてまた月曜の朝が来る
家計簿の仕分け何も出てこない
マッチ一本擦って幸せ確かめる
好きなことさせてやってと言うカルテ
職安で綱一本を奪い合う
人間のいろは学んだ木の校舎

大阪市 吉村一風

グループに混ってるから力付く
方言で語り合う酒またうまし
フルムーン二人の笑顔湯に浮かべ
草笛を吹いてふる里呼んでみる
秋の彩いっぱいもらい散歩する
昨夜の喧嘩お早ようさんでしめくくる

富山市 島 ひかる

青い空キャンバスにする雪の峰
天と地の間火のいろ水のいろ
赫い月眺め訃報を聞くシヨック
山が好き一緒に行ける友が好き
万葉の世界に浸るスニーカー
円満に金が解決する怖さ

阪南市 森村 美花

掴みました自由に生きる喜びを
真つすぐな瞳に風も凩いでくる
荒れた手が生きた証という笑顔
編み針に友の温みが詰めてある
会話のない暮しに慣れてきた夫婦
ゆつくりと風呂で掴んでいる明日

尼崎市 山田 耕治

さつちりとした子で少しかわいそう
三次会でその体力を見せつける
妻の肩揉んでポイント溜めてます
目が覚めてよかった今日も生きてる
父さんの声聞きたいという電話
自販機がゴトリ悪事をするように

大洲市 中居 善信

酒斗辞さぬ家系に下戸の僕が居る
ドラマ一本終わった頃に目が覚めた
雑木林の中の空気は澄んでいる

袋とじ男は他愛ないもので
家のルーツを探し過去帳読んでいる
茶飲み友くらい余力なら少し

黒石市 佐藤 古拙

ようやくに背骨になった新幹線
口笛を吹けない仮に喜寿迎う
カラフルな紙面に続く暗い記事
霏々と雪わが足跡を埋め尽す
もう春の息吹きりんごの枝を切る
天気予報はずれて欲しい時もある

藤井寺市 高田 美代子

打ち合わせ無しです真実を語る
死ぬかと思つた昭和を生き抜いた
ケンカしてまでも勝とうと思わない
真つ直ぐに人を見る目は持っている
ある日ふと裏の面白さに気付く
号令をかける明日も生きようと

神戸市 山田 婦美子

お茶の間に笑い袋が置いてある
ほっとする笑顔美人の嫁と孫
一日一本笑いの皺が増えてゆく
ボージョーレーヌーボーに少し弛んだ肩のこり
カサコンと落葉が土にかえる音
噛み合わせぬ会話で短日が暮れる

西宮市 西口 いわゑ

御神輿へ日本男子のいる安堵

盗みたいのはたった一つのハートです

コンバクトぱちんと内緒しまい込む

しあわせらしい落ちついた字が並ぶ

ほろほろと苦いが好きなの森

造花にもプライドのある佇まい

和歌山市 喜田 准一

挫折して男ひと皮むけて来る

ここ一番抜けぬ甘さを責められる

強かに柳腰ですい女

身の丈に合った歩幅で疲れない

いい答ばかりを待って出遅れる

クラス会齡だとしだと飲み明かす

鳥取県 石谷 美恵子

深海の蟹に聞きたい棲み心地

リングをひとつのせてあなたの的になる

十二月猫もわたしもそつという

一人なら食わずに寝たい日の疲れ

負け組の中で人間らしく居る

くたびれた手綱を締める誕生日

愛知県 早川 遡行

足並の揃った怖い国がある

ただ歩くだけで元気になるなら
ドライブへ妻が車を拭いてくれ

ペンキ屋に目を付けられた家周り

我が家には賞味期限はありません

去年のが取ってあります注連飾り

美作市 大石 あすなろ

友達が羽干しに来る雨上がり

不器用で振れぬ尻つ尾もお大事に

デジタル化いつか昭和の絵が消える

ケータイもわたしも今は充電中

さり気なく話題の中に滑り込む

脚色をされた噂がひと回り

八王子市 播本 充子

黒猫と出遇って宝くじを買う

夫にも教えるゴミ出しのルール

キッチンに仕掛けられてた盗聴器

弁解に疲れて掌を見詰め

男なら重い荷物も背負いなさい

食欲を満たして潮時を待とう

札幌市 小沢 淳

師の袖にふれた話よ塔の灯よ

百篇の詩をノートに咲く命

旧幣を糺し大道拓かんか

感性にときどきブラシかけている

悔るな風邪と女はしぶといぞ

志抱けば鱗も光りだす

鳥取市 土橋 睦子

固すぎる蓄に春が来て止まる
歳月の中に沈んでゆく思想
年金を貰うと治るヒステリー
掌の中に握り続けている答
几帳面すぎてやさしく説論する
冬眠のリズムに慣れた春の芯

堺市 山本 半銭

星の私語凍て付く街の静けさよ
シャッターの目立つ街なか暮れ厳し
ジングルベル人恋う街も良いものだ
一声で騒めきが消え聴く姿勢
思い付きだけで画いてる明日の絵
子供の声だけが弾んでいる広場

鳥取県 佐伯 やえ

人のたのみ心よく受け年明ける
冬の朝市農家の顔がよく売れる
駅前に住む幸せをかみしめる
体にアカはつくがころにアカつけぬ
貧しい時代いつも忘れず生きている
小さな城の中でウサギと対話する

三田市 上垣 キヨミ

独り居の五欲が時に目を覚ます
迷うたら北斗の星に聞いてみる
胃カメラに耐えた褒美の鱈の鍋

養虫もちよつとお洒落に紅葉着て
片付けて貰つて増えた探しもの
ばあさんの出番おせちの隠し味

尼崎市 軸丸 勝巳

喪中挨拶そうかそうかと浮かぶ顔
年賀状手書きに孫の目が笑う
よい暦昭和八十六併記
常用漢字私の書けぬ鬱入る
何でだろ体重落ちて重い足
衣替えして出直すと枯葉散る

大阪市 古今堂 蕉子

私バカよねお馬鹿さんよねとつばやく
生きてたらさせてもらうと明日の事
会釈する日本の伝統美でしょう
アッサムティーレモンの輪切りからの春
脳トレにおしゃべり特に良いらしい
電話の妻一度僕にもその声で

河内長野市 坂上 淳司

果報者冬の但馬路二日晴れ(長柳会時行ツアー)
湯の中も皆ひねつてる五七五
宴会のメンバー皆高座椅子
夢千代の像にうっとりサユリスト
命より大事私のずだ袋
坊さんの袂はカバンなまんだぶ

明石市 梶谷和郎

折り返す旗は行けども無い六十路

身の丈に合った深さの河渡る

多すぎるヒントに迷い深くなる

一人旅ヒヨイと気ままな風に乗る

番犬と同じ目線で見る朝日

過ぎてゆく刻にゆつたりタクト振る

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

頼り合うようにバジヤマの袖だたみ

おしるこの甘さほどならときめこう

分相応この楽しさもうれしさも

気のきいた返事も書けず十二月

口こみの噂の本とレモンティー

原点に戻り下着を整える

尼崎市 長浜美籠

むざむざと過ぎた時間に悔いがある

姉達に変わらないらしあんば柿

惚けまいと自分に暗示かけている

百葉の長に縁なく日々達者

御堂筋バリジャンのよう佇立てて

然りげ無い一筆箋が優しすぎ

大阪市 大川 桃花

大合併由緒ある名が消えた町

喪服にパール皆淑女に見えてくる

改札でおばちゃんバッグ掘り返す

その由来たずねて見たくなる名前

パーゲンで近所の主夫と鉢合せ

パレットに絵具を足してまだ未完

堺市 志田 千代

さしあげられる臓器ではなくなりまして

本籍をまだ古里に置いている

慰めたつもり言葉でしたのに

スイーツでビールの飲めるお婿さん

家庭教師キャッチボールもしてくれる

青春切符帰路は新幹線となり

鳥取市 春木 圭一郎

その答え焦って出さぬ方がいい

大概のことは時間が答え出す

今起きていること俯瞰的に見る

思うほど人は注目していない

楽になるできない自分認めたら

自問する本当に覚悟しているか

鳥取市 鈴木 公弘

他人事にしていた紫煙のゆくえ

貧しさへ死に神祓わない役所

困とは知らず広げた葉に止まり

くしゃみ続いて貸した金思い出す

トレーニングだけの戦力外通知

赤い羽根つけてギャンブル場へ行く

香芝市 大内朝子

命全開とことん謳歌するこの世

心配をすると乳房がまだ痛む

捨て切れぬ未練歯痒いなどと思う

人情に溺れる癖が治らない

ときめきが寒いハートに灯を点す

過去達が夕焼け雲に出ては消え

富田林市 中井アキ

本棚の隅にわたしの小宇宙

八十のリズムで踊るカレンダー

足腰が弱りじりじりしてしまふ

みぞおちの四隅に鬼を棲まわせる

残つてる欲は大事にしています

お隣の喜劇を隙間から覗く

西子市 黒田茂代

冬枯れの林はモノクロのオブジェ

旅先の絵葉書で来た雪だより

お三宝に合わせて鏡餅ちぎる

水仙しかまだ咲きません仏様

じゃんけんに弾むわたしの幼児性

ピアニッシモは小雨フォルティッシモは雷

笑い声も泣き声もあるうさぎ小屋

知事が先ず育児休暇を取るといふ

受話器から聞こえる咳が移りそう

鳥取市 岸本宏章

ほとほりが冷めるまで待つ基地移転

真実はひとつ流れが変わっても

さよならを言うには霧が深すぎる

檀原市 安土理恵

真ん中の闇は見せないほうがいい

コテコテの演歌丸裸の人生

どの道を行けば昔に逢えますか

割り算のあまりがたぶん夢でしょう

保護色は白天の雲地には雪

少し汚れて楽になつたね 兎

大山市 金子美千代

忘れない事だけ忘れて欲しい脳

ほうれい線せめて笑顔でカバーする

ごちゃませの女の話とめどなし

柄になく詩人になつた西雲

古傷がうずく落語でも聞こう

がらがらポン威勢よく出る外れ玉

府中市 藤岡ヒデコ

久々の京も名所は絵のままに

ツアーでは会えぬ京都の舞妓さん

神仏を崇める伏見鳥居の朱

さすが京観光客はアジア系

平凡な暮らしに植える夢の苗

B級のグルメでつぱん持ち上げる

高知市 小川 てるみ

唐津市 井上 勝 視

塩壺の底にかすかな波の音
健康第一妻が持つてる主導権

思い切り背伸びがしたい欲はある
無礼講信じ若さの苦い酒

程々の暮し運にも恵まれる

食費削る不況対策子が哀れ

ナメクジも好みの花があるだろう

すぐに手を出して二代目駄目にする
総入歯戦地に歯医者居なかつた

影武者が幅を利かせている政治

高知県 小澤 幸 泉

唐津市 樋口 輝 夫

エピソード描けぬままにうつ病床

泣き声を味方にしてる孫の知恵
認知症の妻が住んでる小宇宙

復讐の眼鏡に見えた冬景色

咳ひとつ飯はまだかという予告

聖別された時と所に舞い戻る

お下がりの羽織我慢の七五三

陽のあたる家あこがれて路地に住み

二歳の児五歳を庇う黙秘権

あと幾日こよみを消している私

福岡県 林 さだき

唐津市 山口 高 明

もう買うまいと決めたはずだが川柳書

撮り鉄がお召し列車を待ち伏せる

懐かしい京の下宿の股火鉢

守秘義務と言う重罪につかれ果て

同年の病死にすまぬ生きている

悦びを知らぬ寡黙な雪女

秀才も上には上がいるランク

若さとは挫折を知らぬつむじ風

真相を知りたい妻の青春譜

苦労した分楽しめと子がすすめ

唐津市 市丸 晴 翠

熊本市 永田 俊 子

子の帰省告げて配った京土産

あと僅かきれいに回りたい花時計

炬燵守りチャンネル権も独り占め

歌わなくなつたシャンソン枯れ葉が歌う

度忘れを支えてくれる夫が居る

値上げの槍で突いてくる煙草

葉飲む時間告げ合う共白髪

天下りという安全牌を持つている

植山でまた会おうねと同期会

記憶うすれひっそり汐が引いてゆく

熊本県 高野宵草

億兆の予算に一円玉が生き
見回せば右も左も学ぶこと
成るように成るさと妻の肩を抱く
遠くから風が運んだ落葉掃く
老いたとは言いたくないが一休み

熊本県 岩切康子

髪染めて救急介護受講する
外出が出来る幸せ抱きつづけ
病院を回されながら百七歳
参加数増やす電話も役の中
体力に余裕残して退会す

札幌市 三浦強一

例えばの話ますます分らない
ポストからコンビニという巡回路
遺産みな妻にと妻に書かされる
自分史に少し混ぜてふくらし粉
あの世まで持つて行きたい本がある

弘前市 富士慕情

生かされて飽きずに飯を食べている
山へ雪そろそろ庭の雪囲い
猛暑にも耐えたりんごの好い笑顔
失敗の汗は明日へとっておく
日の入りに合わせ晩酌早くなる

弘前市 高橋岳水

好奇心失せて腑抜けの顔になる
加害者と思っていないスモーカー
居留守かも知れぬテレビの音がする
米余り現象知らぬミレーの絵
魂を洗う津軽の雪しまき

弘前市 高瀬霜石

コーヒーカップ話上手と聞き上手
ガムを噛む昨日の罪を消すために
こいつだつて身内だ尻尾拭いてやる
ため息のこだまが還る寒い部屋
のど飴をなめてはひとを刺している

弘前市 岡本花匠

癌の妻和顔愛語で生き生きと
陽春に早く逢いたい北の性
雪燈籠武者絵灯して城守る
朝水にいのちの浄化今日を生き
山峰に寺社を構えて民守る

弘前市 須郷井蛙

ビタミンの補給高い野菜でも
坂道の自転車齢が見え
苦心談語れば長い開拓史
毎日の昼寝が老いの元気薬
孫の顔盆と正月だけ見れる

弘前市 今 愁 女

すらすらといかぬ起草に衰退を
帰らない人多くなり年も暮れ
生まないで少子化歯止め無理なこと
手をつなぎ古い二人ゆく麗しさ
誰だろと喧嘩は両成敗でしょ

黒石市 相馬 一花

ストレスをプラスに変えて生きている
円満な家庭を妬むつむじ風
参観日今日は食えないガリリック
ヘリオトロープほんのり香る女子高生
懐が寒いと効かぬバイアグラ

平川市 小寺 花 峯

ニンマリとへそくり拜む皺伸ばす
氷点下残り火消えた独り部屋
一病を抱えて飲んだ二合燗
津軽雪炬燵で猫背直らない
小さな嘘オブラートで包んだ悔い

青森県 松山 芳生

温度差のあるポケットのよい間合い
ピカピカの君をどこかに置いて来た
信号点滅いのちの朽ちるまで
爪を切る何んと淋しい音たてて
眠りから醒めて一気に咲く笑顔

さいたま市 星野 育子

拝殿の鈴鳴り止まぬ秋日和
リトマス紙愛の深さは分らない
スーパリーの底値をメモし主婦の知恵
見栄つ張り男と意地つ張り女
旅終えてまずは茶漬けをリクエスト

東京都 清原 悦子

木洩れ日が程好い位置にある至福
遠ざかる夜汽車の音が懐かしい
手作りの雛準備して春を待つ
何の日であろうキッチンいい匂い
下書きが要らぬ友への長便り

横浜市 小野 匂多留

まかされた仕事ゆっくり嘯みしめる
柳友の認知症聞く秋の鬱
紅葉の便り目移りして疲れ
半分は二時間ドラマ眠ってる
安ければ飛びつく金はあるんです

横浜市 菊地 政勝

節約の仕方へ祖母の知恵もらい
不作法へ老いの定規が見逃さず
デジタルに昭和の脳が追いつけず
加速する痴呆へ家族の眼が温い
南から北から鳥が狙われる

川崎市 三浦 きぬ

ああホーム旬の味覚に見離され
外人にもてるデバ地下日本食
旬の味味わいたくて伊東まで
沖遙か小舟たゆとう伊豆の海
箱根路のドライブ富士を右左

静岡県 藪田 獏 杏

リハビリへ落葉が踏めるだけの幸
隣町さえも知らないバスポート
汗涙黒帯しかと締め直す
母未だ五枚小鉤を履き踊り
輸入した砂で浜辺が生き還る

可見市 板山 まみ子

九年のお役返上背を伸ばす
割り勘に文句言えない下戸の胸
強面の弱点見たりカリン糖
とりあえずクワイは買った歳の市
黒豆とかまほこあればすむ話

犬山市 吉田 幸子

気持ちだけ二十歳のままと初春を跳ね
風邪だけど長びきや心細くなる
アンテナを張ってボケから距離を置き
バカ受けのネタは私の頼馬から
気紛れな投句編集者を泣かせ

犬山市 関本 かつ子

努力していれば誰かの目に留まり
老老の世相が届く喪のハガキ
サンマの目菅さんよりも生きがいい
本当は一人でいたいティータイム
忘年会買うのをやめた服に会い

京都市 高鳥 啓子

雲を見て十年石は動かない
雲掴むはなし遠心分離機に
ダウンコートに半分雲を詰めている
行き先を心得ている雲である
正解はいくつもあると雲が言う

京都市 坪井 孝一

国の山いつも返事をしてくれる
夢探すグラスの底の深いこと
点と線つないで里の無人駅
意欲的な意見で仲間外される
爪切つて懺悔の紐が解けない

京都市 榎本 宏子

新刊書横目に文庫本を待つ
快晴にこころが騒ぐ登山靴
姿見とファッションシヨの秋ひとり
花も人も未熟な頃が愛おしい
天国行きのキップ一枚皆んな持つ

京都市 三宅満子

気まぐれ旅月と一緒に露天風呂

リハビリの効果じんわり膝頭

不況風もろに受けてる祇園町

海老蔵の招きが消えて寒い京

ハーモニカ昭和歌謡が湧いて出る

京都市 西村益子

いつまでも羞恥心持ち生きたいね

あんさんどなた母の記憶にないわたし

ゆつくりと百まで生きる準備する

ジャコ食べてウロウロしても骨粗鬆

喧嘩のたび夫は他人だと思ふ

京都市 藤井文代

病み上り口紅だけでまずは快

背のびした分だけ重い荷を担ぐ

虚栄心あるがばかりの無駄遣い

しんみりの空気馴染めず知る孤独

秘め事も秘めてる内が主役です

亀岡市 井上森生

楽チンの暮らしが国を駄目にする

何処にいる日本の意志を語る人

健康は極めるよりも悠然と

老いの坂元気に登る山がある

熱中の出来る話の友がよい

長岡京市 山田葉子

月日と曜日何はともあれ言えました

ゆつくりと昭和のうたを聴いている

二世帯の温度差孫がうめてくれ

ここまで来たたら尽くしたことにしておこう

尽くす前にあなたに運が向いて来た

大阪市 川端一步

あらためて正座して読む第九条

世直しの一兵卒でいるわたし

鶯の初音を聞いて城の梅

黒を着る八等身ならいいセンス

引き際の美学の足がもつれてる

大阪市 神夏磯典子

紅椿水仙元気を持つてくる

低い鼻だけど善意は嗅ぎ分ける

絶対という爆弾を抱いている

シャーシャーと二億三億契約金

日の流れ水の流れに負けまいぞ

大阪市 小谷集一

この人も淋しがりやかよく喋る

九回の裏を信じて生き残る

誤作動でたまにときめく事がある

自己主張年金という武器を持つ

手の平で未完の夢を遊ばせる

大阪市 小泉 ひさ乃

ハミングで今夜も洗う箸二膳
ストレスという魔物笑いで吹っ飛ばす
幸せの流れの中で身を委ね
苦を積んだ老母の静かな佇まい
老いてなお楽を知らない母の指

大阪市 平 嶋 美智子

一冊目の家計簿もはやセピア色
家計簿にクジラ四十円とあり
家計簿は四十四年の奮戦記
買いました四十五冊目家計簿を
大きな芋もらい戦中思い出す

大阪市 中 井 萌

生き甲斐が膨らむ孫の声変わり
一人では背負いきれない森の闇
満面の笑みにかすかな胃の痛み
二人居て進化の果てにある透き間
定年後妻のルールに逆らえず

大阪市 原 田 すみ子

一言に一言返し日も暮れて
慰めてくれるだろうという甘え
良い年を重ねているか皺を見る
二手先読んで妥協を受け入れる
気働き過ぎる夫は小煩い

大阪市 松 尾 柳右子

ニコニコとしたいが齢を重ね過ぎ
娘の電話期待している師走なり
食べ物が片寄りますよバイキング
寢床から出たくないです寒い朝
敬老会さそうチラシに顔浮かべ

大阪市 小糸 昭子

良い妻になろうと思た不覚だな
玄人も間違えて売る毒きのこ
沖繩の我慢は踊り唄う事
人間も何処か抜けてる人が好き
ファスナーのように途中で噛んじまう

大阪市 岩 崎 玲子

新聞の温いコラムを探す朝
就活も婚活もみな忙しそ
白地図が棚に残ったまま暮れる
こぼれ種ハローワークで舞うばかり
好奇心磨いて年を越すつもり

大阪市 熊 代 菜月

一枚のハガキがとくさ蟻り
負けん気がまだ言わせない済みません
振った人振られた人も先に逝き
ほめ殺しされて言い訳やめました
スマンノウ今夜もこれで仲直り

大阪市 井丸昌紀

思い残すことはタバコを一本
いいチャンスと医師に禁煙勧められ
禁断症状一度も出ずに済んだけど
禁煙パッチが効いてくれたのかも
退院すれば即逆戻りかも知れず

大阪市 岩崎公誠

嘘八百並べ詐欺師は跋扈する
木枯しが吹くとやる気が湧きあがる
紙おむつの世話にならぬと言う覚悟
空箱と空缶積んで老いふたり
火吹き竹使ったかまど残す里

大阪市 近藤正

平穩を祈る松明二月堂
核の傘核持つ国に効き目無し
気取っても総理の器底が知れ
借金を山積みにして富める国
通夜の客去ってしんみり家族葬

大阪市 山本加お里

新年のお肌仕上っている袖湯
笑い声すぐに感電してしまふ
あるがまま喜びあえる年となり
喜びの気持やる気に切り替える
法要の後に出合った黒トンボ

大阪市 伏見雅明

ご先祖と動物園でよく出会う
横顔が氷川きよしに似た音痴
横切ってから信号を確かめる
職退いて上司は妻の一人だけ
お受験にトンビの親を思い知る

大阪市 榎本舞夢

初めから大物なんか狙わない
セールスと掛け合う時は妻が出る
家の庭見て逝きたいと父介護
相槌をやさしく打つと母笑顔
進まねば後がいつぱいつかえてる

大阪市 澤田定子

ご近所に世話やく他人いなくなり
十字路に渦巻く落葉万華鏡
夫への褒める言葉をさがして
匂づくりに脳へ酸素を送りこむ
ブランド名口に出す人若さあり

大阪市 津守なぎさ

京言葉聞けずツアーが闊歩する
人力車バス混雑の渡月橋
書きあげた賀状を止める喪のハガキ
人人京都の秋は混んでます
忘年会下戸にこにことついて行く

大阪市 津村 志華子

銀杏は母の小言のほろ苦さ

湯豆腐に柚子香らせて独り膳

軒先の柿も大根も深い皺

裸木も静かに春を待つている

手の届く範囲に物のある暮し

大阪市 升成 好

人間に性善説という重荷

以下余白斜線は有無を言わせない

せつかは先手必勝疑わず

茶柱の中途半端な斜め立ち

医者が首かしげる度に薬ふえ

大阪市 坂 裕之

定年の無い仕事ほど慎ましく

無理やりに蓋をするからこぼれ出す

泣きながら兄に嘔みつき二人泣く

ひと言が過ぎて静かな町に住む

キツネにも狸にもなる強かに

大阪市 江島谷 勝弘

たとえれば僕は浮雲はぐれ雲

総理の座一年もてばいい方だ

夢の中離婚をされてあわててる

鈍なのでいつも貧乏くじを引いている

盛り上がり調子にのって二日酔

大阪市 田浦 實

自分量る物差しひとつが持っている

妻との喧嘩折れるが勝ちと覚えたり

今昔写真街の語部演じてる

腹の底から笑って体軽くなる

表札を付けぬ家増え寂しいな

大阪市 板東 倫子

大さわぎして冬のゴキブリとり逃がす

海老蔵が大見栄切った夜の街

手に受けた京の紅の葉持ち帰る

眠れぬ夜四国廻路を思い立つ

いじらしいはやぶさ号の表彰式

大阪市 榎本 日の出

出世する人はやつぱり芯がある

支持率に菅さんお灸すえられる

ブランドに負けずユニクロついてゆく

手が大事足も大事と風呂の中

寝返りが上手にできる呆けてない

大阪市 吉内 夕か子

ルミナリエ明るい世界いつまでも

祥月の祖父母に務める般若経

秋日和にわの石路わらい咲く

孫子来て介護いらぬお正月

夢のたね蒔いて互いに夢の花

大阪市 谷口 義

父も母も長生きしたと思わない
夜が来ても反省などしてない
五十年同じ所に布団敷く
出がらしの余生も味なものである
スキーには一度も行ったことはない

大阪市 奥村 五月

今日こそと思う気持ちに金がない
定年も休む暇なく二度の職
世の中が進み地球に熱がでる
嫌いでも僕を離さぬ影法師
真すぐに進む子等にも反抗期

大阪市 寺井 弘子

るるんと愛犬と組むベアルック
満腹になると言い出すダイエツト
青空に柵捨てて飛行雲
無縁社会親子が闇に閉ざされる
エコカーを買って遣り繰りする家計

大阪市 中村 叡子

もう何も要らぬと言って買って来る
鎮魂が観光になるルミナリエ
核競うヒト科に神も荒れたまう
ひよつとして地球探査を異星人
集う友会話はみんな医者通い

大阪狭山市 矢野 梓

忘れたり思い出したり脳刺激
大声を出し読んでみる呆け防止
忘れ物妻のチェックを受けて出る
少子化を疑うほどの受験生
失敗の言い分けてまたミスをする

池田市 栗田 久子

里山里親里という字に血が通う
老いたとは思わないけど若くない
家族でも相容れぬ日は距離を置く
わが家にも福をよびたい鬼やらい
河豚買ったつもりで今日は鱈にする

泉佐野市 山本 蛙城

喪のハガキまた来た賀状手につかず
まだですか寄付することは定めてるに
なんでやねん鏡見るたび老けている
はいサブリ日に六十粒は飲んでます
九十路とは痛いところや痒いところ

和泉市 横山 捷也

酒吞まぬ父に手紙で詫びを書く
二人きりになると無口が怖くなる
つないでた紐を緩める母の勘
方向を気にせぬ狭い土地に住む
老いの趣味エンストばかりしてる画布

茨木市 藤井正雄

売ってからじりじり上がり出す株価

四季の花欠かさなかつた祖母の庭

男同士婿が熱爛持つてくる

花時計恋人でない叔母を待つ

暫くは酸素が薄い二度の職

交野市 森本弘風

嵯峨野路へヒトひと人のみじ狩り

同窓会昔に返り俺お前

喜寿集い昔の事を笑い合ひ

奈良に来て大仏殿も見えぬ雨

三日目にひげ剃りに来る妻の声

河内長野市 山岡富美子

逃げ足が速い二月の時間割

志捨ててはいない冬の虹

整理整頓できないものに診察券

ストッブウオッチ神が押すまでひた走る

因果関係分からぬなりに付いてゆく

河内長野市 村上直樹

逝くときはたらふく呑んで肉喰つて

呑み放題とうとうやめた名幹事

ピカソより燃えるゴッホがずっと好き

風の子がきつと日本を立て直す

火種まだ抱いて駆けてる古稀の坂

河内長野市 井上喜醉

熟年の温もり八十路の平和知る

水溜り上手く交わした男道

安い酒のめば必ず出る欠伸

下町の死角でこっそり途中下車

変身のトラ宿命の血が走る

河内長野市 黒岩靖博

先端の技術無用と仕分け人

やりくりは妻にまかせておらが春

禁煙の車両ばかりで旅地獄

母さんの旅が近づき甘い風

あの歳でヒップアップとジャズダンス

河内長野市 植村喜代

チャンネルを回せば皆食べている

秋の夜に今年は虫の声もなく

紅葉が終り静かに眠る山

秋の夜長思い込んだら朝が来る

八十路来て未来も過去も淋し過ぎ

岸和田市 堤 檀代

ゆれて来るやさしい言葉ゆれてくる

嫁はんに手綱とらせてのほほんと

寝相にもあらわれている幸福度

あなただけ伝えたいのよこの演歌

へそくりは見て見ぬふりをすることに

岸和田市 岩佐 ダン吉

星座仰ぐもう核などは捨てなさい
勝算は二の次筋を通したい
迷走と言うが一点逸らさない
鼻先で笑われた日に腹決まる
多数決派の中で私が消されてる

岸和田市 原 さよ子

停車するたびに目覚めて一人旅
口止めのいらぬお人と小半日
みな帰りはと茶の間でのびをする
さわやかな心にさせた菊花展
つり銭はひいふうみいと念が入り

岸和田市 土橋 房枝

お茶の間で他国の戦火見る無口
家電にも命令されて日が暮れる
母の背を真似て生きたが追越せず
おはようと挨拶したら今日も丸
年金で花一輪を買う至福

岸和田市 森 元 ふみよ

年重ね喧嘩相手の無い孤独
紅葉狩りあの一言で嫁となり
宅配に母の匂いの吊し柿
孫嬉し雪のメールで旅支度
湯巡りのプランばかりが先に行く

岸和田市 井伊 東吉

住宅に塾送迎のバス巡る
リフォームの職人技の手際良さ
情報の管理大国から洩れる
予算取り出来ぬ施策を並べ立て
ボケの出る話に終始クラス会

岸和田市 雪本 珠子

若者に刺激を受けて若返り
失敗を恐れていては芽が出ない
夫婦仲つかず離れず距離保つ
ダイヤより輝いているこの笑顔
鈍行で貴方忘れる旅に出る

堺市 村上 玄也

採める元気ないので妻に直ぐ折れる
熱演も方言下手で興奮める
翌日の筋肉痛はまだ若い
聞き飽きた話相槌だけは打つ
気忙しいだけで年末大嫌い

堺市 加島 由一

一年を漢字で愛と締めくくる
糖質はゼロというので発泡酒
正月は芋焼酎のふる里へ
雨雲の上にはいつも青い空
ドンペリもひとり飲むと味気ない

堺市 齋藤 さくら

長生きは妻の方だと決めてはり
成人の孫を見るまで竹を踏み
車椅子母の笑顔がバネになり
一冊の本が私を変えさせた
薬飲むつもりで野菜食べてはり

堺市 源田 八千代

母はとら嫁はいのしし僕うさぎ
正月も塾とサッカー容赦なし
ウィリーグスばらして欲しい国の有り
営営と寒夜研尋学深し
立春へ幸せ色の福寿草

堺市 和田 つづや

腹の内見せてバイバイするつもり
ありがとうごめんぬるく生きている
高慢になれぬ無学という強味
持病あるいのちに前を向かせてる
年金で暮し夕餉に酒もある

堺市 矢倉 五月

個人的祝日にするバースデイー
耳だけでラジオ体操床の中
切り売りのメロン重宝二人きり
病院の待合室で昼寝する
何本も引く糸持つて裏に居る

堺市 奥 時雄

お金さえあつたら恋も勝てたのに
焚きつけておいて何もせず帰る
今になり堅物嫌いなどほざく
ティッシュのつかないチラシなど要らん
シャッターで道も聞けないストリート

堺市 荻野 象山

ゆつたりに見えて和服はきつうおす
無理をして頑張らないでねえ梯子
酔い醒めてシャツに揮発油脱脂綿
かあちゃんの内緒知ってる台秤
猫と僕使い分けする妻の声

堺市 大隅 克博

お通夜で会つても解らない従兄弟
夕焼けにいい日旅立ち予感する
孫にまで笑われているデジタル化
六桁とも同じ数字は当らない
永遠のテーマであろう嫁姑

堺市 大久保 のん子

疑問符を投げ掛けながら生きている
癒える傷癒えない傷もある心
介助犬盲導犬の持つ誇り
人が来る背筋伸ばして歩き出す
コーヒーの底でもがいている本音

堺市 遠山 唯教

秋の灯に読むか飲もうか思案する
庭先の匂いを運ぶ花さがす
一輛でふるさと走る赤字線
人の業と懺悔にゆれる磔刑囚
枷をするネクタイ靴下が苦手

堺市 西村 りつえ

カレンダーに負けず咲かそう四季の花
さりげなく善は積めず無駄を積み
母さんにまだまだ勝てぬ御節詰め
三面記事殺しかたまで書いてあり
角隠し場馴れしている悟り顔

堺市 柿花 和夫

エンジンのかかりが悪い休肝日
成行きを読んでゴメンを絞り出す
地下街に逃げて普段の顔になる
集落の限界超えたニュータウン
百均を知って楽しみひとつ増え

四條畷市 吉岡 修

猫の手からリストラされるとはふびん
経も書き借用証も書く机
最初から覆す気の生返事
改革案ちらりと見せて先送り
スタートではやり遂げようと思つてた

吹田市 木下 敏子

すんだ事は言うまい朝日美しい
散り際を飾り紅葉の紅く燃え
子は親を選べない子に見守られ
ユーモアに包んでくれた友の情
先ずトイレ磨き心の置き所

吹田市 大谷 篤子

階段は声出し上る癖がつき
時という大きな流れと根くらべ
手を開く溢れるほどの夢がある
美術展帰りみどりの絵具買う
昨日と同じ歩幅で歩きいいのです

吹田市 須磨 活恵

いらぬ事言わぬが仏目をつぶる
厄介な事を言い出すのは身内
きつぱりとけじめをつける句読点
無駄骨を折って淋しい時雨道
お月さま今日も無事ですありがとうございます

吹田市 瀬戸 まさよ

日本より世界的ですオノヨーコ
スーチャーさん髪飾りよし言葉よし
八十路です入れ歯ですヘアピースです
周防大島嫁に行くはずだったとこ
コーヒীরうまさは淹れる人による

吹田市 野下之男

どうしたの喜ばれないノーベル賞

卯年なら丸く優しい世になろう

言う事を聞かぬ体と妥協する

蟻さんに恵みの雨の休業日

アルパカの長閑な顔に癒される

吹田市 山本 希久子

五感もう春ですてのひらが温い

句読点打ち昼御飯晩ごはん

私の血管善玉悪玉も流れ

ここという時にジョークがでてこない

眠ってた痛みときどき目を覚ます

高石市 浅野 房子

目覚めれば足のしびれも目を覚ます

ネガティブを急にポジティブには出来ぬ

金よりも家族がほしい本音です

歩いているだけで元氣と言われます

気まま者に振り回されたことがある

高槻市 指宿 千枝子

酒の味二十歳で覚え喜寿迎え

お土産に地酒の小瓶二つ三つ

卓上の左右に辞書とペン置いて

横文字を雑せて器用な日本語

年輪に白髪も皺も自然体

高槻市 富田 美義

存分に生きろと他人になら言える

不足など無いのに心の緒が軋む

愚痴の玉喉の辺りにたむろする

問診は答ひとつで無いらしい

頼るもの自分しかない残り道

高槻市 井上 照子

お隣の落葉の私語を聞く日ぐれ

呆けぬよう一日おきにバスに乗る

同居して娘の心おもいやる

認知症こわくて他人とよく喋る

大喰いでまだまだ食べる許せない

高槻市 安田 忠子

他人なのに身内以上に仲が良い

お向いに座った男女マンガ的

旅三昧あつと言う間に十二月

満腹へ試食はしごの道の駅

点滴をしながら一句考える

高槻市 杉本 義昭

期待してお誘いページ空けておく

褒め言葉ひとつが変える子のやる気

黒を着て帳消しに行く義理ひとつ

見返してやるぞゆっくり矛を研ぐ

北山杉は迷わず天に伸びている

高槻市 佐 甲 昭 二

几帳面な文字にイメージ湧いてくる
切り過ぎて鬱の溜った花鉢

風当たり耐えて明日へネジを巻く

美味しいもの知らず育った戦中派

母の愚痴たつぷりと聞く一仕事

高槻市 乙 倉 武 史

政局は多端庶民は愚痴ばかり

冬ざれの雨に炬燵で猫という

まだ生きたい欲あり手術ゴーサイン

目から鱗落ちた視界の別世界

積んどくをそろそろ捲る気にもなり

高槻市 峯 村 勳 弘

京の寺窓は紅葉の額縁に

もったいない落穂拾いに見るルーツ

年金の保証を杖に老いの坂

もう一度日本を洗え龍馬伝

うたかたの人生多くは望まない

高槻市 左右田 泰 雄

交差点泳いで渡る人の波

横槍を入れて話をねじまげる

木枯に背を押されて登り坂

楚々とした気品ただよう薄化粧

目の玉を白黒させて跳ぶピエロ

高槻市 生 田 義 一

我が齡席譲られて自覚する
年賀状出せる幸せ噛みしめる

明日からは師走だオデンの香が匂う

尖閣に弱腰見せた平和ボケ

ノーベル賞日本の誇りまた生る

豊中市 安 藤 寿 美 子

秋うららバスの左右はみな紅葉

保津峡をふつと曇らせしぐれ雲

時雨雲私のバスを追ってくる

郵便は喪中あいさつ二枚だけ

支払いに落葉しぐれの道をゆく

豊中市 藤 井 則 彦

匂まで溢れ出そうなるノワール

アイディアの火種は灰の中にある

几帳面過ぎると友も遠ざかる

残り香はギョーザがちゃんと消してくれ

家族的職場を消したIT化

豊中市 松 村 里 江

いい予感ドレスアップも考える

意識する人の背中を見るばかり

見た目とはうらはら涙もろい人

上手下手より情熱を買うて欲し

急にマイク場当り的な答出す

豊中市 江見 見清

畑へ出る軽トラ待たせてる夜明け
コスモスは気取れないから群れて咲く
ぼろぼろの時代欠かせぬ立志伝
すき間から覗いたあやふやなニュース
とことんの合理化あとは気合だけ

豊中市 松尾 美智代

今朝も星ながめ体操しています
ウォーキング少しすぎて昼寝する
五時起きで八時就寝リズムカル
ドラマ見て昼はお好み焼にする
ふるりの星は昔のまま光る

豊中市 水野 黒兎

ハンドルに遊びがあつていい旅路
沖を見るために時には登る坂
赤々と鳥の灯台木守柿
祭果て余韻の残る金魚鉢
鹿威しカランと鳴つて冬が来る

富田林市 片岡 智恵子

熱爛に戦を語る人も逝き
潜む危険備えがなくて憂うだけ
引き際の美学うしろを振り向かず
かくれんぼ見つけてほしいのも事実
恋がかたちになつてゆく糸玉

寝屋川市 太田 とし子

玉手箱あけてみようか独りぼち
ほんやりとお猪口一杯囃んで呑み
この足で天国行きは無理かいな
国会の兎のダンス見て案じ
羽衣の誘いを待つて本を読む

寝屋川市 平松 かすみ

おめでとう七回目です年男
七歳の違いのままで老いて喜寿
交差点手を繋いでる影法師
ふるさとは脳の回路をスムーズに
初対面なのにいい顔してくれる

寝屋川市 森 茜

冬木立ぐんと気合いを入れている
赤ちゃんの指からあふれでるパワー
せかせかと祖母には祖母のカレンダー
歳月や手に静脈の浮きあがる
あなたには無害わたくしにはたんこぶ

寝屋川市 籠島 恵子

十二月の海に流そう悔い一つ
我を忘れ人を忘れてはばたけぬ
谷折りの谷の部分にある祈り
しあわせは一瞬シャッターの一瞬
薄っぺらいままの私で冬に入る

寝屋川市 富山 ルイ子

羽曳野市 安芸田 泰子

もう八十生きた証を残さねば
母の年百まではまだ二十年

家族への祝い渡せる幸思う

喝采を浴びよう皆に逝く時は

海外土産何時でも友にボールペン

寝屋川市 森田 麗

スイートテン記念リングにある若さ

晩成の手相で今に至ってる

子育てと同じ夜泣きの仔犬抱く

あちこちと剪定の音して師走

車庫入れに若葉マークの深呼吸

羽曳野市 吉村 久仁雄

きょう無事に終えていつもの熱いお茶

殻破るためにくちばし研いでいる

水彩画樹水の白が暖かい

誇るもの持たず六十路の軽い坂

別れ道迷ってみても墓に着く

羽曳野市 吉川 寿美

とも綱を解いて男に広い海(祝主幹)

噛みしめて八十路の初春の音をきく

歳末へ貧者の一灯わかち合う

片方を預けた孫の手が温い

馬鹿阿呆間抜けわたしごとです悪しからず

置き去りの時間を探す里の部屋
雪かぶる蕾に託す春の景

ことさらに誓うことなし初日記

一筆を添えた賀状がなつかしい

鬼やらいもう食べ切れぬ喜寿の豆

羽曳野市 永田 章司

決断がつかず占い信じます

ご機嫌が斜めと見れば距離を置き

金星に期待の泥鰌いなかった

斜めから透かし見ている上司の目

マンネリだ初志貫徹と墨書する

羽曳野市 徳山 みつこ

干し野菜わたしの脳も陽に当てる

根菜を炊いてしばらく冬ごもり

やり残し丸めてコロン卵の歳へ

ジョン・レノンまだゆっくりと眠れない

ここに来てヒト科が核に試される

羽曳野市 酒井 一壺

送り仮名閉じて開いて確かめる

閉じ込めた心を開く母の愛

納得の半分分けが決まらない

悔しさに負けぬ根性まだ足りぬ

洩れてほし洩れては困るその秘密

羽曳野市 三好專平

東大阪市 佐々木満作

家族葬と決め夫婦仲直り

禿げてから頭の手入れ欠かさない

受け入れる胸の広さがあだになり

ゴミ箱へ捨てたレシート拾い出し

泥棒が啖呵を切っている歌舞伎

羽曳野市 福田悦子

笑い虫飼っているのと言う若さ

ガタガタの体で空気を吸っている

節分の鬼に留守番させて出る

一人居の淋しさ電話の友がいる

梅一輪春の足音近くなり

東大阪市 中岡妙

図書館でときどき昼寝して帰る

雨の日は畑忘れて朝寝坊

認知症母の時計が遅れ出す

風邪除けのマスク無色の顔になる

巡り来る季に凜と佇つシクラメン

東大阪市 米田水昇

漢字群減ったり増えたりいそがしい

漢字読む当てた人たち得意顔

きなくさい世界平和は何のその

しばむ花咲かせてみたい背を伸ばす

不揃いのきゅうりそれぞれ自己主張

ピンチにはジョークが一番の薬

白浪の音枕辺に聞く朝

プライドを捨てて介護の世話になる

人生の真ん中迷うことばかり

春遠く如月の海キラキラと

東大阪市 北村賢子

懸命にいのち輝かせて生きる

おばちゃんも衣装一つでセレブです

たそがれて我が生きざまを振り返る

わたくしを殺す言うてはならんこと

メイクするしようことなしに鏡見る

枚方市 丹後屋肇

紅葉ふぶき転げる帽子追いかける

秋霜烈日禪締める商店主

小春日に落ち着きのないスニーカー

しょぼくれた背中を故郷の山が押す

爪楊枝ポイ捨てしない僕の町

枚方市 寺川弘一

天罰に時効は無いと信じてる

天の声一人だけしか聞こえない

ノウハウを知っているけど素寒貧

よく当たる天気予報とわたしの予感

遠い日の記憶は淡い水彩画

枚方市 安達 忠 央

お葉は増える一方だが元氣
折れそうな霧囲氣なのにしなるだけ
すみませんの笑顔優しく逃げられる
ポイントをえた采配で次期社長
藤十郎修練重ねるに盡す

枚方市 伊達 郁 夫

風に転け風に縋って風を追う
雑巾の昔の姿聞いてやる
遅咲きの花にもきつと虫が寄る
欲脱いで風の無心と会話する
大ジョッキ今日の疲れを泳がせる

枚方市 小林 わ こ

小引き出し愛のかけらがあちこちに
上段にふりかぶつてはみたもの
欲ばりで二兎をまだまだ追いかける
朝鏡自分探してにらめっこ
懸命に生きる大きな声出して

枚方市 二宮 山 久

単純に生きても悩み多かりき
初詣孫はすっかり大人びて
古き物捨てろと妻のゴミ袋
父の背中思えば同じ趣味の中
ガラス戸を開けて元氣をもらう朝

枚方市 二宮 紫 鳳

竹林の紅葉色増す天龍寺
京楓湯舟に散らし秋惜しむ
押し花に嵯峨野の秋を封じ込め
来る年にびよーんと飛躍の夢描く
影武者に徹して生きる太っ腹

枚方市 海老池 洋

苦手意識捨てて初心で立ち向かう
処世術教えてくれる団子虫
結婚の記念の松も苔の生え
泣くもんか糸口きつとある纏れ
割り切つて風に従う風見鶏

藤井寺市 太田 扶美代

賑やかなだけでわたしの肩が凝る
時々はべちゃんこになる自尊心
膝のあたりから襲ってくる暮色
寒がりの癖して冬の旅が好き
一服をしようよここは日暮れ坂

藤井寺市 吉田 喜代子

孫来ぬか手押し車に犬を乗せ
入院に優しい言葉言えぬ夫
退院に他人に喜ぶ事も言い
見舞客に命貰った医者自慢
庭作り石の重さを肌で知る

クラス会狐狸もいて楽し

てふてふのとんでる母の古日記

蹟くとこいっぱいあつて畳の縁

介護一句会は皆の世話になり

ふる里へ続く山並雁渡る

藤井寺市 増井 ヨシ枝

藤井寺市 若松 雅枝

開戦日シベリヤの父夢に見る

傷口に師走の風が突き刺さる

無病息災願うお寺の大根焚き

正月用品ずらり並んだ御縁日

同じ干支相性良すぎまた喧嘩

藤井寺市 津田 シルク

良かったわみんな一緒に年とつて

生命線くつきり出てるまに手術

天国は満員らしい星が落ち

家の者誰も知らない隠し芸

真実を知ってしまったから不眠

藤井寺市 伊藤 アヤ子

大掃除三時のおやつおあずけに

十二月切羽詰まって動き出す

家計簿が赤字解消してくれる

すっぱい口紅だけはつけておく

裸木ももう春の芽を抱いている

遊覧船水深聞かなきゃよかった

偶に煮ればおでんもすごく喜ばれ

象が消える誰か教えてイリユージョン

うやむやにすれば三日は笑えない

石段でやさしさ見せて株上げる

藤井寺市 俣野 登志子

藤井寺市 鈴木 いさお

黄昏れた脳にスパイスふり掛ける

パソコンの世話にはならぬ年賀状

趣味多忙六十八の今が旬

七転びして舞い戻る元の位置

対岸の火事だと笑う平和ボケ

箕面市 広島 巴子

子午線を虹で書きたい病む地球

あかんなあ国も私も迷走中

暑の年がもやもやと過ぎ除夜の鐘

紅白の葉牡丹門に福招く

吉兆蘭今年も咲いて床の間に

守口市 井上 桂作

死ぬまぎわ後悔しても遅すぎる

有り難う言葉に隠る教養が

脑梗塞なぜか知らねど老い忘れ

季語も消えうがちも消える短詩型

好き放題言つて大臣詰腹を

八尾市 寺川 はじむ

九条が慣れた平和にいびられる
不況風締めても締め切れぬ財布
懲りもせず無駄を承知で奇跡買う
物忘れジョークで済ます老いの知恵
運命に逆らうほどの長寿国

八尾市 村上 ミツ子

心臓の休暇願いは認めない
粕汁で酔っぱらうほど柔じゃない
いのちある句からもらっている元氣
薔薇よりも都忘れに癒される
締め切りへスピードアップする焦り

八尾市 内海 幸生

仏像の瞳優しい日と怖い日と
難民に合点がいかぬ賞味期限
潔癖症すこし度がすぎ浮いている
人道の米の支援に礼の弾
平和乞う心の隙を衝く砲弾

八尾市 宮崎 シマ子

遠慮がちに次の約束した握手
大根煮母はとことんだしに凝り
もみじ祭り長谷の階段のぼりきる
長谷寺の松茸飯は輸入物
正月は実家で過そうお姉妹

八尾市 高杉 千歩

二兎三兎まだ追いかける八十五
呆けてないから淋しい独り膳
以心伝心息子からEメール
乱切りは包丁のせい厨の灯
トマト胡瓜旬が夏だと忘れられ

大阪府 米澤 俣子

これという事もせぬ間にはや師走
追い風はもう考えぬマイペース
あるがまま生きた事みな顔に出る
言わずとも心の奥を読む夫婦
新年へ充電のスイッチ入れる

大阪府 初山 隆盛

カレンダー一枚のこし雪の景
煌めきを知るときめきが失せてくる
急がば回れ教えた父は長寿者
大阪がまだまだ変わる死ぬまへん
喪中ハガキやたらと増えて泣かされる

大阪府 桑田 ゆきの

大根抜く力まだあり自負してる
鳥渡る点になるまで視野の果て
豆を選ぶ母似の背が丸うなる
プライドの欠けらも失せて着膨れる
寄せ鍋へ女の愚痴を放り込む

大阪府 野田栄呼

神戸市 木村貴代子

目立たずに大志を抱くあした花
うす味に徹する嫁の家族愛

もう時効忘れたままの罪いくつ
忘れるからメールに入れて記憶せず

次世代に横槍入れる愛のむち

頼りきる弱さまざまざ年暮れる

暖房を日々延ばしエコグラフ

就活に諦めつけて土に生き

努力した自負が高過ぎ持つ不満

老いの愚痴傾聴するも一つの善

神戸市 山 口 光 久

神戸市 山崎武彦

価値観の違う夫婦の歩が揃う

清と濁織りませ愛はほんまもん

夢を託し金食い虫を飼っている

馬の背を分けた人生だったかも

草臥れた背広が元氣出せという

わたくしの遺伝子継いだ子を案ず

深読みをしても相手がなおも上

叶うなら木洩れ日ほどの愛でいい

後輪がそむいて前へ進めない

お言葉を返してからの反主流

神戸市 山 口 美 穂

神戸市 早川孝子

シヨパン聴くしばらく冬の旅心地

ルミナリエ一つの記憶繋いでる

うっかりの握手が病魔だったとは

ゆっくりと知らない町を風ふわり

脚の愚痴きいて宥めてから朝餉

継ぎ接ぎのわたしらしさを生きていく

わからない余命質素に生きてます

夢一つ叶える種をブレゼント

いたわりに感謝少うしだけ淋し

知っていたはずのふる里変わりゆく

神戸市 伊勢田 毅

神戸市 田中章子

その時は郎党率い旗あげる

おひとりさまやはりわたしに似合わない

拉致解放その時を待つ母も老い

信じてるニッポン人の底力

どん底で手紙をくれたよき友よ

ニッポン人いつまで耐えているのかな

入れ歯外すとボスが漫画の顔になる

孫去つて家から歌が消えていく

親分が奥で数える上納金

はやぶさの一字いたたく孫うまれ

相生市 中塚 礎石

尼崎市 林 昭三

酒もいて原稿を書く四畳半
おっさんと言われ素直にハイと言う

終着の駅へ男と女つく

表より可愛く見える裏の顔

正直にしゃべると高い波が立ち

芦屋市 黒田 能子

よく喋る妻は毎日楽しそう

留守ですよただ今わたし昼寝中

何もかも胸におさめている笑顔

失敗は数えだしたらきりが無い

幸せだな白いご飯が食べられる

芦屋市 竹山 千賀子

姿見にもみじの手形置土産

ネイルアート八十路の指がつけたがる

丸めてる餅はいつしか亡母の顔

生命線ぐーんと伸びる里の風

たむろして世間話の通夜の客

尼崎市 加川 靖鬼

主語述語使わないけど猫しゃべる

突風がかすめてくれた屋台骨

露天風呂猿も枯葉もお湯が好き

一寸した噂の波がうねり出す

ホラ貝の殻に狼煙がひそんでる

また選挙直ぐ代るから忙しい
日本が沈むのではと誰に聞く
故あって移り住んでの医者探し
老い二人寄り合つてジョギングに
ばあさんと株式にしてジャンボ買う

尼崎市 春城 年代

眉をひく絵を画くかまえして描く

わがままな日常老いの幸せ度

歳経ればあなたの影は薄らぐか

苦手が増えてこの先どうして生きようか

忙中閑塗絵に遊ぶ十二色

尼崎市 藤岡 りこ

天下取り数を揃える手を結ぶ

橋が出来塩飽諸島は姿変え

大阪の女安い買物自慢する

セール前の値札剥がしてほくそ笑む

家出した猫を捜しに月明かり

加西市 金川 宣子

五十年胸にあふれるバラ抱え

辻褄が合わぬ言い訳スルリと出

猛犬と小さく書いた小型犬

街角の信号守る老いと孫

海老様の謝罪会見芸のうち

川西市 西内 朋月

赤丸が増える師走のカレンダー
仏壇に座ると母の声がする
孤独死を怖がつているキリギリス
東京のうどんの黒い汁残す
血圧を気にする食事味気ない

川西市 米原 雪子

爆笑の輪の中に居る温かさ
貸した本何処を旅しているのやら
取り立ての味と友情噛みしめる
虫メガネバッグに入れる必需品
境内がカメララッシュの七五三

三田市 久保田 千代

目立たずに愛されたいと薄化粧
身に覚えあつて天罰受け入れる
正座した亡母の無言の背が叱る
さあ行こう またあたらしい世が明ける
心機一転促し年が明けてくる

三田市 北野 哲男

五十年貰ろてやつたと来てあげた
古里を結び直した国訛り
衣食足り屁理屈抱いているニート
銀行の前の前の名ある通帳
胸を借るつもりと言うが秘策あり

三田市 堀 正和

上げ潮になるとお金のこと忘れ
マイク持つカラオケマニアらしい指
腹八分おやつが二分でご満悦
ライバルがときどき活を入れにくる
風邪気味とたつぷり酒を飲んで寝る

三田市 白井 二英

病名を探すためです治験薬
知らぬ間に時が解決してくれた
聞かなんたらよかつたのにと
義歯入れてカラオケ向きでない
あかつきよ六年先を待つてゐる

三田市 福田 好文

歳月が優しく癒す恋の傷
最大の奇跡この世に僕が居る
弱虫か意志が強いかわ煙家
一人部屋あるから出来る引き籠り
厚化粧一度してから止められず

三田市 石原 歳子

喜寿祝う子らに夫が照れている
風に揺れ人に踏まれて咲く野菊
十年も続けた日記止める夫
とんでもない処から出た保険証
我が家から見れば鯨に見える山

西宮市 山本 義子

無人駅の灯きつと天使だと思ふ
LEDの灯りの下でうどん食べ
ゆるりほろり蛍光灯はけなげなり
篝火よ恋の字もはや失せにけり
不意でもコンビニオールナイトの灯

西宮市 牧 淵 富喜子

思つたら即の日もありドアを押す
ひきこもり勝ちも自然よ冬の日
早く年とりたいなぞと思つた日も
よほどの用なければ二階あがらない
山茶花も水仙も咲く誕生日

西宮市 藤 本 直

雨色の心で友の悩み聞き
齒のパーツ入れてさしすせ少し洩れ
色気ありまだ裏側は見せられぬ
言い訳と謝罪のけじめ曖昧に
開けるのが怖い親父の古日記

西宮市 秋 元 てる

神の名においてとテロの恐しさ
意地を張る自分がとてもいじらしい
図書館の動かぬ本と似た老後
閉められると困る馴染みのお店消え
間を置いて届く幸せほんものだ

西宮市 亀 岡 哲子

行儀よく育つた三女犬のハル
違ちゃんのような孫ならしんどかる
花生けてほかほかお城マイトイレ
先生に似てほんわかナース達
いざの時やっぱり嫁よありがとう

西宮市 足 立 茂

吸い殻が短くなった自衛策
前略にしたら身勝手だけ残り
猛練習に耐えた本音はあとの酒
誘惑に負けた数だけ出るお腹
額に入れる賞などないが皆勤賞

西宮市 片 山 忠

ここでしか本音を吐けぬカウンター
墓なんて要らんと妻は拗ねたまま
灰皿がないのを妻はうれしがる
空を見よ何かヒントがあるだろう
好きな方持つて帰つたのに不満

西脇市 七反田 順子

輝いて希望の星で生まれた子
誕生日家族の星である証
感動が肥やしになっていく右脳
夕映えに語りつくせぬ事がある
アレルギークシャミ一発奮起する

姫路市 古川 奮 水

老けた身に合わせて朝の予定表

初詣で神のご機嫌とる財布

二次会の席落ちつかぬ恐妻家

能面の視線の中にある闘志

幸せな明日を神は保証せぬ

奈良市 天 正 千 梢

にぎりめし砦を守る味方です

流れ星ポケに入れて帰ってき

カーナビで地図が読めなくなつて来た

慎重派出口を先に考える

嘘発見機ほんとは分かるかなあ

奈良市 米 田 恭 昌

夜のプランコ志村喬が偲ばれる

案の定一夜覚えがけつまずく

職人のこだわり息吹く小さい庭

幾星霜年の差こえていい夫婦

今の世に龍馬在りせば何とする

奈良市 阿 部 紀 子

如月に行事のように風邪をひく

龍馬の死解っているが胸いたむ

懸命のママの稼ぎは塾のため

うかうかと話術に負けて鍋を買う

気楽さと引き替えにする孤独の死

奈良市 岩 本 浩 二

卯の年だびよんぴよん跳ねてみるがいい

赤い糸手繰り寄せてからの縁

うやむやにさせじと妻に締められる

いっばしの庭師気取りで木の手入れ

振り向けば妻が拳骨上げている

奈良市 辻内 げんえい

申告書妻は同居と書いておく

ピンポーンに起こされて出る寝ほけ顔

職業に貴賤はないがある格差

木枯らしが庭の落ち葉をお隣へ

庭師まね刈り込み過ぎて丸坊主

生駒市 飛 永 ぶりこ

卯の年もピンピンせずに私流

遣り抜いた役で自分を誉め上げる

女のペン仲間の絆ぬつくぬく

会計の引継ぎほんに軽くなり

気の弛み風邪にするりと居直られ

橿原市 居 谷 真理子

日記焼くやがての冬に立ち向かう

快晴だ真っ正直に喜ぼう

たましいのゆりかご図書館に居る

海の音させてパジャマの貝釦

冬になる介護ベッドをかたづけ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

和歌山市 松 原 寿 子

沈黙考自分探しの途中下車

和の心しつかり握る手が温い

ここ一番場数を踏んだパフォーマー

冠婚葬祭問答無用の一張羅

人間百態喜怒哀楽の小豆粥

奈良県 渡 辺 富 子

人は人無縁社会の隅で生き

意味不明の笑い溢れているテレビ

青い実が内定急ぐ群れにいる

自転車漕ぐあの日の君に逢いたくて

暖色に模様替えして冬ごもり

和歌山市 福 本 英 子

主が無くて本音を聞いた平和賞

謙譲の美德で日本銀ばかり

丁寧な態度に油断した判子

箒目が綺麗に立ったのに来ない

鈍感になったら楽な十二月

和歌山市 古 久 保 和 子

三食を差し向かいして欠伸して

スリッパのあべこべ誰も気付かない

バラに刺なければ甘え癖がでる

シャッター街風がノックをして通る

アメ玉が溶けないうちは黙秘権

きつちりではないが火加減水加減

すつきりとするまで腹を割って見せ

砂浜に書いた儂いメッセージ

レモン噛じつてあの日のドラマ包み込む

おんな三人風と空気を読みながら

和歌山市 岩 本 美 智 子

認知症始まったのかよく食べる

体重計朝夕睨み風邪をひく

札束は魔法使いか人を変え

廃屋に亡友を偲んで月と居る

師走きて襖にあげた穴睨む

和歌山市 田 中 み ね

人生のゴールは遠い自己暗示

誤字脱字指摘するには偉すぎる

有終の美かざる一句がいまんとこ

言いにくい事をずばり貴女がうらやまし

イケメンが痛いめに遭う三次会

和歌山市 玉 置 当 代

意志弱く今日も喘いでいるメタボ

奥深い料理もてなす母の知恵

込み上げる涙をこらえ鍋磨く

党内が揺れて陰しくなる師走

黒幕に操られてる腑甲斐なさ

和歌山市 武本 碧

忍耐という化石にちよつとつまずいた

いたずらな風が内緒のページ繰る

仕事良し体調よして旅に出る

一夜干しすればストレス丸くなる

黄昏を朝日に変える心意気

和歌山市 木本 朱夏

念入れて包丁を研ぐ十二月

わたしにも忘年会がふたつある

着脹れてイエスタデイを聴いている

十二月壺を逆さに振ってみる

盛り場のネオン壊れたまま師走

和歌山市 松尾 和香

四季の彩あつて住みよい長寿国

はるばると辿る古道に母の影

ひとり旅はるばる来たよ地平線

生かされて若さ挽回する命

命かけ名誉挽回した無罪

和歌山市 上田 紀子

マンネリヘスパツとれもん振り掛ける

せつがちで後先もなく出す答

一杯のコーヒー飲む間のイエスノー

高すぎてあつさり散った志

何にでもチャレンジしたい六十路坂

和歌山市 堀 富美子

何時からか気楽な方へ転ぶ癖

リハビリの靴捨て切れぬ夫惚ぶ

マジシャンのように雲行き変える友

トータルをすれば自分史悔いはない

一病がわたしのビジョン曲げに来る

和歌山市 坂部 紀久子

年金に正月来ると叫んでも

ところろと弱火誤解の解けるまで

玄関を口から入る友が来る

言いたいこと先に言われた落ち椿

決められた枠字余りの不動産値

海南市 堂上 泰女

菊活けて温こうする応接間

ハイセンス嫁は都会の匂い連れ

小一と大きき競うシャボン玉

リサイクル店で学んだ社会学

バーゲンまで女心を鎮めてる

田辺市 岡本 昇

寝たきりも天引きされる保険料

年金と取っ組み合つて生きている

職退いて家事半分こして暮らす

グリーン車で大名気取りきこちない

それとなく豊さ気取るクラス会

鳥取市 倉益一 瑤

セツとして少し斜めに見る鏡
美容院の椅子で答がふと浮かび
ヤバイです隠した場所がわからない
たかがお金に翻弄されているヒト科
野菜高騰モヤシがたと鍋の中

鳥取市 夏目一 粹

このごろは言葉置いて帰る癖
ストレスに疲れて爪のしろいこと
真っ赤に染まっている戦場の川
息すれば崩れそうな死期のバラ
コスモスがみんなやさしく咲いている

鳥取市 武田帆 雀

新聞を縛るスーチャーさん縛る
愛嬌のいい娘置いてる案内所
口下手を知ってる友よお甲い
趣味雑多今日は朝から囲碁の会
長老も一役付いた初春の講

鳥取市 土橋はるお

カラオケのない新年会は欠にマル
くじ引いて議員になった候補者も
握手した時にインフル貰ったか
欲捨てりや悔しい事もなんもない
男の尻すっこく悔しがっている

鳥取市 中村金 祥

勇気ある海保を裁くヤジロベエ
三度見て三度泣かせる朝ドラマ
政権を取って持論の格を下げ
趣味の会ここもキーマンにはなれず
主語のない会話がはずむクラス会

鳥取市 吉田孔美子

小三が漢字テストを持ち掛ける
湯加減にうるさい父の鼻歌か
手を繋ぎ陶酔 春の美術館
若芽採り竜宮城へ行ったらし
探すまい明日になれば忘れてる

鳥取市 加藤茶 人

まず握手それから何もかも生まれ
郷愁を誘う自民か昭和史か
ダイエツトするなら初めから食うな
それぞれの四季を満喫して紅葉
ひとくくり女はケーキ好きと決め

鳥取市 西川和 子

一病を抱えて祈る神仏
この命医師に預けて大手術
一心にお経唱えて待つ奇跡
病室にそうつと照らす冬日差し
穏やかな笑顔に戻る日向ほこ

鳥取市 宮 脇 道 子

何事にも自信なくして老い暮し

血や骨に筋肉までも背く老い

おでん鍋湯気の向こうに愛がある

曾孫が生れて苦勞一つ増す

老いの引出し鍵がないのか顔を出す

鳥取市 奥 谷 彩 子

一期一会なさけに触れる旅に出る

移る星ないのに地球核を抱く

夫という波に揺られている小舟

空気読めぬ雑魚の正論火を浴びる

いい家族素直に言えるありがたい

鳥取市 池 澤 大 鯨

安楽死なら死に神よ憑いてよし

死に神は読経しながらやって来る

死に神よ呆けて俺に取りつくな

死に神がつけこまぬよう無神論

死に神に弱点あれば教えてよ

鳥取市 太 田 幸 枝

満ちたりた生活にすぎ間風が吹く

努力では出せぬ品格紋所

このごろはリモコン押せば世界見え

人間に疲れて愛犬とくらす

どん底へ一本下りた命綱

鳥取市 鈴 木 一 弘

履歴書の裏は幾多のしま模様

枯れ落ち葉まだまだ役に立つ未来

共白髪米寿の坂を越せなんだ

米研げば妻の姿が鍋釜かま

突然に閉まって開かぬ母の窓

鳥取市 永 原 昌 鼓

人間は欲張り金も名も欲しい

母さんの愛は百でも目減りせぬ

老いの日々この指止まれもう言えぬ

雑草にいつも負けてばかりいる

いい事も今にあるよと言ひ聞かす

鳥取市 有 沢 せつ子

一年のあいさつ託し賀状書く

川柳を愛して脳へ活入れる

健康へごまの土産がありがたい

大きめのズボン体が合ってくる

新品の傘に時雨が心地よい

鳥取市 近 藤 佳 子

体力と相談新刊書を二冊

柿 胡桃 栗 秋の贅ありがたし

裏山万歳松茸がこんなにも

よく生きてきたなとふり返る米寿

学芸会の姫村長のお孫さん

鳥取市 岸 本 孝 子

ライバルが転けて萎んでいくファイト
あと少しだからあなたと居てあげる
雨降って地固まらぬのがご時世
露天風呂月と落葉とわたくしと
円高もヴェイトン シヤネルはまだ遠い

縄のれん人間臭い酒を飲む
四島も基地も綱引き終らない
おしゃれを忘れ夫に失礼だと思ふ
背丈越す孫に説教やほなこと
湯船には無欲にさせる神がいる

鳥取市 田 村 邦 昭

感謝される人あって余生いく
孫成長皇帝ダリヤ見るように
たまだから一人も楽し孤独好き
ひっそりと野菊にぎわい聞いている
人間は怖い見守る登下校

住みにくい街を移って畑仕事
無人駅栄華の頃を忘れない

二番でいいしっかり走る跡をみる
ちぎれ雲愛がだんだん遠ざかる
ハミングが合わずに二人仲がいい

鳥取市 平 尾 菜 美

鳥取市 高 浜 勇

エイヤツと乗り込む舟が揺れにゆれ
伝統を受け継ぐコピーいい流れ

コスモスとほのかに揺れて今日も暮れ
ぼろぼろと向き合う土に出るやる気
農婦という誇り日焼けの笑顔かな

鳥取市 深 澤 千 恵 子

鳥取市 池 原 天 馬

階段に足の衰え聞いてみる
いやな夢見た日はそつと息をする
霧吹いて障子と私しんとする
飽きられる同じ自慢はほどほどに
長い目を持てば未来が見えてくる

とむらいのかたちを語るとしとなる
二酸化炭素減らす努力を禁煙で
政治家の品格野次で試される
親ガニを食べていのちの深さ知る
野焼きする田舎暮らしを実感す

鳥取市 中宇地 秀四

呑んでても仕事してても朝が来る
階段を登りつめたら穴がある
未だ先があるか自分史まともらぬ
戦争の地獄を知らぬ平和ボケ
サンプルを集め家計のたしにする

鳥取市 稲村 遊子

速達でその日その日を繋いでる
ストレスの元はあなたと言いません
風船よ少し力を抜きましょう
柚子の香へ冬の楽しみ一つ増え
影つけて余韻を少し膨らます

鳥取市 田中 一眸

仮免許ならば報酬いらぬはず
ハミンクの妻に今なら言えそうだ
宝くじハワイに行けるほどでよい
お前もか春を待つてる寒すずめ
人恋し白湯を飲んでる日暮れどき

倉吉市 猪川 由美子

裁判員重いし恐い後を引く
イラ菅空き菅政務こなすに野次しきり
不始末の子の謝罪へと父哀し
郵便法案いつしか皆忘れてる
クリスマスケーキ老いてもやはり食べたがり

倉吉市 山本 玲子

聞かぬふり忘れたふりでよいお婆は
三猿になると人間らしくない
豆撒きの年の数だけ噛めぬ義歯
老いて益々叶うことなし整理下手
祭り好きもう泥んこの白い足袋

倉吉市 山中 康子

くりやから火花を散らす朝一番
経上げてこの世あの世を引き合わす
好きだからはすかいから上目使い
じいばあの短所が孫に出てしま
追いおいに黄泉に近付くのも知らず

米子市 白根 ふみ

神無月留守の社の落葉掃く
今日までは小春日急かす冬仕度
よく冬日射す建売りがもう売れた
日陰からめきめき濃いくなる万両
蓼食う虫もこの世不思議なバランスが

米子市 吉田 陽子

定刻の食事我が家もケアハウス
追い越されながらも高いとこめざす
うちのポチ首輪外すとうるたえる
いとこ会お別れ会も兼ねてする
つじつまがまだ合っていない歳の暮れ

鳥取県 細田裕花

小春日はビクニックです畑仕事

しゆくしゆくとして正月準備する神社

ごきげん直し孫の話題を振ってみる

デパートに時間ドロボー出没す

多忙でも笑顔下さい十二月

鳥取県 北村稔

ほれてます だけどお前はそっぽむく

川柳の資質なくともやめません

あしたからタバコ止めようあしたから

民主党がんばれ自民今割れる

どうしてもだめかこの俺極楽か

鳥取県 山下節子

秘密には出来ぬ隠した場所忘れ

ごり押しが過ぎて世間が狭くなる

キーマンは父ではなくて母だった

年末に道路工事をする不思議

影法師びったりついて元気です

鳥取県 西谷悦子

季の移り一喜一憂して暮らす

きょうの風何色にして過ごそうか

ため息を濾過して清い息を吐く

横並びへしあわせ感を持つ世かな

ひよいと草抜くわれの指核のよう

鳥取県 竹信照彦

雷も師走の雲の上走る

本年も二回潜ったガン検査

新野菜種からよくぞ育ちけり

鍋物にどっさり自作野菜入れ

大雪も降らぬと困る生態系

鳥取県 松川行男

あの人も幻だった一人居て

戒名を口出しせずに入終る

結束はホッチキスでもまかせよう

追伸が本音ですからくどく書く

追伸を書き終えてから悩みだす

鳥取県 岩崎和子

ポツポツ屋でそと風呂目指し線路越え北海道住まいの思い出 2句

風呂帰りタオルバリバリ風が追う

師走の雨冷たくドアを叩きます

素晴らしい師走の日差しありがとう

掃除して花でも飾り年越そう

鳥取県 斉尾くにこ

腰おろす階段ちようどいい高さ

本を手にきみが座っていたベンチ

脱ぎ捨てた殻に残っている温み

気づかないはず幸せの色は地味

大空を鷹はお腹を見せて飛ぶ

鳥取県 鳥越 鬼一

円が上がればだれかがもうける
秋風が吹くと旅心が疼く
夢乗せて銀河鉄道旅遙か
廃線のレールの上をウォーキング
人間であることの幸せ不幸せ

鳥取県 深田 俱久

ふる里の野山に抱かれ年迎え
2011年初日平和に降りそそぐ
如月の空へ予感の胸躍る
上品に笑みをたたえて招き猫
予言ダコ二世何処にひそむやら

鳥取県 山本 正光

日本を甘く見られる訳はない
良友と飲み合いはなし刺がない
美しく見せる角度に座す女
雪積る遥かな亡妻の顔に合う
酒たばこ迷路の最中止められず

松江市 三島 淞丘

椅子取りゲーム妻子が背なで旗を振る
正論の通らぬ国と居る恐怖
通院の予定でつまるカレンダー
嘘ひとつ残して見舞いから帰る
親猫の構え私を寄せ付けぬ

羨やまぬ嘆かぬ何もやりませぬ
そのうちにと電話切る 大阪は遠い
打たれた杭同士で酒を飲んで
労りもないが喧嘩もないひとり
燃えるゴミか燃えないゴミか私は

松江市 松本文子

背中から呼び止めようか止めようか
山ぼうしもつすつかりと裸です
富山から笹巻き寿しがやってきた
断りもなしに割り込む十二月
ニコニコと老連だよりやつてくる

松江市 川本 畔

日々好日婦唱夫随で円満だ
金引き出し監視カメラに睨まれる
バスツアー土産のメモを持って出る
初詣でおみくじに吉にまた祈り
福袋小さいけれど重たいな

松江市 小川 注湖

冬告げて赤いさざんか庭に咲く
テリトリー越えて進んだ足痛む
山好きは山に抱かれ無とならん
花燃える大地がくれた底力
肩書きは無しボランティアフル稼働

松江市 松本 知恵子

出雲市 岸 桂子

授業料送るばかりの片便り
受信料前払いしてテレビ見る
悲しみを残さぬように顔洗う
弔いに行く歯磨きを念入りに
見栄張っているネと影に笑われる

出雲市 伊藤 玲子

息災の願いをこめて米を研ぐ
足癒えた白眉の夫に茶を淹れる
初夢を大事に仕舞う丸い箱
眼鏡かけかえ双六の仲間入り
初曾孫玩具のピアノ買ってくる

出雲市 石倉 芙佐子

粉雪にあつちこつちと鶴鶴
ゲームならゲームと言つて欲しかった
理屈ばかり言うから好きにはなれない
花はもう過ぎた昔は語らない
無に還る唯それだけのことなのに

出雲市 富田 蘭水

葉が落ちて糞虫ぶらり心寒い
生きている幸せ炬燵で夢をみる
腫れる足まだまだ歩く幸せが
思い込み笑いですます癖が出る
報恩講亡き父母にあえるかも

出雲市 小白金 房子

カレンダターのうさぎ舞いこむ農曆
大根がぼつてり煮える冬の味
カサコソと古道えにしの音を踏む
廃止線桜並木も冬の顔
新豆の出来ころころと胸算用

出雲市 多久和 敬子

ややこしい話消しごむ消してくれ
人並みの幸に気づかず愚痴こぼす
ポケットの中から本音顔を出す
甘い汁たっぷり吸った里帰り
父と子が同じ仕種で同じ声

大田市 伊藤 寿美

道しるべここから坂と書いてある
コンパスを回すわたしのテリトリ
負けて勝つ笑顔忘れぬ吾亦紅
にじ色の絵に点景の亡夫の舟
「シューマンの指」あなたがくれた図書カード

島根県 持田 多輝子

戦争を偲ぶ傘寿の生き残り
天国へ帰る柩の一人旅
腰曲げてセンスもロマンもなく老いる
ひたむきに川柳愛して師を偲ぶ
我が歩幅日ましに狂う老いの日々

真庭市 福嶋 智恵子

都会から息子が帰る無人駅
師走でも何も変らず田舎道
錦秋の山を背にして和む老い
姥桜と言われようともし着室
本当にどこから見ても亡母に似て

美作市 山本 玉恵

月の雫を浴びて女のひとり酒
天の神地の神もみじ七彩に
平凡も苦難も越えて来た踵
今は亡き人冬枯道は音を失くして
遠い日の私がここに日向ぼこ

美作市 福原 悦子

歳月が期待の台詞消して行く
聞きなれた足音恋し夫の忌に
苦も楽も越えて人生生きている
奥の手は敵に心を読ませない
ささやかな願い晩学実らせる

竹原市 時 広 一 路

生命線私に保証してくれる
天気予報用は無くとも今日も見る
年金へ様をつけたい歳となる
家計簿も妻の入院知っている
欲は無い口では言っているのだが

竹原市 岩 本 笑 子

カサブランカ娘が羽ばたいて行くのです
みかんよみかん寂しくはないか冬
おめでとう夫のお屠蘇を正座して
平等にかつ確実に歳もらう
そろりそろりと夫と歩いて行くつもり

竹原市 石 原 淑 子

湯けむりに心とらぐ大晦日
紅白の南天の実の消えた朝
だいじょうぶ大丈夫だよ祖母の顔
七年の地中の蟬を知らぬまま
凧がすぎた北風苦にならぬ

府中市 岩 本 雅 代

金と暇なくても楽しく指を折る
霜柱根性で踏みしめウォーキング
恙なく年を越せたら福寿草
忘年会ぐちも笑いも鍋の味
自然薯の粘りのそばで年を越す

府中市 馬 場 利 子

古里の父母の温もり掘炬燵
コップへ満ちる地下水のありがたさ
介護される身となり命の対話
宅配のリング訛が弾けそう
字余りの不快消しゴムでは消えぬ

真庭市 国 米 きくゑ

人前結婚笑いの渦と福の風(孫結婚)

温かい笑いの波の披露宴

爺ちゃんの遺影に熱燗披露宴

杖ついて孫と花道ツーショット

幸せなドラマにしよう春のペン

宇部市 平 田 実 男

評論家そんならあんたやってみな

生きていることを確かめ合う賀状

棘のあるところが魅力のバラと美女

妻手術待ってるほうの胃も痛む

欠点の一つ二つはエクボかも

東かがわ市 清 川 玲 子

四面楚歌横の夫があたたかい

亡母さんと呼んで安まる気の迷い

やさしさも怖さも秘めて川流れ(柳友十五名と四万十川観光 2句)

穏やかに流れる川にあった過去

六人の天使に弾むお年玉

東かがわ市 原 賢

残り火の一つ一つが消えて暮れ

携帯に友を一杯入れておく

失ったものを見付けに旅にでる

さようならは言えずさくらは風に舞う

うっかりと本音も吐けぬ風に逢う

東かがわ市 川 崎 ひかり

安住の地と決め墓地も買いました

満席の首を動かすガイドの手

四季通じ主人が作る無農薬

大安吉日静かにはずすしつけ糸

すぎに亡母の手垢の跡がある

東かがわ市 伊 勢 八重子

結願寺一期一会の旅終る

寒気団老いを急かせる暮れの街

愛情の深さを想う手の温み

老い二人休耕田を持って余し

過去ばかり自慢を種に日向ぼこ

松山市 古手川 光

一線引いて出直しなさい除夜の鐘

政治家とは答えを龍馬伝に見る

振り返る猫ユーモアを知っている

ビルの街騒音バックミュージック

食欲旺盛記憶力激減

松山市 高 橋 宏 臣

円周を歩きつかれた冬帽子

言い足りぬ言葉をはいて藪になる

非常口に近いところで吠えている

追伸に棒が一本引いてある

哲学は持たぬ果て無き難破船

松山市 宮尾 みのり

雪月花理屈なんぞは小さいこと
老衰を待っているよう過疎深し
変り者先々代もそうでした
長男の律義他人の荷も背負い
感性が豊かな人は避けておく

(前月号) 山口市 安平次 弘道

地の果てに飢餓の国あり募金箱
人命の軽さ三面記事ですみ

すぎる目に愛の両手が小さ過ぎ

ゆるやかに仕返しがるメモの私語

力にもなれずにお茶を入れかえる

柿花和夫

〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東二丁目一八五
電話 ○七二二六四一八二六

古今堂蕉子

〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東二丁目四一九
電話 ○六一六六七五八五六二

寒中お見舞申し上げます

なにわ柳壇今年の10秀

— 22年12月18日朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

川柳塔社理事長 西出 楓案選

最優秀句

大胆な政策を待つ蟻の群れ

三村 一子

秀句

遊行期の声が沈んでゆく谷間

太田 昭

赤い糸三千世界キミとボク

村上 直樹

丸ひとつ描かれた軸と睨み合う

高谷 まさ

正直に自分の彩で花が咲く

寺川 弘一

荷を一つ下ろしバランス悪くなる

松田 博之

煮炊きする妻の背中が母に似る

鳥居 宏

人生は黄ばんでからが面白い

武内美佐子

薫風を野菜サラダに混ぜておく

西村 秀昭

シンブルに叱られるほど身に染みる

小田 忠秀

番傘川柳本社幹事長 田中 新一選

最優秀句

戦争と平和を知った長い旅

織田多哥子

秀句

あの世ではのんびりすると笑う母

前原 正美

もの言わぬ後ろ姿に情が湧く

舛田 治子

寿命延び笑ってばかりいられない

伴 洋子

孫の絵にピカソを超えるものがある

藤井満洲夫

甘くない余生それでもまだ死ぬぞ

多和田幹生

これぐらいで済んだと思うことにする

吉道あかね

何もかもこぼし寂しい箸の先

中川 正子

皇后様園児視線にしゃがまれる

吉松隆太郎

全力でのらりくらりと生きている

佐藤 盛夫

白選集

小島蘭幸

紋太展神戸の優しさに触れる
菩提寺の銀杏てのひらにいたたく
毒舌という優しさに触れている
暇を持て余すか退院後の母よ
風の街マスク美人とすれ違う

林瑞枝

地平線の先まで見える鶴の首
濡れ紅葉ぼとりわたしの地図を染め
低血圧のペンは月夜によく走る
勉強家ですな手垢の辞書を褒め
人柄の良さ商談も洒落ている

前 たもつ

あかつきよ元気で会おう六年後
内憂外患ばくは内湯を一人じめ
三冊め十年日記は重くなり
もう六年恩師と夢で繋かれる
重荷背負ってやっと見つけた拠り処

政岡未延子

満腹になると上品さが緩む
痛み止め打ちつつ遊びやっています
人間の芯がひとつずつ痩せる
人間の弱さが鍵を束にする
熟睡しても人間崩せずに

三宅保州

幕引きはチントンシャンで終わりたい
惜しむらくは故人に聞こえない弔辞
いやかんにんどすえと言われ怒れない
大番頭に頭上がらぬ三代目
夕焼けは今日の褒美だなと思ふ

宮西弥生

おまけだけ生きて今日もありがとう
小きごみに生きて小きごみ手抜きする
A型がひとりごとことんまで粘る
割り箸を割り困いから外す
津軽からリンゴ華やぐ日の師走

八十田洞庵

長生きをせねばバイブル読み終えぬ
ダイエツト秋の味覚は舐めるだけ
お犬さまにもファッションがある散歩道
落ちこぼれにも先生の目があたたかい
縁を切る男へ胸の透く啖呵

両川洋々

傷口を舐め合う君もリストラか
天を恋い地を恋いなぜに人嫌う
あの世まで律儀な影よついで来い
談合を神が盗聴しているぞ
ケセラセラ金は天下を回つとる

板尾岳人

ひらひらと情けの薄い雪が舞う
もう一度キレイな母に抱かれたし
傘寿とやナポリ観ずとも死ねる歳
ノルウェイの森に忘れて来たメガネ
母を抱く父を妬んでいるホタル

奥田みつ子

暮れの街泣くな泣くなとカラス鳴く
我が儘は承知でイヤなものはいや
底なしの淵に琴の音母の声
露の薑見つけ心が澄んでくる
草の芽に胸がだんだん熱くなる

河井庸佑

小競り合い後味悪さだけ残る
親切も程度にして喜ばれ
体力の限界知ってマイペース
冷静になって思案の善後策
一石を投げて見詰めている波紋

川上大輪

もう師走結局何もしていない
何色の信号になる大晦日
昨日今日明日もきつと葱刻む
サンマ焼く猫は一步も動かない
子は宝子どもは別の事思う

木村あきら

胸襟を拓いて語る友が居る
糸切った凧奔放に空駆ける
適当に曲って屏風立って居り
奥の細道卒寿記念に句碑一つ
幾何の余命に笑顔絶やすまい

小西雄々

六甲おろし聞きたい弥生まだ序曲
鬱の字が常用漢字寒すぎる
妖怪へ漁業の町に鳴るピアノ
まだやる気あり憶説へ迷わない
初陣に狙撃をされた思い出も

斉藤 焔

父に似た羅漢ぶるぶるして雪に
上向いて生きろと朝の飯が炊け
感動が染みてる甲子園の帽子
竹とんぼ小さな夢を子と飛ばす
形容詞据えるイメージ変えたくて

塩満敏

今年こそ憲法九条の出番です
沖繩の基地よ本国にお帰りよ
開通の新幹線で墓参り
その内にピンピンころりしてみたい
せめてもの私も米寿まで生きたいな

新家完司

昇天方法等熟慮誕生日
私的最后高速道激突死
理想的昇天泥酔後溺死
平和賞拒否幼児的外交国
五星紅旗強圧再燃黃禍論

恒松町紅

酔い機嫌になると軍歌を口ずさむ
新聞をまた読みかえず外は雨
忘れないようにと書いたあの手帳
億劫になるのも老いてきた証
あれもいいこれも惜しいと仕舞いこみ

津守柳伸

大鍋で炊くぜんざいの厄払い
一病息災神経質な神頼み
予約したお節で文句聞き流す
殿方にすまぬでつかい女性風呂
あるがままなるようになる体脂肪

遠山可住

イトカワでだあれも知らん知らん星
目薬を八回さして日が暮れる
まだ生きてはったか九十八訃報
ブービー賞恥ずかしながらお見事で
ストロブへ蠅がお寒うなりまして

都倉求芽

暮れる窓ポインセチアに灯をつける
日が暮れるまでカーテン喋らない
地下鉄も四季に馴染んだ窓ガラス
決めている歳暮に妻はまた迷い
古傷に触れないように書く日記

土橋螢

東雲に合掌いのち新しく
報恩講終りの鐘を三つ打つ
真つ黒になる悪人の影法師
驚くなかれ我が齢と生きざまに
あなたからもらった愛をよく磨く

中原諷人

鐘楼に明かり煩惱など消える
たき火する耳朶赤い難聴に
母を看るカラクリ劇の助演賞
芹ナスナ順に覚えて採ってきた
水槽のメダカも明日は開校日

西出楓楽

わが影におびえる日あり冬の底
古希すぎた女にもある反抗期
おしゃれより着心地選ぶ歳となる
体力と気力バランスずれてくる
杓子定規昭和の尻尾引き摺って

仁部四郎

横書きにするから誤字が見えぬのか
文字として正しく機械誤字を打つ
誤字脱字呑んで流れるカタカナ語
文豪の誤字はいつしか値が上がり
人名の誤字裁判の沙汰になり

寒中お見舞申し上げます

冬ざれのふるさと一幅の墨絵

三宅保州

〒642-0011

和歌山県海南市黒江一―三―四二
TEL〇七三―四八二―五〇九八

温故知新

川柳句文集『川柳寄席』（昭和51年発行）

不二田 一三夫

神棚にテレビを据えて俵編む
脚本家の横やり金のかかること
金婚の正座は孫に付き添われ
新任がくるたび粒が小そうなり
踏めば鳴る廊下で京の金儲け
働かず条件ばかりつけたがり
立飲みのこの一杯に明日を賭け
芝生から春風を切る球が飛び
子の姿一と目見たさに松屋町
また元の街角へ来た訪ね人
日本間へ主人も読めぬ軸を掛け
天才の寝顔こんなに口を開け
ラムネ冷えきって売店閉らしい
槍架けた家風が徐々に電化され
親としてまた乗ってやる口車
菓子箱の中身は金庫へ収められ
棺桶にもしやと思う音がして
手品師の遊んでる方の手が怪し
目印の角の酒屋で飲んで聞き
共稼ぎ手間が助かる冷や奴

川柳塔の

川柳讚歌

(74)

木津川 計

六人掛け五人しか坐っていない

谷口 義

隣の人との空間がやっと一人分か、というところへ巨体が無理矢理座り、背もたれして深々と腰をおろす、のはマナーに悖る。割り込みがルールに背くように、狭い空間に割り込んだら浅く坐らねばならぬ。

六人坐れるのに五人というのも腹立たしい。ことに混んでる時は左右に隙間なく坐るのが心得だ。その隙間に坐ろうと思えば、「すみません」と声を掛け、僕は手刀を切つて浅く腰をかける。横に坐る際の仁義であらう。

よう出来た人だ横には座れない

山本 蛙 城

司馬遼太郎はサンケイ新聞の記者だった。疲れると編集局のソファにもたれ、からだを休めた。いまもそのソファが置かれているといふ。が、遙かな後輩記者たちである。

「よう出来た」偉い先輩が恐れ多くて、誰も座らないのだと聞いた。

昔は「三尺下がって師の影を踏まず」と言つた。「肩を並べる」のは、対等の地位で張り合うことだった。蛙城さんならずとも、「よう出来た人」とのお付き合いは今も気が張る。

この頃の語調蕭々耳につき

小糸 昭子

「鞭声蕭々夜川を過」つて上杉謙信は千曲川を渡つたのである。夜明けに川中島で謙信は武田信玄の軍勢と出合い、合戦。謙信は信玄に一刀を浴びせたが、とり逃がした。

また戦中、「声を殺して黙々と影を落として蕭々と」兵は徐州の前線へ向かつた、と「表と兵隊」は歌つた。

「蕭々」は静かな緊張だが、血腥い決戦の予兆でもある。政治家が「蕭々」を口にしたら、政治的惨劇の前夜と心得べし。

嘘のない相談されて困り果て

井上 喜 醉

「蕭々」が血祭に上げることだったように「善処する」はしないことであり、「深く銘記し」は聞き流し、「可及的速やか」はいつのことやら、政治用語は「嘘」に満ちる。

相談にも嘘があるのは芸と同じだからだ。当代の名大夫・竹本住大夫が言う。「うそを

まことしやかに語るのが「芸」、ほんとうのことをほんとうにやっていると「芸」にならぬです。「芸」を「相談」に置き換えたら喜醉さんの句の意味も判るといふものだ。

ハードルを下げた見合で断られ

福田 好文

高望みばかりを人に笑われた。イケメンで背が高く、高学歴で高収入、家付き、パパ抜きに加え、志操堅固で嘘をつかず……、そんな男のいる筈もなく、条件を一つ削り、二つ消し、三つ四つとハードルを下げ、やっこの方ならと思えたものの「断られ」たら目も当てられない。思うに添えず、思わぬに添う不本意な結婚は、むしろ多かつたのである。ならば本意な結婚は幸せか。誰だ、「結婚は人生の墓場である」と言つた人は。

流されてなるかひとりの手を上げる

岩佐 ダン吉

ハードルを下げるのは既にして妥協である。が、ダン吉さんは筋を通す。節を曲げない。「迷惑」は人に不利益を与えることではない。仏教では信心に揺らぎ、どう進むか思いまどうことを意味した。ダン吉さんは思想の迷い子になろうとせず、この欄の15回目「迷子にはなるまい僕の旗を持つ」と昂然であった。いままた上げる「ひとりの手」に敬意を表す。

(「上方芸能」誌発行人)

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

花道の新派は客と間違へる

本堂で和尚和尚の声になり

行末を案じるように鶴は立ち

鶏を追へば踏切越して逃げ

先妻は風邪をひかさぬ様頼み

本堂の賽銭いらぬものやう

昇降機扇子の風は女なり

ナフキンを小さく畳む女客

本堂を降りると嫁の傘が待ち

大根をきぎんで料理とは名付け

解決を支那料理までもってゆき

あのダイヤもう藝人の指になし

伝票の裏へ皿数聞いてゐる

藝者決して百姓の子と云はず

日永には亀もほとほと困って居

女の笑ひごえ幾つもかさなりあひぬ

殺すことにきめて其の夜は寝たりけり

童貞が弱蟲といふ名を貰ひ

寒さは寒し炭斗の新しさ

誰が捨てた草履か氷張りつめる

箱乗りもおんなじやうに眠くなり

名人は顔をあげずに返辞する

親切をおしつけた事さへも悔い

近頃のことには知らないがねと意見

水煙抄

西出楓楽選

雲南市 菅 田 かつ子

大抵の事は許せる年になり

ちっほけな事で揉めたり笑うたり

ウインクをされていたのは横の人

はいはいと二つ返事の背なで聞き

賑やかな家族に愚痴の二つ三つ

へそ曲げた扉なかなか開けられず

和歌山市 磯 部 義 雄

免許証返し健脚取り戻す

アナログのテレビの墓が築かれる

てっばんがゲゲゲ気になる視聴率

駄馬だつて走る気概は持っている

二階捨て一階に住む高齢者

ばあさんと走り続けて金メダル

高槻市 田 中 由美子

天皇の口調ゆっくり年明ける

骨のある男と見込み娘を託す

奥の手を一つ残してある余裕

田舎から方言連れて友が来る

アルバムの母より年を取りました

さりげなく惚けも演じて古希を生き

大阪市 高 杉 力

真つすぐに前ばかり見ていた昭和

生きている証に川柳作つて

おとなしい奴だが宴会だけ仕切り

図書館と飲み屋に近い我が家です

ペランダに咲く花の名を妻に問う

子にやろう我が家のノーベル平和賞

和歌山市 土 屋 起世子

待つ人がないのに急ぎ帰るくせ

遅しく生きる子の家そつと見る

詰め放題孫の知恵には胃脱ぐ

地下足袋の父は盗塁知らぬまま

裏の裏めくり指先黒くなる

人間の奢り諫める天気地図

奈良市 尾畑 なを江

淡々と話す中身の濃い話

孫の言うジイジバアバが気に入らぬ

何回も聞きなおされて貝となる

生命をバトンタッチし散る紅葉

想定をしなかった道歩んでる

テレビからレシピのヒントもらいうけ

奈良市 矢野 良一

北の旅凜としばれる雪の朝

津軽の宿魂揺する三味の音

まるで墨絵雪の溪谷只見川

散歩道落葉かさこそついでくる

名所より近くの穴場紅葉狩

セクシーな声に勘定値切られる

塩竈市 木田 比呂朗

国産の豆確かめる鬼やらい

試着室マジックミラー掛けてあり

電子音定住してるひだり耳

通販のカタログ春を囁し立て

玄関に春待ち顔なスニーカー

自分史のアドリブ今日も入れかえる

福岡県 豊田 愛

深呼吸夜明けの空に手を合わす

花咲かす愛でる夫はもういない

無位無冠誠実さだけ押し通す

誘われて時の遣り繰り上手くなる

躓くたび一つ確かさ掴んでる

やがて散る花も私も地に還る

竹原市 國實 力

野良着きる野良着にもってこいの顔

延命は無用とお酒追加する

二割引き寿司はあるのに酒はない

日にいち度妻を無理して褒めてみる

バイトした孫にもらったお年玉

合併の前はまああるい村でした

宝塚市 丸山 孔一

地球儀が小さくなって火種増え

平和ボケ国防の字が辞書に無い

軍事力有って外へも物が言え

四季という文字が辞書から遠ざかる

地デジ化をエコポイントで急き立てる

温暖化油断していると風邪を引き

紀の川市 宇野 幹子

新年の手帳に無限大の夢

分け入って森の深さが恐くなる

一行詩全てを剥いだ果ての果て

いよいよの為に紅涙ためておく

悔しさは日記の中へ眠らせる

万策が尽きたページに降る冷雨

京都市 清水英旺

十一枚のカレンダーには未練なし
どんづまり取捨選択の余地はない
緑なす黒髪的美を君知るや
ネガフィルムのまま残っている恋の日日
年賀状減らせば世間狭くなる

大阪市 安藤 なつこ

十二月早くなりたや楽隠居
主婦達も忘年会とはいいい時代
図書館に行けば喜ぶ本の精
旅ゆけば早くおうちに帰りたい
ウソつきが本当ですとウソをつく

大阪市 笠嶋 恵美

空の大きな虹のサブライズ
あれこれと出来たひと日の二重丸
元氣だなてっばんだンスよくはずむ
住吉さん長い歴史に良き祭り
秋篠寺秘仏の憤怒やさし苦

大阪市 田中 都

寄りかかり過ぎずに友と続いている
身にあまる雅号戴き勇氣出る
背を押され勇氣を出して友の輪に
勇氣出し嫁に一言言つてやる
八十路半ばで基礎講座思い立ち

大阪市 平井露芳

液晶で知った空いてた大相撲
ブラウン管お疲れでした十五年
片肺飛行何時の間にやら七十九
物価安言うて年金下げるやて
ノックするハートにニトロ身構える

大阪市 松田 聰

カレンダーあと一枚に思いこめ
単身赴任宅配便を助っ人に
木枯しへ鍋で家族が一致する
体重計気をゆるめるとすぐ見抜く
国民が不在の政治目に余る

池田市 上山 堅坊

特価の日カロリーなんて忘れてる
街路樹の裸が寒い街にする
自慢などしたことないという自慢
考えりや黄泉の近くにゐるんだな
みな敵に回し同席嫌う北

泉大津市 助川 和美

若白髪席を譲られ逆らえず
図書館へ行けと亭主を邪魔にする
豆腐屋へ待ちし昔を懐かしむ
回覧板計報伝うる風寒し
頬ゆるむ友の絵手紙シクラメン

泉佐野市 稲葉 洋

ワクチンで専守防衛冬籠り
職安の日陰不況が長すぎる
着膨れていやが応でもスローモ―
春仕度跳ぶ真似ごとをやってみる
僻地にはちよつと早めに春よ来て

茨木市 島田 誠 一

万歩計辛い減量記憶する
まずビールつまみに妻の愚痴が出る
三億に驚く夢を買いに行く
不器用が技に溺れぬ芸を生む
人間の音が飛び交うターミナル

河内長野市 梶原 弘光

満点の星のどれかに亡母がいる
明日きつと晴れると星が太鼓判
ダイエツトは無理リバウンド怖いから
万策が尽きて口笛意味もなく
虎ファン違うと言えんあかんたれ

河内長野市 木太久 正 一

老いの身に犬の散歩がきつくなる
同窓の視野から消えた友の顔
エネルギー失せて喧嘩はもう出来ぬ
転び方上手に使い難のがれ
缶詰の小豆でしるこ午後三時

河内長野市 木見谷 孝代

寒空に何を思うかからす瓜
惚れっぽい因果なたちは親ゆずり
帯締めて度胸がすわるお茶の席
炬開きの新茶の香りふくいくと
菜園の無農薬だけ食べる虫

河内長野市 辻村 洋子

寝て見てるテレビ体操したつもり
いらいらの棘を抜いたらいい女
しぶしぶと引き受けた役生き甲斐に
持ち歌を人に越されて出番なく
伝統に風を持ちこむお嫁さん

河内長野市 針生 和代

母の胸鍵はかけない二十四時
何の因果か脳が化石になってゆく
路地裏にまだ消えてない昭和の灯
敗戦の痛み沖繩まだ続く
宇宙への挑戦をする町工場

河内長野市 松岡 篤

夜が来たさあ起きるぞと若い人
忙しくないのが不安歳の暮れ
病院と薬の数は減りません
我が国の穀倉国の外にあり
タレントが旨いと言えばよく売れて

河内長野市 山室光弘

エエカッコしてからいつも自己嫌悪
物入りが続き財布がダイエツト

家計簿の黒字のキイが見つからぬ

深いしわ毀誉褒貶を知りつくす

城崎は外湯が楽し下駄の音

岸和田市 中岡香代

偉そうに人には言えるアドバイス

うちの子も同じ手ごわい宇宙人

結局は論吉が埋めるすきま風

全体が視野に入らぬ一本気

姿見が元気をくれて七変化

堺市 近藤治子

住みついて顔見せにくる雨蛙

観光も兼ねて巡礼リタイヤ後

つまずいてはじめてすがる神仏

それぞれの主張を聞いて父が決め

驚嘆の声あげて見る綾錦

堺市 澤井敏治

溝曳へ粹な計らい月に雲

石橋を叩け渡るのは決断

慌てるなまだ終章の先長い

嫁姑火種抱えて共白髪

猫に鈴つけるねずみの自棄つぱち

堺市 内藤憲彦

天国行きひとつ遅めのキップ買う

時は一人にさせてほしい癖

パニックの妻にことさら親父ギヤグ

電線の風の安否が気にかかる

いざ勝負裏門少し開けておく

堺市 羽田野洋介

やる気充分まず血圧を確かめて

あわてるなじつとがまん足と腰

あわてん坊同士結構馬が合う

孫の部屋成長の跡ありありと

計画はきちんと詰めたはずなのに

吹田市 二宮栄子

娘の注意無視したつけのサロンパス

ここからは踏み込まないで明けの月

いばあちゃん演じしんどい時もある

丸まげの似合った祖母の富士額

娘の苦言素直に聞ける年になり

高槻市 島田千鶴子

弾む息きつといい事あったのね

逆転を許す心のすきま風

意見など聞きそうにない冬のハエ

献立が決まらないから鍋にする

びっくり水入れてあなたを引き止める

高槻市 初代 正彦

富田林市 関 よしみ

有難うお世話になった登山靴
宴済み妻とゆっくりお茶を飲む

スタートにもう遅いなど無いですね
懸命に生きて染めゆく白い地図

翌朝はさすがに飽きる残り鍋

晴天の昨日が見える逆上がり

出番減り手持ち無沙汰のマッチ棒
たかが水されど石をも丸くする

たつぷりの湯に浮かべてる過去未来
故郷へポトンと落とす良い返事

豊中市 池田 純子

富田林市 古田 千華

吹きだまり落ち葉寄り添い暖をとる
親バカはこらでちよつとひと休み

悔しさを一句入魂仕立上げ
身の内に滾る思いが発酵中

子が育ちソックス消えたイブの夜

東大寺勾玉色の瞳の蠟燭
柔らかく心に響くメッセージ

地味だけど今年も亡母がいるお重

ふる里にご機嫌ようと迎えられ

箸転び笑った友に孫が出来

豊中市 石橋 優明

寝屋川市 岡本 勲

妄想を形にしたかカリフラワー

老梅の気負うことなく風を待つ

えのき茸見つめ思わず搔きむしる

あかり消え不況に沈む商店街

おれに似よ言うまでもなく似ている子

親という傘から出ない子が一人
優しいがさっぱりうだつ上らない

好きだよの四文字込めてじつと見る

孫が来る財布の鍵は締めとこう

急停車座席の下に何がある

豊中市 源田 啓生

寝屋川市 小谷 滋彦

木の葉降る喪中がきの十二月

くすぐられふと本音吐くお人好し

非情にも温い布団を剥す妻

五十年あわせた歩幅ふと変る

トイレ出て怒鳴ったことは忘れてる

居酒屋で俺大将と呼ばれてる

故郷の米と野菜に養われ

ピリケンさん景気直しに触らせて

引き継いだ昭和の匂い薄くなる

竜馬在り伏見の酒に夢を飲む

羽曳野市 宇都宮 ちづる

表札に貫禄が出てローン終え
十キロの孫なら抱ける力持ち
採用にお試し期間ある会社
トイレには神様居ると掃除する
歴史秘話大好きになる老い仲間

羽曳野市 安本美喜

百歳にあと二十年ある夫婦
食べ過ぎに自己責任を課せられる
目線をば同じにすれば打ち解ける
貧しき者孤独な者もクリスマス
柏汁に浮世の眼鏡曇らせる

東大阪市 西田 いくひろ

寒がりです厚着をすると肩が凝る
甘酒でポーとピンクになる私
親切もほど程干渉して揉める
じわじわと根性が湧いてくる強気
ときめきが疼くと胸が熱くなる

枚方市 河田 洋子

ゆっくりと時間をかけて煮るおでん
若い日の苦勞ゆっくり根が太る
雨の日はゆっくり朝寝老い二人
毎日が趣味趣味趣味と元気なり
友達と素顔で会える趣味の会

箕面市 寺井柳童

野の花に心ひかれる遍路道
脇道に逸れて思わぬ道の駅
三面鏡見つめこりない試着室
すぐ填る人柄の良さ憎めない
晴れやかにどこか冷たいLED

八尾市 赤木妙子

爪弾きの琴の音恋し秋の月
なめらかな舌味方とは限らない
両親と良心なよりの味方
退職を転機に変わる義理人情
身の回り軽くしておくゴール前

八尾市 田邊浩三

マスクした人が来たからマスクする
ポーナスは家で女房にもらうもの
音のせぬ自転車恐い散歩道
年賀状顔も浮かばぬ人もいる
熨斗袋幾ら入れるか腕を組む

八尾市 前田紀雄

心地よい眠りのために布団干す
年金にポーナス手当付けて欲し
遼君は一億超えも悔しがり
ゴミ出しを忘れて句会思い出す
一年を可もなく不可もなく暮す

八尾市 山根 妙子

夕焼けのグラデーシオンに画家がいる
進呈の文字につられて無駄遣い
開戦の記念日を知る人まばら
腕白な憎まれっ子がいなくなる
金星は何もなかったように照り

大阪府 神野 千恵子

風景に動くものありホッとす
すらすらと説明できる他人事
あちこちが不自由になり人が見え
削ぎ取った無駄を拾ってゆく余生
両端から日本列島齧られる

大阪府 高木 道子

それぞれの愚痴を慰め眠る山
アバウトに山茶花が咲き過疎の家
広縁でのんびり生きる冬のはえ
フレディの予備軍を風もてあそぶ
痺れたる足をひた揉む臍長し

大阪府 西川 冷子

小春日にダウンジャケットじゃまになる
隙間風そこを通ってどこへ行く
炊き上げた銀シャリ光る至福どき
静けさに薄氷踏んで月白し
山茶花のはらはら散って花筵

大阪府 畑中 節子

一瞬間不景気飛ばすルミナリエ
山茶花の文机飾る花の精
母の歳迎えてわかる孤独感
置きぐすり入れ替えおしゃべり小半日
キラキラの朝霜ふみて登校尻

大阪府 若月 祐作

カラオケに乗ってダンスは流れ出し
タップダンス床にリズムがおどつてる
四季の国秋の機嫌が今一つ
初咲きの小菊一輪御仏壇
民謡まつり笛三味太鼓揃いぶみ

神戸市 木村 忠義

人の世に愛情が今ハンゲリ
さびしいなと思うスズメの少子化を
シンブルは何にも増して美しい
くやしさをばねにしたからいまがある
順番が狂うと変な一日に

尼崎市 市坪 武臣

叶うなら総理に龍馬なつて欲し
鮮やかな夕陽に明日を期待する
増える賀状やらねばならぬ大仕事
父の日には何事も無いそれでいい
銀舍利は死ぬまで飽きる事は無い

尼崎市 小池 幸子

掴み取り欲が邪魔して手が抜けぬ
湿布貼る相手が欲しい届かぬ背
今ならば母に小遣いあげられるのに
口軽く小波立てて悔い重ね
色褪せたアルバムにある家族愛

尼崎市 田原 一兆

棒鱈の乾いた音に冬の波
満腹でしんどい暮れの冷蔵庫
有為転変おおい隠すか雪もよう
紅梅の艶にひかれる昼の酒
廃校の庭に白梅凜と咲く

加東市 黒崎 美紗子

コロコロと抱き合うような芋を掘る
よい出来に苦労も可愛い野菜畑
天候も味方に楽しバスの旅
ほちほちとゆつくり生きるひとり住む
部屋で転び痛い行き場のない怒り

篠山市 北澤 稠民

良き知らせ孫の成績上ったと
二次会にやっぱり二人足りません
誕生日数えることがいやになる
仏さん神さん信じクリスマス
札数え思い出せない使いみち

篠山市 酒井 真由

極月の銀漢さらに冴えわたる
こんがりと焼くジェラシーは蜜の味
蛮勇も時には役に立つものだ
仲直りするたび太くなる絆
雪しんしん影絵のキツネもう寝たか

篠山市 谷田 多美子

ふところの寒さ身にしむ師走風
留守番役荷物になるのつらいから
割り勘で旅行三日の姉妹
師走風聞きつ春まつシクラメン
ジングルベル財布の用意しとかねば

三田市 尾崎 一子

子の短気運転中に気付く母
よく笑いごちそう様と黄泉の旅
ばあちゃんもちゃんと居場所のある家族
心にも彩り添えて招く客
便り無い友を案じる師走風

三田市 辻 開子

ストレスがたまる予約の待ち時間
おでん種王様顔でいる玉子
あげぞこのきれいな土産つい手出る
定年後日曜日である予定
今日という日またない前向きに

西宮市 泉水 冴子

すぐれ物ばかり面白味に欠ける

結婚をしたくなったら適齢期

ご馳走を見せびらかせているテレビ

継母と生母が競い合うドラマ

デジカメに去年の梅が咲いている

奈良市 大久保 真澄

飛び跳ねる卯年の夫放し飼ひ

結婚式でいつまでもつか賭けられた

言わんでもわかるやろとは傲慢な

病む友の今を賀状でそつと問う

恋女房だよねそうよねお父さん

奈良市 前田 弘恵

うさぎ跳びくる年景気はね上げて

半世紀いつか会おうと賀状書き

今にして亡夫の長所偲ばれる

ご一緒に歩きましょうと月明かり

受験生悩ます漢字増やされて

奈良県 谷川 憲司

法隆寺匠の技が今に活き

人の世をずつと見て来た古都の塔

悲惨さを目が訴えるキャンプの子

今の地が古里になる長住まい

煩惱の数を減らせず百八つ

和歌山市 柏原 夕胡

酷暑残暑秋を跨いで冬になる

偏差値に分別されている子ども

まんまるいけど角もあるカタツムリ

小心者ほどえらそうにする不思議

無理をしてブラック飲んでみる背伸び

和歌山市 福井 菜摘

賞味期限あつて片づく冷蔵庫

辛い日は流れる雲にのればいい

へそくりと言う含み資産を持っている

尾を振ればすんなりゆくと見た誤算

聞き流すことにも慣れて丸く住み

岩出市 藤原 ほのか

旨み出しかつおと昆布せめぎあう

ふるさとの匂い届ける道の駅

すみません言えはその場がまるくなる

地球儀を回して祖国確かめる

暮れてゆく人それぞれの輪の中で

岩出市 村中 悦男

恙ない老いて夫婦の味がする

恋しさに小窓の風にそつと会う

相性が合つて気易く出る笑い

えんどうが薬一本をさぐり当て

思案するその時父母が現われる

海 南 市 小 谷 小 雪

原点へ心入れ替え庭を掃く
大根を洗うと息も白みかけ
申し込みしてから少し迷い出す
横糸を一本抜くと乱になる
半世紀父の軍靴は生き続け

紀の川市 北山 絹子

勧誘へ電話の声が柔らかい
欲望の船に乗っては座礁する
ふるさとを語れば丸くなる心
突き進む勇気を貰う冬の天
訃報欄ばかり目につく朝の記事

紀の川市 辻内 次根

花の種カタログ見ても楽しめる
シミュレーション独り暮らしになった時
人間に信仰が要る冬の部屋
味付けはあっさりが良い日向ぼこ
生きているかぎり復元力がある

田辺市 大崎 可動

文学や無口な神に最敬礼
脳細胞去年のままで冷えている
権力に遠く知恵の輪をみがく
老々介護安定剤が欲しくなる
春雷に何の用やと影法師

和歌山県 森 下 よりこ

茶髪白髪近頃全く気にならず
新しい絆が欲しい古い街
腰痛体操あちこちの骨軋む
ポケットにいつも飴玉補充して
口笛を吹かないこの頃の子供

鳥取市 竹口 清信

一年も悩んだ末の初投句
初めての事は何でも勇氣いる
絞っても出ない勇氣に鞭を打つ
死んだ気になれば恥など怖くない
無名人失うものの無い強み

鳥取市 津村 律子

清々しパツと霧吹く障子張り
無駄話ゆとりが笑い連れて来る
後継者無いまま古稀に手が届く
忘れっぽいどの程度なら呆けですか
朝寝する夫気になり覗き見る

鳥取市 山口 千代子

手の届く所に置いて部屋狭め
幼な子の楽しい夢よクリスマス
また一つ歳を重ねる除夜の鐘
早過ぎて自分の歳を確かめる
働いてはたらき抜いた手をなでる

米子市 加藤 正二

物忘れ気づくところにまだ望み
あとさきの未練吹き消す風を待つ
物よりも一声を待つ独り者
仕分けても年金だけでへそくれず
いつの間に平均寿命通り越す

米子市 竹村 紀の治

震えてる蠅をひと晩泊めてやる
どんぐりを捜して熊の里歩き
酒に罪着せて言い訳するメタボ
聞き役に回りしつかり酒を飲む
あのころへ昭和の歌が連れて行く

米子市 田村 周子

無縁社会家族の絆つなげたい
好きなこと飯より好きで止められない
人間くさい人間が大好きだ
後始末そろり考え始めてる
友が逝くやるだけやって空に舞う

米子市 中原 章子

お風呂では固形石鹸よく使う
脇役の台詞少ない方がよい
生ごみを埋めてみみずの棲む土に
今ならば父においしい酒飲ます
きれいだと襟足ばかり褒められる

米子市 成田 公一

朝霧にパジャマのままでごみを出す
ふいに出たハミング二人同じ曲
駅集合と言えば事足る田舎町
ひとつずつ薬数えて旅支度
満月に絵本飛び出すものたち

米子市 野川 宣子

老いふたり好きも嫌いも折りたたむ
好きな道老いた五体に狭められ
このころになつて両輪軋み出す
情報の渦に私も飲み込まれ
ラストまでうさぎ跳びして鍛えます

米子市 見山 温子

暇つぶしぐるりとデパート見て歩く
二人居が爪切りいつも捜してる
夫の留守真正面から見るテレビ
年寄りの溜息誰も気にしない
定年に銀行さんのタオル増え

鳥取県 飯野 菖子

村祭り豆腐ビールで盛りあがる
悔しいと青い空さえ見失う
言えませんがこの悔しさは分かるまい
悔しいがここは黙って引き下がる
不思議です地球は四季を忘れたか

鳥取県 下田 茂登子

雲南市 武島 ちよえ

その先を言えば崩れる間柄
笑つても泣いても皺が先に出る
白黒をその先までも付ける癖
自己主張強いおんなの背が寒い
金利のこと考えるほど金が無い

鳥取県 田口 清帆

病葉にそつと触れてく道すがら
豊作という松茸をまだ食べぬ
さわやかな日本の夜明け何時の日か
早トチリ歳に責任負わせとく
席はずすチャンス待つてる長講義

美作市 小林 妻子

人間の物差しだから伸び縮み
八十路でも金と愛にはまだ迷い
天高く満ちる実りの老いの秋
年末だ感謝を込めて年賀状
あれやこれ捨てて年越しそばを買う

松江市 山根 邦代

兎年の妻と諍いなどはない
写経する先祖供養という願意
天国と極楽現世の戒め
ご馳走はないが白菜漬と昼ごはん
お粗末なくらし支えた大家族

広島市 岸本 清

ふるさとに元氣印の友の声
アンテナが錆びない様に磨いてる
お喋りの楽しい人とうまが合う
誤魔化しの笑いしかない忘れ物
出来るならけじめ付けたい事がある

安来市 原 煩惱児

意図的に避けたつもりが鉢合わせ
勝負事番狂わせで盛り上がる
浮き雲のように気ままに生きている
厳寒のサイレン音も震えがち
勝敗の見極めつかぬへボ将棋

竹原市 若年 幸子

パチンコに行く孤独死が怖いから
草虱いっばいつけて爺達者
日本人の意地見せつけた稀勢の里
郷土偉人の展示が続く公民館
異常気象気にしてる間に早や師走

逆風を捉えて進む舟もある
時雨降る春待つ花よ根を張れと
プラスチック目ざして今日の辞書を繰る
袖子風呂へ今年の幸が笑つてる
兎年とんではねはね若返る

竹原市 土井輝恵

杖どうぞ優しい文字で書いてある
夫にない忘年会へ三度出る

戦いが済めばまんじゅう欲しくなる
どうしても天を夢見る豆のつる
延命治療岐路に立つたらどうしよう

宇部市 高山清子

助詞一つ変えて風向き逆になり
涼しげな顔で急所を突いてくる
口が固いとは限らない頑固者
あのバッグ欲しい横目で見る八十路
会えたねと手を握られて名を聴けず

阿波市 三浦千津子

沈丁花馥郁春がひたひたと
新豆のふっくら炊けた満足度
劳いの言葉が温い今日の幸
仕来りの簡素化人情まで薄れ
引き受けたからには不様見せられぬ

今治市 渡邊伊津志

他人には気楽に見える苦労性
溪谷のせせらぎ愛を弾ませる
家計簿の仕分けで浮かす化粧代
真ん中で折れてしまった美辞麗句
境内の玉砂利澄んで来る心

大洲市 花岡順子

背骨から老いを知らせるメッセージ
手を抜いて読書の秋と洒落ている
こつこつを本物にする石の上
山道が私の膝を笑わせる
振り向けば今年が見える十二月

四国中央市 篠原久

禁煙と書いて三日で反故にする
自分流生きて保護色にはならぬ
ぶらり街へニユース拾いにネタ袋
行方不明のわたしにモニタージュ写真
路地裏にまだ温もりのある美談

香南市 近森功

免許更新老人マークが艶を出し
ハイハイの返事の裏で舌を出し
正直に欲をならべた初詣で
除夜の鐘余韻を連れて初詣で
除夜鐘聞きつつ新酒封を切り

北九州市 岡田幸生

人の目が勝手に決める仕合せ度
手を振って背筋伸ばせと影が言う
エンストをくり返しつつ妻介護
夢を盛るプランに不足する寿命
失望はしない明日も陽は昇る

北九州市 小松紀子

明日の陽はきつと希望もついでくる

ナニこれとしわの深さを問う鏡

戒名を用意しました余命表

貧しさは平気なんです趣味がある

負けられぬ自分に勝てと言ってみる

福岡県 本田 さくら

名も知らぬ人の笑顔の花の駅

皇帝ダリア誇らしやかにここかしこ

雷音に沖繩の基地ふとよぎる

コーヒートの苦さよ恋が逃げた日よ

携帯を持つ言う聞くだけの夫婦なり

唐津市 吉富節子

里帰り懐古話の夕餉かな

密談に目が合図する悪巧み

十六人独身ばかりクラス会

鉦叩き答えぬ夫に愚痴こぼす

楽勝とあまく見過ぎて臍を嘔む

山鹿市 三谷 たん吉

ゆつたりと静かに生きるための里

星空をひとり占めして露天風呂

叩けない家で生まれたハエだから

チャンチャンコ着た犬二匹じゃれている

どこにいてもいいけどさと子に言われ

シドニー 坂上 のり子

喧騒の街から帰途につく夕陽

ブローチの猫が気楽にした会話

打ち解けて本音ぼろりと金のこと

一匹の蚊とたたかたかって寝ずの夜

極めなくてもいいこのままの日が気楽

札幌市 佐藤 登美子

叶うなら亡母に逢いたい甘えたい

交通渋滞焦る心へクラクシヨン

杖と杖互いをかばうああ夫婦

少子国親の期待が重すぎる

今年こそ手書きで決めるおめでとう

福島市 七ツ森 客山

言い訳をしたがる顔を打つ糞

目が覚めて見知らぬ駅の終電車

いい笑顔お仕用のマスクです

笑つても泣いても天使怒つても

お世辞とは知つてて長の硬い椅子

東京都 井上 つよし

出来立てを一寸味見の摘み食い

健康法は笑点を見て大笑い

のど自慢ゲストはゲスト矢張りプロ

犬吠岬の部長マイクを放さない

寒ざむとでもすすきりと出る床屋

東京都 高岡 弥生

今年こそ計画立てて大掃除
子におんぶ軽いと言われシヨック受け
もう少し信じていてねサンタさん
ホカホカの肉マン恋し時期となる
立ち話解けてしまふよ冷凍品

昭島市 野口 忠

今年こそ人の話をよく聞こう
就活の百社巡りで知る世間
結願の遍路帰りは湯を巡る
ペン習字始め遺言書き直す
グルメにもうんと言わせた握り飯

横浜市 巖田 かず枝

いか天をへっぴりごしで揚げている
下手な字を侘びながら書くお礼状
祈ってもけがや病気になることも
ほけぬよう孫とかるたのドラえもん
愛犬に見守り頼み留守をする

横浜市 川島 良子

以心伝心ほーら電話が鳴っている
人の波時々溺れそうになる
それぞれの生き方があり君と僕
ゆっくりと生きよう大切な時間
放つとけばいいのにやはり放つとけぬ

岐阜市 平野 あずま

自分史を刻んだ顔の皺と染み
左遷地で友を見付けた縄のれん
天国に届くケータイ知らないか
パソコンの森で根っこに蹴躓く
説明書読んで解らぬ日本語

江南市 脇田 雅美

風の音耳鳴りだけがまだ止まず
過去帳にニックネームも書いておく
ささやかな髪をくぐらすつげの櫛
手袋をはめて受け取る領収書
ミスマツチ夢見た恋のかすり傷

豊橋市 藤田 千休

両輪が未練の蛇行くりかえす
限定のことに弱い春財布
都会でのデビュー夢見る青リンゴ
世渡りの下手な手形を焦げつかせ
桜湯に明日の幸が浮いている

大阪市 太田 としお

朝刊は夫婦喧嘩の種になる
竜馬伝見では溜息ついている
無事関空無駄な気になる旅保険
沖縄の選挙気になる落葉焚き

大阪市 片岡松枝

頭まわらん体まわらんまた師走
十二月うさぎ小屋にはボロの山
落ち着けとカニサボテンの花の首
長生きの感謝忘れず昼寝する

大阪市 前川善之

白鵬は綱の重みに耐えている
太陽の力借りてる干し魚
人は皆一人では無い元氣出す
和のかおり心のいやし源になる

大阪市 吉川弘泰

春近し梅一輪に会う日和
嘘を言う医者的心は透けて見え
水枕風邪を移した君想う
節分で鬼よりこわい妻の顔

大阪市 吉田知之

落葉焚き芋しのばせる気働き
セールスにのるまいけれどドア開ける
叩き売りなんぼになるか暇潰し
名画でも夜更かしせず早寝する

河内長野市 内海綾乃

不精だが生やして似合えば男前
隠居して趣味に使おう年金を
閣僚の失言多し国会は
一人者気楽と言うが淋しいね

河内長野市 谷久美子

耳栓をしても聞こえる高野
無いものを補い合つて名コンビ
曾孫増え母はかわいい婆となり
朝寝坊光差し込み大慌て

河内長野市 山本エミ

水一杯喉潤したおもてなし
深入りはしたく無いからソツと退く
部屋の死角丸い心で掃除する
カタコトの孫の喧嘩を見て和む

豊中市 荒巻夢

クラス会生きざまそのまま出る怖さ
靴裏に京の名残りの散りもみじ
大くしゃみに活を入れられ背をのばす
きれいごとと言っても金に頼つてる

富田林市 山野寿之

人間に会いたくなつた揚げ羽蝶
飾り気のない少年に光る汗
ゆつくりでいい丁寧に明日を生き
長い物に巻かれてからの自己嫌悪

枚方市 小川良吉

スーパーで他人の籠に目が移る
ここだけと他人の噂尾ひれつく
他人の目気にする僕は未熟です
八十路越えまだ上いると指を折る

大阪府 小栢 こずえ

霜が降る気はせき仕事遅遅として

平穩に見えても揺らぐ胸のうち

明日みえぬ老いの暮しに冬の風

何も彼も手許に置いて老いの冬

大阪府 坂口 公子

遣しても罪なだけかと思ふたり

太鼓判世の果てまでも行けるかと

捨てたのにまた拾うとは女々しいか

賀客萬来嬉しいね嬉し過ぎ

大阪府 中井 記久乃

野良仕事ほっと一息コーヒのむ

北風や師走の空気連れて来る

窓ガラス今年のあかとさようなら

年の暮れ犬も美容院予約制

神戸市 白川 淑子

菊ほめてしばし垣根の花談議

湯どうふの旅約束それつきり

外野席いてさえ飛んで来るボール

孫からの電話財布が身構える

神戸市 山根 弘子

叶うかな彼女いちずの恋心

秋雨にぬれて見守る石地藏

一芸が我が人生に光さす

秋深し空の青さに吸込まれ

加東市 岩本 美緒子

お歳ですと外科医湿布の膝処方

猛暑はいずこ電気毛布のこちち良さ

運はまると言えども籤に弱いです

グツと飲む朝水腸へ届けさせ

川西市 岡嶋 洋子

散財し冬眠したいサンタさん

ひとりより孤独感じる大家族

コスモスに見え隠れする車椅子

背伸びしていいとこ見せる秋財布

川西市 日野岡 和之

当らぬとゆっくり眠る大晦日

何故怒る格子の中のノーベル賞

外れくじ気楽も良いと負け惜しみ

ご近所が孤独にさせぬお年寄り

篠山市 石田 久子

土壇場で客の声援勇氣湧く

ハンガーに吊るした明日の旅の服

雑談で拾った言葉名文句

黒豆で作った味噌も食べごろに

篠山市 沢山 啓子

とつときのチャンスだ救心を探す

千載一隅びたり見つけた一ピース

泣いたのは飛行機雲が消えてから

手負傷見えない場所ですぐ忘れ

篠山市 永井 かほる

外寒そう起きよか寝よか朝の四時
小春日和草はしつかり根をはらす
ストレスはアンパン焼いて飛んでゆく
来年はおねぎ今年の倍作ろう

篠山市 藤井 美智子

旅みやげ珍味いろいろまず試食
やきもちを妬かれ内心悦に入り
点検を何回もする古い暮らし
書いておこ延命治療いらないと

西宮市 株元 玲子

紅葉にカメラが弾む京の街
鎮痛薬残りいそいそ友と会う
わが命神にまかせて今を生き
たのしみを増やして痛み追っばらう

西宮市 吉井 菜々子

片時も離したくない君の腕
薦樽に黙礼をしてお賽銭
雨の日のメールやさしい声をする
カーテンを開いて閉じて軽いうつ

三木市 山口 久子

寒い日はストーブテレビの番をする
寒い日はこたつの中で猫の守り
胸苦し背中とんとんモミジの手
足腰の痛さ助ける杖一つ

奈良市 加門 萌子

旅たのし一期一会を有難く
親の番終われば介護される日も
内憂外患いつも政治が揺れに揺れ
にこにこといやにやにやと現首相

和歌山市 坂部 かずみ

眠い眼でスリッパ捜す冬の朝
ガタガタと二人暮しに旋風
家中を黄色に染めた柚子のジャム
留守番の妻が出掛ける年忘れ

鳥取市 大前 安子

散歩犬影踏まぬよう前歩く
太陽は大小問わず影作る
近眼と老眼鏡のミステリー
冬晴れを上手にこなす猫の背

鳥取市 近藤 秋星

平成も二十三年青年だ
良い年であれかし八十一の新春
老人にとっては餅は危険物
億万長者になった夢見て飛び起きた

鳥取市 坂本 智子

小沢さん政治と金もごちゃまぜか
庇い過ぎ箱入り娘三十路過ぎ
ニューフェースホルモン焼いて盛り上がる
老母笑顔介護の疲れ吹き飛んだ

鳥取市 前田孝子

境港市 中井虎尾

身を守るために愚かな嘘積んだ

ストレスをうまく処理する技がない

幸せの形それぞれ持っている

心から豊かに生きてこそ光る

鳥取市 松原ひとみ

忙しいからよく落す雷様

うさぎりんご添えて励ますお弁当

お先が言えず守りする赤ちようちん

忘年会欠席なしの礼尺す

倉吉市 倉繁泰輔

サイレンがチャイムに代る平和な世

外れるとわかかっていてもジャンボクジ

年金にボーナス無くて火の車

願いごと叶えとはずむお賽銭

倉吉市 藤井美津恵

木枯しが吹いて背中にホツカイロ

寒風に櫂の落葉敷き詰める

寒風に千両の実も赤くもえ

小春日に落葉眺めて句を作る

倉吉市 前田喜美子

まさかとは思えど葉書出すクイズ

おだやかに火種も失せて好好爺

老夫婦サイレン鳴って昼ご飯

やましいと心の奥が湿り出す

朝刊を一日かけて読む田舎

大山は伯耆出雲の二名富士

同窓会若い声したジイとバア

冬うらら小犬大きくアクビする

米子市 小塩智加恵

それなりの皺を刻んだ同窓会

お部屋から紅葉愛でる同窓会

狭庭の大根太りブリと煮る

点滅に小走り出来る幸せさ

米子市 後藤宏之

当分の間サイレン怖くなり

のどもとをすぎて運転荒くなり

時が過ぎるのが早いと友が言い

ばあちゃんの料理が妙になつかしい

米子市 後藤美恵子

婚活に欲しいクロスカップリング

また明日と瘦せた手を挙げ兄は逝く

力むこと止めて呼吸が楽になる

年金は言われなくてもエコ暮らし

米子市 湯浅久司

髭を剃り白髪頭がよく目立つ

しまい湯は静かに入る住宅地

老眼のメガネすらせば広く見え

山裾に忘れられてる実が熟す

鳥取県 大塚 美代子

雄雌で値段格差のズワイ蟹

学歴の格差に思う給料日

収穫の疲れを癒やす露天風呂

有難うの言葉平和の風貫う

鳥取県 岡本 幸枝

いびつの輪わたしのせいでしてならぬ

患って夫の沽券和らいだ

自尊心捨てずのらくら生き上手

脊椎手術車椅子から奇跡の歩

鳥取県 岡村 孝明

カニ甲羅鍋に見立てて舌つづみ

見聞の知識放電したり顔

グルーブをまとめる女性太陽よ

散歩道花の香りに深呼吸

鳥取県 吉野 いさお

楢山の遊山叶って行っただきり

補聴器を付けて気付いた人の愚痴

雑音と放っておけない北の愚痴

逆風に硬い蕾で耐えている

松江市 相見 柳歩

告白の三時間前歯を磨く

草食も肉食もない一目惚れ

魂にゲームオーバーなどはない

構えると虫もおんなも逃げていく

松江市 錦 織禮子

満潮の湖を見つめる美術館

衝動買い粗品にまんま引つかかる

減速でゆったり自由楽しもう

スーパーで小銭がレジを待たしてる

松江市 松浦 登志子

お出かけに迷い子予防のペアルック

下がり目でいつも得する初対面

平凡が素敵に思えキッチンへ

ミツバチの贈り物からでる元氣

竹原市 六田 半徳

新春へ向けてのれんも替えてみる

山茶花が遣り水応え見事咲く

土曜日はパズルを解いて気を晴らす

道の駅イタリヤ料理割り箸で

唐津市 岩崎 實

走り出てもう行っちゃった忘れ物

生まれ出るものでありたい鑿の音

語り出すテレビに先に文字が出る

人間も干される程にうまみ出る

唐津市 北村 松風

ハヤブサの宇宙七年祝福還

老い一人カーテン開きテレビつけ

空バルン地に恵比須様佐賀の里

吾が脳は楽観回路太り過ぎ

網走市 角谷 幸甚

年玉に格言添えて爺の筆
夭折の兄在れば在ればと節並べ
見る阿呆そのかたまりの中でよい
酒ゆるす医師も仏の退院日

弘前市 稲見 則彦

夏の夢地吹雪の中闊歩する
この夏の新記録など欲しくない
ジーと鳴きそのまま果てた午後六時
自堕落な日々覗かれて夏が逝く

弘前市 高橋 洋子

風の便り包み込んでるニット帽
一笑に伏したあの日を今悔やむ
謙遜に自慢話が見え隠れ
稚魚のまま海を知らない一人っ子

弘前市 高森 一吞

うら返り落葉ちらちら逆らわず
真夜中に吐けない嘘が蒸し返す
理不尽に手足がついた雪達磨
膝小僧みえジーンズの味が出る

佐渡市 高野 不二

大臣の会議もペットボトルの茶
おとなしく酒呑むだけでほめられる
義歯二本佳肴珍味に満足し
思い出せぬままで別れて考える

富山市 有澤 嘉晃

ゴールまで風を味方にして走る
値引きして弁当を売るこれもエロ
休刊日朝のペースが狂わされ
ざりざりの心労見せぬ母の背な

静岡市 渡辺 芳子

生き方を今から変えて間に合うか
あの世では逢いたい人が増えて行く
自然体まずは大きなアクビして
ころばずにハネてみたいなうさぎとし

寒中お見舞申し上げます

黒田能子

〒659-0023 芦屋市大東町六一一〇
電話〇七九七―三一六二六六

山口光久

〒651-1123 神戸市北区ひよどり台二―三―五
電話 〇七八―七四三一六六四三

誹風柳多留一一篇研究 66

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾

伊吹和男

清 博美

511 朝帰り女房に質をせたらげられ

山口 せたげる【虐】は、攻め立てる。ひどく責める。いじめめる。せきたてる。(「日国」)
遊里からの朝帰りで、亭主はご機嫌で帰ってきたが、軍資金に女房の着物でも質に入れたのであらう、早く請け出せと責め立てられるのである。

しちをせたげるで女房ハこわいなり

安二鶴3

ていしゆから物をい、出ス朝かへり

明元智3

清 賛。

512 屏風から産婦の覗くじやすい也

山口 女房がお産の時は手伝いに親戚の女性を頼んだり、里から母親が来たりする。母親

なら問題ないが、妹が来たりしたときよく間違いの起こる話を聞く。お産の期間中亭主は禁欲を強いられるからである。隣り座敷で笑い声などを立てていると産婦は気が気ではない。主題句の産婦はそんな事を気にして屏風の陰から覗いてみたりするのである。

妹のしかた産所てしろ〜見 明二松1

さん所から二一足三足じやすいなり

安四桜1

きれいなる下女が産婦の血の障り

六五20

清 賛。

513 しち置きに四五あし捨る四ツ手駕

山口 四つ手駕籠は吉原通いの駕籠である。駕籠に乗ってくれたのはいいが、乗り手は軍用金に事欠くらしく、途中で質屋の方へ寄り道を頼まれたのである。吉原へ一直線で行く、質屋へ寄り道をしたのを四五足捨ると表現した。

質手代四ツ手のそばへ呼出され

清 賛。

四29

514 もてたやつ夜中おいていはいひ

山口 遊里でもてると遊女はいろんな手練手管を使って客をよるこばせる。睦言を囁きながら抓ったり、叩いたりするのである。客は「お痛い痛い」などと言いながら鼻の下を長くしているのである。後が恐い。

もてたやつねなんしたかと来てたをれ

明二義4

持テたやつぼうぜんとして土手ヲ行

四四34

清 賛。

515 毛せんでさしきを払ふ油むし

山口 小池章太郎氏の『考証江戸歌舞伎』に

よれば、芝居小屋では棧敷席の上客（芝居茶屋を通して来る）に緋毛氈を敷いて場所をすつらえたという。その予約が決まっている棧敷の手すりにはその毛氈を掛けておいたともいう。「油虫」は芝居関係の用語で只見客のことである。只見の客であるから客席が空いているときは大目に見てもらったろうが、定まった客が入れば追い払われることになる。言葉のつながりがしつくりしないが毛氈が来たので棧敷を出払うのは只見の油虫だということである。あるいは芝居小屋の出方を主語にすれば、毛氈で油虫を追い払うということかもしれない。

もふせんを持って店たてい、つける

安六義 4

もふせて乳母二三人おん出され

安八満 3

増田 油虫を主格にすると、正客が来たので手すりの毛氈を取って自分の座り跡を払って毛氈を敷いてから退散する、の解も可能か。
清 礎稿贅。

516 墨染へつく駕かき八おほへあり

山口 「墨染め」は衣のことで、坊主の遊郭通いである。「付く」は「乗らないか」とく

ついで行くことか、すでに乗って付いている状態か、どちらでもよいが、駕籠かきの方でその坊主に見覚えがあるというのである。駕籠かきはほぼ同じ場所で客待ちをしているだろうから度々出合えば坊主などという特殊な身分のものはすぐ覚えてしまう。それにしても度々とはとんだ破戒坊主である。

げん坊と見こんで四つ手あまへたり

安四義 5

そつと出る家を四ツ手ではこぶ也 傍二 28

増田 「おぼえあり」を今少し漠然ど「身におぼえ」のことくにとつて、これまでの経験、職業の勤から、この墨染はそれと見通して近付きすすめる、というのは駄目でしょうか。

清 同右。

517 ひな棚へもくさを置く八姉のちえ

山口 三月の雛祭りに雛を飾った棚へ姉娘が艾を置いたのである。幼い弟や妹に対して「お雛様にいたずらをするとお灸を据えるよ」という意味からである。この姉の方もまた幼い感じで、むかし親に言われたことをそのまま実行しているような気がする。

雛たなをさぐつて八見ルいしらしさ

明五天 1

清 贅。

518 死すべきとき死なざれば日本ばし

山口 相手への心だてから発した「心中」は芝居などの影響もあつて男女の相对死として元祿の頃上方で流行した。その波は江戸にも及び、庶民に美化されて流行の兆しをみせた。幕府も取り締まらざるを得ず、享保七年（一七三三）「御定書百箇条」の中に「男女申合相果候もの之事」として罰則を設けてこれを禁止した。その一節に「双方存命に候はは三日晒非人手下」とあつて、心中をし損じた場合、つまり生き残つた場合は三日間晒し者にして非人の身分に落としたのである。晒す場所は繁華な日本橋の袂であつた。この句はそれを詠んだものである。

なお、「死すべき時に死なざれば」は歌舞伎「ひらがな盛衰記」に「胸にこたへし味方の敗軍、死すべき時に死なざれば、死にまさる恥多し、今こそ木曾が最期の門出」のせりふあり、それからの文句取り。

日本はしばかをつくしたさし回ひ

明六松 2

清 贅。

『麻生路郎読本』鑑賞

堺 利彦

プロローグ

かつて、「川柳展望」の天根夢草さんの紹介で知り合いになった、同人の兼原道夫さんから電話があったのは、確か、いまから、三年前の夏であったと記憶しています。夏休みを利用して、東京の国会図書館などを巡って調べ物をするので、ぜひ会いたいということでした。道夫さんが上京した夜に、菓鴨の居酒屋でじっくりと歓談したとき、いま整理している橋高薫風さんの全句索引の改訂をやり遂げた後のテーマとして、麻生路郎の事跡をなんとしても纏めなくてははいけないうという意味の事を、いろいろと話し合ったことが忘れられませんが。

なお、このときの調べ物は、後日、「改訂・増補 橋高薫風川柳句集全句索引」(兼原道夫編・川柳塔社)として結実しました。

翌年も、また、夏休みに上京して再会を祝しましたが、実は「川柳塔」が平成二十二年九月に、前身の「川柳雑誌」の時代か

ら通巻すると、ちょうど一〇〇〇号を迎えるので、そのときに麻生路郎のことをまとめた本を出したいと思っているということをも、具体的に出版の時期も明らかにして、熱っぽく語ってくれたときのことをはつきりと覚えていきます。

柳人の集大成の単行本としては、大野風柳さんの『定本 大野風柳の世界』(新葉館出版)が著名ですが、私としては、俳人の『飯島晴子読本』(富士見書房)がすこく気に入っていたので、ぜひとも、この本のような内容のものを作らねばいいのではないかとお話ししたところです。そのこともあってか、このたびの題名が「読本」と名付けられていることを、とても嬉しく思っていたと思います。

『川柳塔』との有縁

ところで、私と「川柳塔」との縁はそれほど昔のことではなく、私が、平成五年に、埼玉川柳社から「現代川柳の精神」という最初の本を自費出版したとき、当時の日本

川柳協会に推薦図書として認定してもらおうと思ひ、専門委員であった「川柳研究」の渡辺蓮夫さんと「川柳塔」の橋高薫風さんのお二人に、拙著をお送りしてご高評をいただいたのが、薫風さんのお付き合ひのきっかけでした。

薫風さんからは、懇切丁寧な指摘やご高説を長文のお手紙にて頂戴し、それからというものの、何かにつけて相談に乗っていただき、ずいぶんとお便りの交換をしました。その中に、君の文章を見てみると「川柳雑誌」に難しい評論を発表していた詩人の高鷲亜鈍という人を思い出すという趣旨のお便りには、とても感激したことが忘れられません。その薫風さんも、先年お亡くなりになり、寂しい限りです。お手紙は、いつも万年筆をお使いになり、そのインクの色が今でも臉に浮かんできます。

その後、平成十年に日本川柳ペンクラブの編集により、雄山閣出版から「現代川柳ハンドブック」を出したとき、「川柳雑誌」・「川柳塔」関係の原稿は、基本的に東野大八さんと橋高薫風さんをお願いするということが進んでいたのですが、薫風さんに依頼した原稿が最後まで届かず、期限もあつたために仕方なく私がその穴埋めに書く羽目になりました。

そこで、作品鑑賞として、麻生路郎、麻生霞乃、八木千代さんの三名の方の句を、また句集では、麻生路郎の『旅人』を、そして、研究書として麻生路郎著の『新川柳鑑賞』と『川柳とは何か』川柳の作り方と味わい方』を分担させていただきました。とりわけ、八木千代さんの作品を取り上げることが出来たのは、監修者の尾藤三柳さんのご理解に負うところが大きいのですが、当時の女流柳人の実力者として注目していましたが、作品論で書く機会があったことは、私にとっても幸せでした。そのとき以来、八木千代さんとも文通が始まりました。

さらに、平成十二年に俳句の総合誌の一つである「俳句四季」において、川柳特集が数回にわたって組まれましたが、主要吟社紹介の回では、編集部から吟社の推薦を頼まれて「川柳塔」を推し、河内天笑さんに紹介記事の原稿を依頼したこともいい思い出になっています。

どうも、余談が長くなってしまいました。そろそろ、本論の『麻生路郎読本』の鑑賞へと進みたいと思います。

「麻生路郎アルバム」について

この手の本の基本的なパターンは、一般的

に最初の口絵として、色々な写真等を取り上げるのが常識的な配置であって、本書もそれに倣っています。

そのとき、どのような順序で、また、どのような組み合わせで整理するかは、まさに編集者の見識が問われることになるのですが、一応は、年代順に整理されていて、非常に見易くなっているのがなによりと感心しました。時として、奇を衒うような配置も考えられなくはないのですが、オーソドックスな整理がかえって清々しい気持ちにさせてくれるから不思議です。

それよりなにより、集合写真の柳人の名前がすべて明らかにになっていることに驚きを隠せません。たとえば、『川柳総合大事典』などの集合写真を見てもお分かりのように、古い柳人の先達者のすべてを特定して明らかにすることは、いまとなっては不可能といつてもいいでしょう。

聞くとところによれば、路郎が所蔵していた集合写真の裏面には、几帳面に名前が記されていたとのことで、このような整理が可能になったということですが、この一点を取り上げるだけでも、路郎の性格の一面を窺い知ることができるのではないのでしょうか。また、これらの写真は、川柳史の研究の面でも後世へ残す貴重な財産となるもの

と思われれます。

「麻生路郎作品」について

この章では、路郎の自薦個人句集である『旅人』（昭和二十八年十一月三十日）と、『麻生路郎句集 旅人とその後の作品』（昭和五十二年五月八日）から採られています。

これらの作品を鑑賞するに際しては、ぜひとも、凡例を参照してからにしてくださいと思います。といいましますのも、『旅人』は、一行書きではなく、二行・三行の多行書き（分かち書き）で表記されたものが多いのですが、それを半角空けで示している、底本が多行書きであることが一目で判るように考慮されています。こうした行き届いた配慮によって、底本の表記を知ることができるようになっており、ぜひ、元の句集の雰囲気味わってほしいと思います。

「麻生路郎文集」について

この章の「文集」は、『川柳雑誌』はもちろんのこと、「番傘」や「大正川柳」などの柳社のほか、「大阪毎日新聞」・「大阪新聞」・「毎日新聞」といったマスコミ関係や句集等の序文など広範な目配りにより、幅広く収録されています。

特に、「川柳雑誌」に連載された「川柳

行脚 鮮満ところどころ」は、先の大戦前の大陸川柳の状況が偲ばれて、歴史的証言としての価値は高いものがあると思われま

す。また、昭和十一年八月「川柳雑誌」第一五一号に掲載された「職業川柳人宣言」は、画期的な出来事と言ってよいでしょう。今日の柳壇においても、プロとしてやっていた環境が整っていないことが、川柳の最大の弱点なのかも知れません。七十年以上も前に、路郎が決然とプロ宣言したときの気持が、いかにほどであったかということ

「麻生路郎語録」について

を偲ぶとき、心震える思いがしてなりません。「語録」といえば、いわゆる六大家の中では、川上三太郎のものが有名ですが、こうして路郎の比較的短い文章の言葉を整理したのを見ますと、けっして三太郎に劣らない含蓄のある言葉の数々に驚かされます。やはり、大家をなした先達の言葉は、その一つ一つに川柳愛が感じられ、寸言ながら川柳性の本質を示唆する言葉の端々に揺り動かされる思いがします。

「麻生路郎物語」について

この「物語」は、東野大八が「川柳塔」

に昭和五十年一月号から昭和五十二年七月号までの長期間にわたって連載されたものです。

東野大八といえば、例えば、「川柳群像」(集英社)にみられるように、豊富なエピソードの挿入と多くの佳句を引用した柳人の人物論には定評があります。ただ、惜しむらくは、彼の蔵書の多くが何度か水害等に遭われて被害を受けていることもあって、やや記憶に頼らざるを得ない点があげられましようか。そのため、前掲書においても田村義彦さんの献身的な校訂により、一段と素晴らしい作家論・作品論として柳界の財産の一つとなつたともいえるのではないかと思われま

す。本章においても、柴原道夫さんを始め、編集委員の皆さんの並々ならぬ考証のご努力が偲ばれてなりません。それだけに、この章の物語は、必ずや後の「年譜」と共に、路郎の生涯を辿る貴重な基礎資料となるでしょう。

「麻生路郎の人と作品」について

この章は、厳選された柳人による路郎の作家論・作品論などを中心に編集されています。

特に、清水白柳の「路郎先生の初心時代」

は、明治の末から大正にかけての路郎の初期の作品と活動を窺い知ることができて、歴史的価値も高いといえますが、それにも増して、白柳の文章について編集者による微細に渡る解題がなされており、この点の資料的価値を高く評価しておきたいと思

「麻生葎乃作品『福寿草』について

ます。そのほか、河野春三の「詩性と大衆性の中で」、森田一二の「川柳職業人宣言」を読んで、「橋高薫風の「人物像」など好文が揃っていて、興味深い文章が揃っています。

麻生路郎の川柳生活、いいや、彼の人生そのものを語るにおいては、妻の葎乃を抜きにしては語れないでしょう。そのため、本書において、葎乃の個人句集『福寿草』を取り上げてくれたことは、わが意を得たかのように、嬉しく感じられてなりません。この思いは、路郎の生涯を知る多くの柳人も同様の思いを抱いているものと確信しています。

ところで、この句集の序は、路郎が書いていますが、これについては、「麻生路郎文集」の章に収録されていますので、ぜひ、そちらの章をご覧くださいと思います。そこには、なにか二人だけの秘密のよ

うな夫婦愛の極意が、行間から読み取れる楽しみがあるのではないかと思われれます。

「麻生路郎著作解題」について

この章は、大別すると、「Ⅰ 路郎が著した、あるいは選集・編集した書籍」四十二点・「Ⅱ 路郎が発行、あるいは編集に関わった川柳雑誌」五点・「Ⅲ 没後刊行された著作・句集・研究書」五点の合計五十二点(冊あるいは誌)のすべてについて、極めて詳細に解題されています。とりわけ、これらの書籍等を所蔵している全国の図書館を網羅していて、今後の研究のためにも大いなる助けとなることでしょう。

かつて、私が川柳を始めた頃、私の学んでいた大学の一般閲覧室には、現代川柳関係の図書としては、わずかに、岸本水府の『川柳読本』と路郎の『川柳とは何か』位しかなかったのを覚えてます。それだけに、この章で、その本の解題を見つけたときは、懐かしさで一杯になりました。

「麻生路郎年譜」について

実に詳細を極める「年譜」は、先に掲載されている東野大八著の『麻生路郎物語』を元に、『川柳雑誌』『川柳塔』等の柳誌や諸資料を参考にして作成されています。

たとえば、いま、戦前の柳誌の一つとして「きやり」が手元にあります。これを見ると、柳人消息の記事がとも面白く時間が経つのを忘れるほどです。たぶん、これらの記事を整理することによって、いろいろな裏の事情等も見えてくるでしょうから、柳壇の歴史的資料としても一級の価値があるのではないかと思われれます。

おそらくは、この「年譜」も、『川柳雑誌』『川柳塔』等の柳誌に掲載されている当時の消息を参考にして編集されたのではないかと推察されますが、それは、緻密で根拠を要することではなかったかと思うと、その苦勞が偲ばれます。また、路郎の戸籍等の確認など並々ならぬ日数と手間を費やしたのではないかというのを思いますと、編集委員の努力には頭が下がる思いがしてなりません。

「麻生路郎・葎乃作品索引」について

巻末に置かれた、この路郎と葎乃の作品索引は、何かの機会に、ふと、うる覚えの作品を確認するには、この上もなく便利なものと言えましょう。

ともすれば、こうした便利な索引の使い勝手に目を奪われて、ついつい編集者のご努力を忘れがちになりますが、こうした索

引を作成する作業というのは、とてつもなく、地道な努力と根拠を要する作業であり、ここにも、この本の誠意が見事に表れていて、なんとも嬉しいものがあります。

エピローグ

いわゆる六大家と呼ばれた大先達からみれば、孫弟子に当たる人達がそれらの系譜の結社の主幹になる時代が訪れています。いま、六大家の事跡をまとめておかなければ、後日、その作業すら困難なことになるでしょう。その意味でも、極めてタイムリーな企画であり、見事なまでの編集内容で、心から拍手を送りたいと思います。読後感の清々しさは、路郎の孤高に繋がる思いがしてなりません。

〈筆者略歴〉

昭和二十二年・北海道生まれ。昭和四十年八月「さいたま」入会、清水美江に師事。現在、「さいたま」・「バックストローク」同人、川柳学会理事。著書に、『現代川柳の精神』(埼玉川柳社)・『川柳解体新書』(新葉館出版、共編著)に『現代川柳ハンドブック』(雄山閣出版)・『川柳総合大事典』(雄山閣出版)がある。

愛染帖

新家 完司 選

三田市 福田 好文

悪人はいつも笑顔でやってくる

(評) 五十万円の健康布団?を買わされたお婆さん、「やさしくて、肩まで揉んでくれた。騙されたと思っていない」。現代のワルは巧妙だ。

池田市 栗田 久子

辛抱の仕方を学がおつきあい

(評) 欠点のない人はいない。お互いに我慢し合っておつきあいがオトナ。おつきあひも人生修行である。辛抱する木に花が咲く。

鳥取県 吉野いさお

あかつきの戻る頃には死んでいる

(評) 「あかつき」が金星へ再接近するのは六年後。そんなに気の弱いことを言わず、再挑戦を確認するためにも、くたばらぬようにしよう。

東かがわ市 川崎ひかり

およばれに夫婦で入れ歯安定剤

(評) お話の途中や大笑いしたときに外れたら大変。外出前チェックの最重要項目。高齢

化社会を迎えて「入れ歯安定剤」は売れ筋商品。

西脇市 七反田順子

人力車乗ってみたいが貧乏性

(評) 「貧乏性」とは、無駄遣いせず所持持ちが良い、ということ。しかし、思い切っておかないと一生後悔するかもしれない。

堺市 奥 時雄

言っとくが僕を除いた民意です

(評) 僅かな差で辛うじて勝っただけなのに、国民の総意でもあるかのように声高に言われる「民意」。少数意見も尊重してもらいたい。

豊中市 荒巻 夢

ラメ入りの服をまっとってクラス会

(評) 昔の彼が来るかもしれないクラス会。化粧には限度があるから、ヒカリモノでこまかす作戦。ひそかに用意した勝負服の出番だ。

堺市 澤井 敏治

今朝もまた無縁社会をウォーキング

(評) 人と人の繋がりが希薄な現代社会。散歩していてもそ知らぬ顔の人ばかり。だが、くじけちゃいけない、前を向いて黙々と歩くのだ。

河内長野市 坂上 淳司

保険証と薬持たされ湯治宿

(評) あれこれ気遣ってこころよく送り出してくれる。なんと嬉しいことではないか。その人のためにも、無事に帰宅しなければならぬ。

十二月八日も酒を飲んで寝る
浜松市 岡田 史郎

(評) 私たち日本人が絶対に忘れてはならない昭和十六年十二月八日。だが、安穏な日々は無謀な戦争の記憶さえ薄れさせてしまった。

京都市 高島 啓子

休めないころに天皇誕生日

蓮番の多い小説読みとばす

西宮市 片山 忠

家族葬妻と一緒に下見する

女房が力仕事もしてくれる

大阪市 小泉ひさ乃

整理してまたバーゲンで買ってくる

買ひ溜めの煙草が切れる十二月
米子市 高田 振作

だまつてりやバレルことない再生紙

金毘羅さん石段見たら帰ります

八王子市 播本 充子

たわむれに読んで悪酔いするブログ

慎重に選ぶ自分へのご褒美

河内長野市 村上 直樹

たこやきもひと味違う戎橋

エンジンもやれやれ今日は金曜日

寝屋川市 籠島 恵子

正解を二つにすればいい話

一糸纏わぬ桜と対峙して帰る

三田市 堀 正和

オパチャンに館で魔法をかけられる

遺影用写真が若くなってくる

和歌山市 木本 朱夏
棒立ちになる極月のど真ん中

大洲市 中居 善信
人肌の便座で今日が始まった

神戸市 田中 章子
らりるれる今朝もしつかり言えました

富山市 有澤 嘉晃
泣きなさい胸にしまえば毒になる

鳥取市 倉益 一瑠
美容院枯葉の匂い消えますか

福島県 七ツ森客山
枕元あと数行を読み残す

八尾市 宮崎シマ子
おばあちゃんて私のことかねえ鏡

西宮市 藤本 直
タバコ止め片手が宙を探ってる

紀の川市 宇野 幹子
自惚れた鼻を引っかく猫の爪

松江市 三島 淞丘
尻叩く妻が居ないと動かない

和歌山市 古久保和子
退院の妻へ息子の祝い唄

机から雪崩要るもの要らぬもの
折り込み広告すべて読むほど暇でない

黒石市 相馬 一花
地下茎のようにはびこる腐れ縁

ご先祖に顔向けできぬ浮気癖
高槻市 安田 忠子
カレンダーとうとう今年買いました

中一がもう別れたと言っている

藤井寺市 鈴木いさお
三合を二合に減らす大英断

鳥取市 福西 茶子
上品な人は入らぬ露天風呂

海南市 三宅 保州
これしきの石に躓く有頂天

八尾市 高杉 千歩
線香がご馳走ですな朝読経

米子市 成田 公一
古希過ぎて霧立ちこめる前頭業

堺市 志田 千代
無難とはソーデスネよりソーデスカ

堺市 村上 玄也
静かすぎる電気自動車でも困る

イクメンと蔑むなかれ世の流れ
B級と侮るなかれ食文化

大阪市 谷口 義
歯医者さんに行かねば治らない虫歯

働く人を余り見ないようにする
弘前市 高瀬 霜石

これ以上言いたいようのないノドチンコ
妻も子ももう味方ではないらしい

香芝市 大内 朝子
口よりも眼に口説かれていいるビビ

平凡に生きて人相までゆるむ
堺市 加島 由一
戦略的互恵夫婦のことだらう

酒よりも安いワインが今は好き

奈良県 渡辺 富子
貧乏神天井裏でスタンバイ

向き合ってあくび移している炬燵
香南市 桑名 孝雄

海老蔵よ酒道を軽視する勿れ
六十年励み酒仙にまだなれぬ

尼崎市 春城 年代
夫がいるような布団の抜けがら

西宮市 吉井菜々子
どて焼きと君が並んでいる至福

鳥取市 土橋はるお
立ち読みで覚えた通り上品に

上品に食べたらいよいよトロコテン
明石市 糀谷 和郎

アンパンをかぶりつく顔見せられぬ
枚方市 小林 わこ

一泊の旅に引っ越しほど荷物
大阪市 伏見 雅明

ホカロンで冬の財布を温める
芦屋市 黒田 能子

人よりも先にお辞儀をする余裕
枚方市 伊達 郁夫

和歌山市 柏原 夕胡
本当の悪女は悪女らしくない

三田市 北野 哲男
子が菓立ちさあ白地図へUターン

三田市 上垣キヨミ
夜歩きは徘徊 夜明けなら散歩

塩竈市 木田比呂朗
誕生日決まったようにループタイ

岸和田市 中岡 香代
九九言えぬ息子ポケモンみな言える

札幌市 三浦 強一
ユーモア句入れスピーチを盛り上げる

大阪府 米澤 俣子
どの位錆びたか開けてみたい脳

京都市 都倉 求芽
背伸びしてもなにも変わらぬ歳になる

大阪市 柴本ばつは
細細とくらししてますが元気です

鳥取県 竹信 照彦
泡食つてタイヤ交換雪降らず

藤山市 円増 純子
芋の芽がすすく育つ納屋の隅

唐津市 樋口 輝夫
バックスもエロスの神も共に去り

米子市 後藤美恵子
気ままな身なのに休日ホツとする

神戸市 山口 光久
言い勝ったあとで耳鳴り押し寄せる

藤井寺市 太田扶美代
無理ムリむりいつも笑えと言われても

大和郡山市 坊農 柳弘
息継ぎの酒まるやかに喉仏

大阪市 古今堂蕉子
激辛が好きですべてにスローモ

シトニー 坂上のり子
気がつくとすぐまた腕を組んでいる

尼崎市 市坪 武臣
道楽も趣味も同じで良き仲間

箕面市 広島 巴子
心から笑える友と膝栗毛

河内長野市 黒岩 靖博
豊満な美女に圧倒され帰国

鳥取市 岸本 孝子
漫才は品よく笑うものでない

大阪市 小谷 集一
ハミングの妻の心を覗きたい

海南市 堂上 泰女
戦争を知らぬ娘の捨てっぷり

岸和田市 井伊 東吉
カレンダー持つ人出合うああ師走

海南市 小谷 小雪
ぼろ帽子の匂いの中に父が居る

羽曳野市 吉村久仁雄
合掌で朝のエンジンかけて出る

米子市 白根 ふみ
雪原の丹頂小競り合っても品が

和歌山市 磯部 義雄
免許証返して知った店の距離

和歌山市 田中 みね
大豊作産んで育てた子が九人

高槻市 富田 美義
欲の道一寸外すと広い道

西宮市 牧淵富喜子
足の爪切れて勤労感謝の日

大阪市 田浦 實
言霊に酔い音霊に酔い酒に酔う

加東市 黒崎美紗子
カラオケでのんびりすこす小半日

高槻市 片山かずお
テンポいい話にちよつと身構える

堺市 矢倉 五月
リハビリで疲れて眠りこけている

大阪市 岩崎 玲子
自分史はすべて鏡の中に有り

和泉市 横山 捷也
自分史の原点父の山に着く

大阪市 大川 桃花
介護する姿すっかり見せておく

鳥取市 津村 律子
自分で買わず土産で貰う赤パンツ

青森県 松山 芳生
爆弾になれず花火になりました

西宮市 緒方美津子
懐が温いと顔が締らない

鳥取市 池澤 大鯨
病みあがり生きるファイトをしかと持ち

大阪府 桑田ゆきの
マフラーにネーム編み込む恋心

和歌山市 玉置 当代
ささやかな豊かさに酔つてもみじ狩り

大阪市 笠嶋 惠美
若い日の苦勞に見合う樂が来る

鳥取県 岩崎 和子
検診があるからシャツを買ってくる

弘前市 高森 一吞
最後まで友を信じて馬鹿でよし

紀の川市 北山 絹子
同居して姑と競り合う台所

神戸市 山崎 武彦
鮮やかに通行人を演じ切る

藤井寺市 若松 雅枝
五十年あなたと呼んだことが無い

岩田市 村中 悦男
爆笑のわけそつと聞く遠い耳

鳥取市 西川 和子
時間割全部こなしていい眠り

河内長野市 針生 和代
味見する度に体重増えている

大阪市 近藤 正
メタボです体重計は嫌いです

東京都 清原 悦子
キッチンに立つ前爪を丸くする

和歌山市 喜田 准一
味が濃い薄いで喧嘩する平和

大和高田市 鍛原 千里
頭張ろうケトルの笛が急ぎ立てる

長岡京市 山田 葉子
輝いた銀杏裸身で凜と立つ

大阪府 初山 隆盛
温泉へどうぞと子からお湯の華

藤井寺市 俣野登志子
遠来の友やはり勧誘帰りぎわ

堺市 大隅 克博
時刻表駆使した旅は忙しない

高知市 小川てるみ
達者だと思つた口がとちりだす

倉吉市 山中 康子
雰囲気に卷かれ合わせただけのこと

豊中市 藤井 則彦
シューマンのピアノに癒やされる夜長

富田林市 中井 アキ
この町が好きではつこり生きている

堺市 遠山 唯教
温かい心がならぶ献血車

大阪府 高木 道子
それぞれの愚痴を慰め眠る山

羽曳野市 徳山みつこ
物忘れいつものことよ気にしない

鳥取市 岸本 宏章
ふところが寂しいときは本を読む

和歌山県 森下よりこ
これ以上減らしてならぬ歯を磨く

岸和田市 雪本 珠子
達成感得られないままもう六十路

枚方市 海老池 洋
骨付きをしゃぶる獣の顔をして

大阪府 松尾柳右子
ラジオから智慧貰つてる昼下がり

大阪府 小栢こずえ
今日もまたふるい立たせる赤を着る

唐津市 岩崎 實
扁額は天真爛漫わが座敷

鳥取市 吉田 弘子
改めて私の役目相母と妻

大阪府 津村志華子
温かい灯りが欲しいひとりぼち

高槻市 乙倉 武史
ケータイで遠隔操作されている

尼崎市 小池 幸子
欲のない孫がくじ引き特賞を

米子市 中原 章子
中年からポマードの匂い消え

寝屋川市 小谷 滋彦
知徳体どれをとつても無いわたし

加東市 中上千代子
すいている医院不安になってくる

熊本県 高野 宵草
老いぬれば正月などは無くて良い

奈良市 辻内げんえい
団塊がつくつた日本壊れゆく

鳥取県 山下 節子
キーマンは国民なのに伝わらぬ

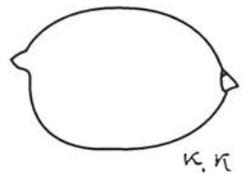
河内長野市 松岡 篤
教え魔に困っていますへポゴルフ

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 七三四句)



「極める」 三宅保州選

余生かけ極めてみたい五七五
 極めても極み切れない五七五
 多忙きわめる貴方ご案じ申し上げ
 五十年妻という名の極め付き
 嬪天下極めてからの得手勝手
 窮極の安泰場所は母の膝
 飽食を極めた果ての血糖値
 バীগーンへ主婦を極めに行くチラシ
 儉約を極め大きな蟹を買う
 極めつけ糠漬け茄子でしめくくる
 こだわりの極意を掬うチリレンジ
 嗅ぐだけで大吟醸とすぐ分かる
 洗柿の甘さ極める玉すだれ
 究極のレシビはほかほかの御飯
 大根の白を極めている冬日

東かがわ市 川崎ひかり
 八尾市 前田 紀雄
 和歌山市 田中 みね
 雲南市 菅田かつ子
 堺市 荻野 俊山
 東かがわ市 清川 玲子
 藤井寺市 鈴木いさお
 大洲市 花岡 順子
 鳥取市 有沢せつ子
 枚方市 小林 わこ
 羽曳野市 徳山みつこ
 西宮市 片山 忠
 千葉市 東 志郎
 藤山市 酒井 真由
 和歌山市 古久保和子

「極める」 山本希久子選

逝く人を見送る極上の言葉
 極めたい山の頂きまだ見えぬ
 極めてもおイチローは駆けつづけ
 頂点をきわめ兜の緒をしめる
 顔があることに気づいた草木石
 幸せの極み死んでも慕われる
 極貧の戦後にあつた芋りんご
 極めればもひとつ高い山が待つ
 究極のグルメわが家の膳にある
 秋色を極めて残る守り柿
 上り詰めてからが本当の試練
 未来よりいま現在を極めたい
 芋焼酎五十銘柄飲みました
 究極の贅は心地の良い目覚め
 ゆつくりと君の湖底を見極める

藤井寺市 太田扶美代
 長岡京市 山田 葉子
 藤井寺市 鈴木いさお
 枚方市 二宮 山久
 弘前市 高瀬 霜石
 大阪市 安藤なつこ
 池田市 上山 堅坊
 鳥取市 岸本 孝子
 弘前市 福士 慕情
 高槻市 島田千鶴子
 さいたま市 星野 育子
 堺市 羽田野洋介
 八尾市 田邊 浩三
 三田市 上垣キヨミ
 鳥取県 斉尾くにご

薄味で素材を生かす料理人	堺市	大隅	克博
極め付け耳かきほどの匙加減	神戸市	山崎	武彦
家内安全すべて食材無農薬	尼崎市	長浜	美籠
究極のグルメシンブルイズベスト	三田市	北野	哲男
警沢は極めましたと粗衣粗食	河内長野市	針生	和代
老舗の味極めたあとの雪月花	西宮市	山本	義子
配膳の順は本家が来て決まり	静岡県	蘭田	獭杵
骨までも埋めて極めた冒険家	鳥取市	岸本	孝子
極めたように見えても上になががある	シドニー	坂上	のり子
頂点を極めてからの保身術	堺市	柿花	和夫
頂点を極めた先にある蹉跌	奈良県	渡辺	富子
山頂で見ても太陽遠かなり	堺市	奥	時雄
山頂を極めて翼欲しくなる	西脇市	七反田	順子
アルプスを極めた足がまだ太い	田辺市	岡本	昇
頂点で等身大の風に会い	札幌市	小沢	淳
背の荷物見極めて跳ぶ水たまり	富田林市	関	よしみ
進退極まるとも一度ジャンプする	西予市	黒田	茂代
おばちゃんのチャリンコ怖いものがない	弘前市	高瀬	霜石
極論を吐いて妥協の余地がない	和歌山市	喜田	准一
突き詰めてみれば自分で播いた種	大山市	金子美千代	
殿中で刃を抜いたことがある	枚方市	伊達	郁夫
枝一本極めて床の間を飾る	藤井寺市	鴨谷瑠美子	
極めつきの技薄紙の鉋屑	富田林市	山野	寿之

極めると赤は夕日の色になる	豊中市	松尾美智代
ライバルのひるんだ隙を見極める	大和郡山市	坊農 柳弘
トップの座極めてからも恐妻家	大阪府	米澤 俣子
一芸を極めた人は皆謙虚	藤井寺市	若松 雅枝
山頂を極める日本一の靴	枚方市	丹後屋 肇
にんげんの味を極めている途中	香芝市	大内 朝子
余生かけ極めて見たい五七五	東かがわ市	川崎ひかり
極めたら私は鬱になりました	大阪市	井丸 昌紀
究極の目的自分らしく死ぬ	西予市	黒田 茂代
安心の極み女房の膝枕	堺市	荻野 像山
極めて遺憾大も大きな欠伸する	大阪市	谷口 義
極めれば無欲に還る冬木立	河内長野市	山岡富美子
枝一本極めて床の間を飾る	藤井寺市	鴨谷瑠美子
日々進歩極める化学終りなし	大阪市	奥村 五月
バーゲンへ主婦を極めに行くチラシ	大洲市	花岡 順子
窮極の願いは核の無い世界	弘前市	高橋 岳水
家内安全すべて食材無農薬	尼崎市	長浜 美籠
頂点で等身大の風に会い	札幌市	小沢 淳
道を極めた今も謙虚さ変らない	神戸市	山口 美穂
極めつけの顔が無様でないように	米子市	政岡未延子
究極の言葉はやはりありがとう	羽曳野市	酒井 一壺
頂きを極めて薄い空気吸う	鳥取市	前田 孝子
最高を極めて初心にたちかえる	堺市	遠山 唯教

茶の道を極めて痛むひび小僧
華奢な指美を極めてる伎芸天

極めるつもりが限界知る羽目に
極めても日々精進と言う匠

分け入っても分け入っても匠の極み

坊さんが極めたような事を言う

道楽を極めて生前葬をする

見極めて分相応の墓地を買う

極めつけの顔が無様でないように

極めると赤は夕日の色になる

ひいふうみ極めてみたい夢がある

見極めが悪くて風邪を引いている

笑うしかなかつた哀しみの極み

にんげんの味を極めている途中

あと一步ストンと抜ける竹の節

蘊奥を極めて喝采を浴びる

極めれば無欲に還る冬木立

人間を極めて渡る弥陀の膝

極めれば薬一本も花が咲く

秀句

千六本しかと女を極めてる

衣食住極めたあとと藪になる

にんげんを極めて猿にもどれるか

寝屋川市 小谷 滋彦

大阪府 米澤 徹子

大阪市 原田すみ子

京都市 三宅 満子

和歌山県 森下よりこ

鳥取市 倉益 一瑠

高槻市 片山かずお

三田市 白井 二英

米子市 政岡未延子

豊中市 松尾美智代

阪南市 森村 美花

大阪市 谷口 義

藤井寺市 太田扶美代

香芝市 大内 朝子

尼崎市 田原 一兆

寝屋川市 富山ルイ子

河内長野市 山岡富美子

河内長野市 谷 久美子

和歌山県 武本 碧

田辺市 小川 イセ

明石市 梶谷 和郎

鳥取市 土橋 螢

頂上を極め更なる夢をもつ

愚の極致天まで伸ばす気のタワ

極めたら物欲などは消えました

頂点を極めた先にある蹉跌

極論を吐いて妥協の余地がない

何事も極め得るのは強い意志

極めても極めてもお先がある

極めつけ旨い茶漬けでしめくくる

見極めて分相応の墓地を買う

飽食の行きつく所握りめし

ひとつとて極められずに師走来る

警沢は極め足りぬという遺影

人間極める死ぬより他はないだろう

感無量石川遼の一雫

父の喝底に極めの慈悲があり

大根の白を極めている冬日

持っている力ぎりぎりまで出した

極めると水は静かに澄んでくる

努力努力努力の先にある答え

秀句

哀しみの極み涙も出てこない

極めゆくそのプロセスが美しい

健康が最後にものをいうのです

東京都 清原 悦子

八王子市 播本 充子

和歌山県 柏原 夕胡

奈良県 渡辺 富子

和歌山県 喜田 准一

シドニー 坂上のり子

大阪市 伏見 雅明

芦屋市 黒田 能子

三田市 白井 二英

愛知県 早川 遡行

鳥取県 岩崎 和子

豊中市 藤井 則彦

松江市 松本 文子

唐津市 樋口 輝夫

生駒市 飛水ふりこ

和歌山県 古久保和子

京都市 高島 啓子

紀の川市 辻内 次根

神戸市 山田婦美子

富田林市 中井 アキ

大阪市 田浦 實

堺市 志田 千代

太 い

鈴木 公弘選



瘦せたいと思う所に肉が付き
 太ってる医者で安心して言える
 決めたのはあなたの太い首根っこ
 太い眉蔭の人の思い込む
 野良に行き野良に終わった太い指
 団塊の世代絆は太かった
 新築の表札太字誇らしげ
 大きな口開けねばならぬ太い寿司
 はやぶさの快拳基地との太い糸
 雨有情太いさんまの腸を抜く
 ご近所と太い絆のある強み
 ずんぐりと太いトコが歩く短足よ
 雷鳴は男の太い叫び声
 安定感あり頼もしい太い足
 太かったパイプが細る退職後
 太く短くなんて格好つけるなよ
 利益など眼中にない太つ腹
 注連縄の太さへ社重く見せ
 重くてもコントラバスをやってます
 年金の暮らし思えぬ太つ腹
 太鼓判誰に押ししか記憶ない
 羊羹の太さでわかる節約度

(俗)久美子

客山

孔一

克博

俶子

菜美

巴子

堅坊

像山

千代子

大鯰

玄也

(失)五月

幸雄

婦美子

猿杏

孝一

政勝

(田)章子

入浴のたびに悔いているメタボ腹 (鈴いさお)
 もう五キロ落としてくれと膝が言う
 哲男
 会う人を重ねて太る名刺入れ
 和郎
 マニフェストゴシック体で惑わされ
 充子
 雪道に尻餅ついた太いソックス
 はるお
 甘い汁吸ったか太いソクラテス
 黒兎
 首太くなって帰れと子を送る
 岳水
 凶太さが好き優しさあれば余計すき
 ふみ
 愛されているのか娘太りだす
 正和
 霜降りに見える美人と見合いする
 一花
 注射器が太いなあつち向いところ
 修
 太いとは言えず健康美を褒める
 奮水
 太いからいいってもんじゃない尻尾
 霜石
 一途さが面に出ている太い眉
 美龍
 太い足じゃれたブーツに拒否される
 陽子
 佳
 大根足が太いとは限らない
 ミツ子
 愛されて太るしかないペット達
 扶美代
 焼け跡の太い根っこが芽を出した
 俊子
 コーヒー代を任せてしまおう太つ腹
 かすみ
 踏まれてた雑草だもの根は太い
 くにこ
 人
 太ったと太った人に言い難い
 遡行
 地
 名も金もないが太い手二本ある
 淳
 天
 風評に叩かれようと動じない
 武本 碧
 軸
 冬將軍の太い口ひげ抜いてやる

豆 腐

安芸田泰子選



湯豆腐を囲む笑顔はあるがまま
 (宮)弥生
 湯豆腐に溶け込んでゆく白い息
 (宮)弘子
 単身赴任主役つとめた冷奴
 孝雄
 お豆腐に助けられてる介護食
 (矢)五月
 豆腐屋のラップを追った幼い日
 章司
 年金がだんだん豆腐好きにする
 正和
 日本の大豆と貼ってある豆腐
 英子
 マーボ豆腐元の姿を恋しがり
 柳弘
 たかが豆腐されど豆腐の嵯峨どころ
 正雄
 豆腐屋の湯気から町が始動する
 キヨミ
 湯豆腐が煮えて平和な老夫婦
 山久
 好きな娘の得意料理は冷奴
 一壺
 湯豆腐も飽きてきました赴任先
 客山
 豆腐屋のラップは余韻残る路地
 輝夫
 シンプルな暮らしは豆腐が似合う
 俶子
 あつあつの豆腐が踊る口の中
 蜂朗
 夏負けの食思にやさし冷奴
 岳水
 また一つ昭和が消える豆腐売り
 満子
 湯豆腐に逢いに来ました南禅寺
 (鈴いさお)
 豆腐屋のラップ鳴ってる遠い夢
 倫子
 豆腐屋の嫁に行けない朝寝坊
 すみ子
 島豆腐おきなわは未だ基地で揺れ

湯豆腐が軽いリズムで踊り出す

飾らない木綿豆腐のような人

手の平で豆腐も切れる主夫である

湯豆腐が子供の箸をずり落ちる

面倒な話湯豆腐浮いてきた

角とれておぼろ豆腐になる夫婦

名水をくぐって豆腐らしくなる

湯豆腐が食べ頃ですと浮き上がる

どんな豆腐もほくを裏切ったりしない

豆腐屋で木綿と絹の処方箋

湯豆腐の意地なかなかくずれない

湯豆腐はゆっくり愚痴を聞いてくれ

お豆腐へいつでも和む四季の風

拘われるチャンス wait っている豆腐

湯豆腐へやつと主役になりました

住

湯豆腐の中へ溶け込む今日の鬱

単身赴任豆腐切る手も様になり

相方を立てて豆腐は我を張らぬ

母の掌で切ると豆腐はおとなしい

針供養豆腐に何の罪も無い

人

絹漉しと木綿の違い君と僕

地

絹漉しの意志の弱さが焦れたい

天

お豆腐は器用貧乏かもしれないぬ

軸

湯豆腐があればうれしい冬の酒

志華子

碧

強一

庸佑

(山)節子

(後)美恵子

ふみ

昌鼓

霜石

奮水

典子

一風

可住

扶美代

小雪

光久

恭昌

伊津志

久仁雄

雅美

遡行

美籠

充子

リスト

鈴木いさお選



亡夫の名が消えて久しい紳士録

不味いなあ悪のリストに載っている

諍いは女性の並ぶ住所録

リストから俺もお前も洩れている

群雄割拠リストにはない実力者

容疑者のリストにあつた私の名

欠席のリストに浮かぶシルエット

夫の計を知らせるリストを迷ってる

極楽の予約リストに僕がない

死神がリストながめてこちら見た

リストからまた一人消えひとり消え

リストにはうるさい人を先に入れ

民生のリストに載っているらしい

我儘のリストのトップ夫です

のぞき見た閻魔のリストから不眠

ブラックリストに載ったか算ずしが寒い

騙されやすい順に名簿を組み替える

寄付の額多い方から御芳名

売れゆきのリストは遣らせかも知れぬ

白骨になつても消えてないリスト

捨てられたリストに載っているわたし

リストから若い力を借りてくる

1・17あれから家財一覽表

千人のリストより君のアドレス

強敵のリストにロボットの写真

リストカットの数だけのんだ苦い水

騙しよいリストに載っていた不覚

リストから漏れて左遷地の地酒

中国の視野に日本がないリスト

死神のリスト盗んで書き変える

昇進のリストに僕が笑つてる

合格のリストに桜舞う四月

メル友のリスト草食系ばかり

内定のリストへ肩の荷を下ろす

台帳の綴じ目に僕が見え隠れ

平和ならブラックリストなどいらぬ

絶滅危惧種もうすぐ人が記載され

住

故だろ何時でもリストからもれる

グルメ誌に載らないボクの秘密基地

次の世の伴侶のリスト出来ている

結納のリストに爺と婆も書く

友達リストに下戸が見当らぬ

人

ジェントルマンばかりでないぞ紳士録

地

リストラのリストは故意に流される

天

善人のリストが飛ぶように売れる

軸

相続のリストにローンの残りも

ばっは

くにこ

美義

幹子

美千代

捷也

かつ子

秀四

寿之

滋彦

浜丘

庸佑

孝雄

千鶴子

久仁雄

ルイ子

雅明

扶美代

茶子

正和

泰女

霜石

充子

初歩ノ教室

題一影

鈴木公弘

一年の総括と元旦の計も生々しい時期にまたがる教室ですので、できるだけ多くの句にコメントしよう心がけたつもりです。

原 年奇の影は曲った腰たたき

清

添 年奇りの影が曲がった腰たたき

自分の影とは長いお付き合いです。腰痛も生じます。影ともどもご自愛ください。

原 金星に写る気がする影一つ

のり子

添 金星に映る気がする影一つ

日本の本格的な惑星探査までにはもう少し時間とお金がかかりそうですね。

原 影ながらいつも気にしておりました

武臣

この場合は「陰ながら」が良いと思います。

原 月影が残った朝の深呼吸

智加恵

添 月影の残るあけぼの深呼吸

月影ではなく月そのものが残っていませんか。今日への期待がふくらむ句です。

原 遊んだ山家建ち並び影もない

こずえ

添 家建ち並び遊んだ山の影もない

宅地造成の結末ですが「ふるさと」が消え

るほど寂しいものはありません。

原 魅せられた影のある人裏を知り

百合江

添 魅せられた影ある人の裏を知り

シヨックですよね。まさか……という雰囲気

が漂っています。着想は佳作級です。

原 長い影シャッターチャンスじつと待つ

弘光

日の出？落日？いずれにしても一瞬芸に賭

ける緊迫感が伝わってきました。

原 ブラットの夕陽の影は寂しくて

弘泰

添 ブラットホームの夕陽の影は寂し過ぎ

添 削句の上が八音字となり「そんなの有

か」と思われたかもしれません。「ブラット」

では作者の居場所が伝わりにくいですね。

原 庭の木が障子に影絵写し出す

ふみ子

庭が必ずしも我が家の……という訳ではない

でしょう。写生句と言えるかもしれません。

原 障子張り影絵のきつね孫に見せ

ちづる

絆を通して伝えたい遊びの一つですね。

原 満月に結ばれそうな影ふたり

健柳

「影二つ」として思わせぶるのも芸です。

原 夕焼けの長い影追ひケンケンバ

節子

懐かしい風情です。「影追う」とすればス

ムーズに下5につながります。

原 影踏みしてる子供の声かひびいてる

綾乃

添 影踏みの子どもの声が燃えている

極端なくらいの表現が句に力を与えます。

原 幼な日に影ふみ遊び思出す

久子

添 幼日の影ふみながら日向ぼこ

趣旨に合わせて手を入れてみました。

原 上司の影そと近づき踏んづける

宏造

上司部下の関係は嫁姑の関係に似ていま

せんか。こと言が気に障るのですよね。

【影法師】

原 影法師だけが私に従いて来る

秋星

添 影法師だけが私に従いて来る

久しぶりに「従いて」と書いて「ついて」と読ませる句に出合いました。

原 影武者がよろけてしっぽ掴まれた宣子

宣子

過去形にすると説明になりやすいです。

原 つきまとう影に恥じない道歩く

安子

自分との戦いは厳しいですね。

原 影武者がこの国にまだ居るらしい

正二

スパイまで数えればゴマンといえるでしょう。

原 脇役にも影は離れずついて来る

起世子

原 よりそって影はいつでも味方する

美紗子

絶対に裏切りません。

原 影武者が表舞台で大あわて

宏之

原 影武者がしゃしゃり出て来る茶番劇

志郎

表面描写だけになった点が気になります。

【父母の影】

原 信仰の原点にある母の影

敏治

原 丸い影亡母そっくりで慌てたす

登美子

原 辛折り彫った地蔵が亡夫に似る

一子

原 ショッピング一緒に歩く母の影

弥生

原 白黒の影絵の如く生きた父 孔 一
原 親の影踏みしめながら夢を追う 玲 子

【影を落とす】

原 就活に長びく不況影落とす 英 男
原 内蔵にストレスという影落とす 道 子
原 争いは心に暗い影落とす 久 美子

以上、親や配偶者の影、常どうの言葉を使つた作品をまとめましたが、広い視野を維持するために身近な句材や安易な用法に飛びつかないよう高めていただきました。思います。

【月の影】

原 十三夜うさぎの影が睦ましい 律 子
原 十三夜影も淋しい通夜帰り 冷 子
原 嘔むほど味が沁み渡ります。 滋 彦
原 月の海餅つく影にしておこう

【もう少し深めてほしい句】

原 被爆の影遺すドームに鳩群れる 美 恵子
添 被爆とは知らない壁に影があり
盛り付けが多くなるほどメインの影が薄くなり
なります。

原 お互いの影踏まぬよう歩いてる 一 兆
添 お互いに影を踏まないよう歩く
原 家中に満ち満ちている亡妻の影 堅 坊
悲嘆の余りか、やや上滑りを感じます。
原 影のうすい男と暮す強い女(ヒト) 温 子
添 影薄い男食わせているわたし」
強いのですから粹がつてください。

原 影になり日向になつて子の手本 紀 子

難解な句になりました。普通に考えれば

「日向」が出ているのですから、対立軸としては「陰」ですよね。しかし「影」には影武者という意味もありえますからねえ。

原 私の影が伸びたり縮んだり 真 由

「伸びたり縮んだり」という使い方は平凡です。描けるはず。もつと踏み込んで下さい。

原 師の影に離れずついて学び取り 孝 明
添 師の影を離れずついて糧とする
学び取つて逃げてはいけません：

原 二人の影嫉妬している空の雲 エ ミ
添 二人の影に嫉妬している茜雲

【入選】

ややこしい影がちらつくレントゲン 開 子
宗教の影を背負つた自爆テロ 義 雄
もう急ぐ事もない道影抱いて 淑 子

友の死に我が身重なる影が有る 紀 雄
死の影がちらつく夜は眠られぬ 章 子
ふるさとの島影見えてはやる胸 孝 代

できるだけ体言止め(名詞止め)にしないよう努めてください。安易な句の作り方を覚えてしまったら、やがて行き止まりです。

お節介で影薄くなる暇もない 正 彦
穏やかな海に覇権の影が見え 憲 司

物忘れ影もぼんやり頼りない 惠 美
決別の未練ひき摺る長い影 幹 子

【佳作】

何処までも君に焦がれて伸びる影 菜々子
連れ添つて大きな影の中 眞砂子
酔つ払い自分の影を踏みに行き 篤
揺れ動く私を笑う黒い影 菜 摘
ふられた腹いせに影を踏んづける 酒 坊
だんご虫みたいな背中叱る影 眞 澄

チョッピリと影のある人好きになる (出) 洋 子
ウインドウ我が影を見て目をそむけ 治 子
千鳥足自分の影に道を聞く 憲 彦
スマートな影は私の虚像です (岡) 洋 子

【今月の推せん句】
電飾を消して月影すくい取る 山根 妙子
虚飾の光と真の光：人間が作った世界に長くいると、何故にくたびれるのでしょうか。

誰も来ぬ木の椅子一つ影一つ 宮川 俊子
いにしへの哲学者も詩人も、みな孤独でした。でも、それを楽しんでいたようです。
水たまり跳んでいるのに影がぬれ 高田 振作
いい着目です。

【私の句】
初恋の影に似ている雪おんな
ふりむいてみれば私に影がない
(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

秀句鑑賞

同人吟 夏目一粹

—1月号から

今回二度目の同人の秀句鑑賞を仰せつかり身の引き締まる思いでした。

自分の力もかえりみず同人さまの鑑賞とは大それたことですが断る理由もなく勇氣もなく「えい儘よ」と受けさせて頂いた次第です。ずかずかと入り来るプレッシャーに笑いは消えて、ただ一心不乱に取り組みました。

でも情緒・郷愁・詩心・心情・新発想・時事など私好みの我が儘を少しばかり入れました。対象句一七五四句誠心誠意読ませて貰いましたが入選確率一・一%では「何をか言わんや」です。どうぞお許しください。

また来るかもしれぬもう来ないかもしれぬ

山本 希久子

「また」「もう」と言う言葉はややもすると「長くなる」「来ない」と言う否定的で曖昧な要素を含んでいます。待つ身になれば辛くて淋しいものですが一抹の望みもあります。どなたのことでしょうか。

時どきは笑う化石になりました

谷口 義

人間は加齢とともに、少なからず死火山となり化石にもなるのです。せめて、つくり笑いででも笑いを忘れないように明るく生きましよう。

腹減ったまま冬眠をする熊よ

鈴木 公弘

昨年は異常気象で秋山には木の実やドングリが少なく、勢い人里に熊が出没して人間どもを威嚇しました。捕まると探知機を付けて放免・危害を加えると射殺と哀れな末路になりました。「空腹に熊も言いたいことがある」私の心境ですが如何なものでしょうか。

言つことを聞かぬと書いてあるカルテ

堀 正和

お酒やタバコを止めなさいと言われても、「ハイそうですか」と断ち切る人はいないでしょうね。素直に聞ける時は余命幾許もない時だと思えます。にんげんは弱い動物です。

レコードの溝から秋が深くなる

木本 朱夏

「レコードの溝から」ユニークな発想に虜

になりました。更けゆく秋の夜：わびしき想いに：ひとり悩む：「旅愁」の唄が聞こえて来ました。山陰も雪が降っています。高英男の「雪の降る町を」が私は好きです。

悩まないで下さいよとしたお世辞

倉益 一瑠

何気ないちよつとしたジョークやお世辞には本音が隠されています。どなたに言つたのでしょうか。真面目人間にはまともに受けて悩みの種になりかねませんよ。

寒風にさらされ凜と立つ舞金

山岡 富美子

師走の冷たい風に耐えながら「凜と立つ」姿勢に社会正義を垣間見ました。よく見る厳しい情景ですが私にはとても微笑ましく映ります。こう言うボランティア精神が、この世知辛い世に光明の灯をともし勇氣を与えてくれるのですね。

たまさかに来るチャルメラの音も夜寒

長浜 美籠

私の住む稲葉山地区にも夜泣きラーメンの車がやって来ます。今では都心でもあまり見かけなくなりましたが、チャルメラの音を聞きますとサラリーマンの哀愁がほとばしり、もの悲しくなります。大衆情歌とはチャルメラかも知れませんか。

蜘蛛の巢の努力をそつとしておこう

金子 美千代

チャンスだと勇んで蜘蛛の巢にかかる

奥 時雄

クモの巢にひかかるとソつとして箒で払いのけます。でも生きるために懸命なのです。そつとしておきましょう。チャンスだと張り切るるとクモの巢のような罫と落とし穴に嵌まるのも事実です。気をつけましょう。

価値のない人間なんているものか

相馬 一花

おつしやる通りです。人はみな長所短所を持ち千人十色で、それぞれ違いはありますが「生存権」「学問の自由」「表現の自由」など生きる権利と自由があるのです。

没句にも句の魂は生きています

小野 句多留

先日恒例の没句川柳供養大会が開催されました。祭壇には没句になった2万句超が山積みなされ、読経の流れる中、全員が焼香しました。日の目を見ることは叶いませんが、その魂が奮い立たせてくれるのです。

花を愛で葉を愛で落葉掃く苦勞

矢倉 五月

桜吹雪・散るもみじ・百日紅(裸木)など思い浮かべています。深く散る花や葉の散り

際が美しく愛おしくなります。でも朽ちた花や枯葉を供養するのにも人のつとめですよ。

狂わない時計で余命刻まれる

渡辺 富子

正確に刻むのが時計の使命ですが黄昏の老いには、たまに狂って欲しくなります。でも考えてみますと人は公平に歳をとり、余命であれど生ある限り正しく刻まれるのです。

さようなら言うのが淋しいとしになる

植村 喜代

明日という夢と希望のもてる「さようなら」は活気がありますが、歳を重ねますと淋しさを感じます。特に滅多に会わない人とは「さよなら」が言いづらくなり「お達者でね」と私は言っています。

針ほどのすき間をぬって出た本音

左右田 泰雄

本音にもいい本音とわるい本音があります。「針ほどのすき間」から出た本音となるといい本音ではなさそうですね。そこまで辛抱していた本音なら仕舞っておいた方が良かったのでは。でも人間誰しも同じですよ。

匙投げて拾いについてまた投げる

村上 ミツ子

匙投げたのは自分かそれとも身内なのでしょう。はつきりしないところに想像が膨ら

みますが「拾いについてまた投げる」、未練と諦めが交差しますね。

二兎追って二兎を獲得してみせる

春木 圭一郎

今年こそ二兎追うことは止めにする

中村 金祥

今年は無年なのでとらせて頂きました。相反する二句ですが、強気と弱気を詠んだ句で面白いですね。二兎獲得も不可能とはいいい切れませんが、二兎追わないと言うのも理だと思えます。

村まつり鎮守の森はいきれ

ミステリー彼岸花へと誘いこむ

嶺山 本益子

川柳ふうもん吟社に所属され川柳一筋長い道歩んで来られた益子さんが平成二十二年十二月十日突然心筋梗塞で急逝されました。享年八十歳でした。

昨年夏頃から体調を崩されて入院を繰り返され、久々に十一月の句会に杖をついて出てこられました。嬉しそうなお姿を見て一同感激したのですが、川柳塔同人として十二月号が最期の句になりました。冒頭の2句は心なしか「鎮守の森」「彼岸花」などこの世への別れのように思えてなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

秀句鑑賞

— 1月号から

高田 美代子

破れ障子当て貼りをして冬を待つ

見山 温子

歳の瀬はあれやこれやと忙しいが、せめて
ござっぱり整えた我が家で新年を。

津軽三味弦から雪が舞い踊る

山野 寿之

吹雪と腸を抉るかと感じさせる音色の中に
切々と訴えるものを聞いた気がする。

はいはいと妻に従う訳がある

北山 絹子

もはや俺について来いではないのかも。

達者でと見送る母を振り向けず

谷 久美子

涙が零れるからと逃げる様に帰るのです。

情けないなんて言うまい思うまい

羽田野 洋介

人間の脚は前に前にと進むように出来てい
る、何かを見つけるまで行くしかない。

故里が映るテレビに驚りつく

赤木 妙子

郷愁の彼方に父がいて母がいて自分がい
た。ただただ懐かしくてテレビの前を離れら
れない。

聞く耳を持ってば出世をしたろうに

磯部 義雄

ものは言うてる内に気付くものだといわれ
る。聞き逃した部分に大切なものがあつた。

日向ほこなどはしてないおばあちゃん

森下 よりこ

元氣なお婆さんの役回りは様々で、第一気
持ちに甲斐性がある。今の日本を建て直すの
は高齢者だと思いたい。

忘れても良いんだ思い出せばよい

中原 章子

忘れたことを気にすれば惚けると言われる。
手を貸して欲しいが猫は知らんぷり

大塚 美代子

今、正に師走のと真ん中、側にある物は全
て味方になりたい、心忙しい季節です。

愛妻をちゃん付けで呼ぶおじいさん

下田 茂登子

元ふたりに戻った部屋です、昔を振り返
り、労りあえば優しさも戻る、十五時のお茶
とあの時この時と二人の歴史をなつかしむ、

○おちゃんと呼んで日々好日なり。

右は白左は黒でくる噂

國實 力

噂ほど不確かで厄介なものはない、言い触ら
す風があるから無責任に伝わって行く。困つ
た事だと思つ。片方の、耳で聞くから依怙蟲
眞。私の実感句ですが…。

年金を増やす政治を待っている

前川 善之

満足を纏うことも食する事にもこと欠いた
時代に、国を守り家族を守り子育てをした、
そんな人達にこそ、優遇するのが先決ではな
いか。

ジーパンを洗って縫って叱られる

高野 不二

汗を拭き拭きロングブーツを履いていた。
世の乱れは服装とことばの乱れからだと思て
いる。裁縫をしない、出来ない人が裾や袖を
たくし上げて街を歩いている。わざとにして
も破れジーパンは寒い。昔は春夏秋冬の掟が
あつたのに。

おくやみの欄に初恋だった人

岡野 すみれ

まさか、そのまさかが的中、頭の中の走馬
灯が急に回り出して、言いようのない思いに
刻が止まる。人生ってこんなものなんだ、出
逢いと別れについてくる運の様なものを、感
じさせられた。



同じ想いで、びっくり！

毎月、「愛染帖」の選を楽しみにしています。数ヶ月前の応募用紙の端に、「ずっと出しているのですが没ばかりです。もう投句をやめようかと思っています」と、書いてありました。ちょっと驚きましたが、率直に述べておられるので不快には感じませんでした。むしろ、「同じように思っている人がたくさんおられるだろうな……」と恐縮しました。

愛染帖の応募は毎月二百六十名前後ありますが、掲載できるのは半数ほどで、百三十名近い方々が没になります。もちろん、誰が入選で誰が没か、などはチェックしていませんので没続きということもあるでしょう。

選に際しては「良い句を見逃さないこと」を、第一に心がけていますので、新鮮味のある良い句さえ出してくださいましたら必ず入選します。どうか腐らないで、根気良くチャレンジしてください。

しかし、「会心の作なのに、なぜ没なのだ？」と、納得できないことがあるかもしれません。そのような場合、原因の一つとして同想句の存在が考えられます。たとえば、

挨拶はするが名前が出てこない
 ばったりと会ったが名前出てこない
 ばったりと逢ったが名前出てこない
 もどかしいとつさに名前出てこない

右のように、「とつさに名前が出てこない」という状況を詠った句は、私が記録しているだけでもこれだけあります。

探せばもつともつとあるはずですが、他には、

鍋いっぱいおでんを炊いて妻は留守

おでんいっぱい作って妻はクラス会

妻の留守おでんばかり食べている

このように「妻の留守」と「おでん」の組み合わせもしばしば目にしますので避けたほうがいいでしょう。

しかし、「同想句を避ける」と言っても、初心者の方からすれば、「他にどのような同想句があるのか見当がつかない。もつと実例を示してほしい」という声が聞こえてきそうです。ハイ、同想句の実例については、今後も折をみてこのコーナーで取り上げるつもりです。しかし、具体例を覚えるだけでは応用が利きません。同想句を避けるための心構えとして、「第一発想は捨てる」ということが、しばしば言われています。

先日、ある句会で「板」という題の選をしました。似たような句では「妻と母との板ばさみ」という内容のものが目につきました。皆さん、真つ先に浮かんだのが「板ばさみ」だったのでしよう。そのように簡単に思いついたものは捨てて、誰もが思いつかない素材を掘りまわで粘ります。

ただし、あまり神経質になりますと句が作れなくなってしまうかもしれません。ユニークな句はのびのびとした自由なところから生まれます。「自由」とは「第一発想は捨てる」というセオリーにも囚われません。第一発想がユニークな閃きかもしれません。その発想が平凡か否かを判断するのは鑑識眼（選句力）です。この鑑識眼を高める方法などについては次号でゆつくり考えましょう。

中川 一さんからの手紙

編集部あてに送られてきた手紙ですが、中川一さんのご好意により掲載させて頂きました。

編集部

前略11月19日にご惠贈いただきました
「麻生路郎読本」を拝受。厚くお礼申し上げます。お礼を申し上げるのが大変遅くなりましたこと悪しからずお許し下さいませ。厚い本なので、まだまだ詳細には読めず、とびとびに走り読みの状態ですが、近年にない出色の本だと思っております。柴原道夫氏はじめ編集委員の方の編集もこれ以上なく素晴らしく、感銘しております。皆様にそうお伝えいただければ幸いです。私の持つております神戸、大阪の勉強会メンバーには是非買おうようにすすめるつもりでおります。私の知らないことも多く載せられているように思いますので、じっくりと読ませていただきます。

なお、あまりに素晴らしい本なので、わずかに気にかかることが二つありました。

一つは「旅人」作品の表記です。多行書きと一行書きは、明らかに印象が違います。麻生路郎存命中の句集表記を変えられたことに、私は少し違和感を覚えます。昭和28年11月刊行の「旅人」を持っていますので、余計にそう感じます。多行書きの句をまとめて原表記のまま、4段組、3段組で収められた方がよかったです。

その二は、東野大八氏の「麻生路郎物語」(3) P 213、217、年譜明治37年、39年 P 470にある小島六厘坊とのかかりです。大八氏の文はまったくの誤りと思えます。小島六厘坊は、府立市岡中学の同級生川上七厘坊(日車)と文学仲間として共に、「病牀六尺」にも名が出る、正岡子規に認められた俳人松村鬼史に作品を見て貰って、明治34年から37年秋までは、各々善衛門(又は衛

門など)、虹村の号で、新聞「日本」の正岡子規(没後河東碧梧桐)選の俳壇と「大阪新報」(のちの「都新聞」、朝日、毎日)に次ぐ有力地方紙)俳壇に俳句を出していました。37年7月から新聞「日本」の井上剣花坊選柳壇「新題柳壇」にも出句。37年11月には、「大阪新報」に柳壇「新柳壇」(のち「新報柳壇」)を創設、選者となり、文学的川柳を〆と断って作品募集をするともに、「大阪日報」(のち「関西日報」、暴露記事中心の三流赤新聞)の「浪花樽」(柳壇というより時事狂句欄に近かったのではないか)を、〆愚劣極まる川柳様のもを掲載せり。〆とはげしく批判していました。「大阪日報」を所蔵する図書館がないので、麻生天涯が出句していたかどうか不明ですが、木村半文銭はのつべら坊、寒浪の号で投句していました。その半文銭が「川柳雑誌」(大15・7)の「忘れ得ぬ事」とに、「浪花樽」のことをかなり詳しく書いていますが、作家名の中に麻生姓も天涯号もありません。又、「大阪日報」より大きい新聞に既に柳壇を持ち、「浪花樽」を非文学的と批判していた六厘坊の名も当然ありません。大八氏が書く、小島六厘坊との出会

いは、同氏の思い込みにすぎません。大八氏の文に、路郎が六厘坊との出会いは大阪日報の浪花樽の常連投句者の立場にはじまり、六厘坊の「新編柳樽」に参加している。路郎の柳誌初登場がこの柳誌というわけである。年齢もともに十八歳前後、(山雨樓メモ)とありますが、「新編柳樽」第一、第三には、新聞「日本」の劍花坊柳樽寺系作家と市岡中学系作家の出句のみで、天涯の句はこの雑誌のどこにもありません。年齢は十七歳。ここも誤りで、従って、年譜の明治37、38年の六厘坊との関連はすべて誤りです。日車が「番傘」(昭30、昭32)に連載した「大阪川柳小史」に六厘坊のことが詳しく書かれています。六厘坊が大阪柳界を大統合した「葉柳」発足当時の同人名に麻生天涯はありません。又、「浪花樽」に投句していた中村喜月、木村半文銭(当時寒浪 篠村力好や読売系の浅井了軒(のち五葉)は、主要誌友名に入っていますが、川柳に手を染めたのは明治37年の晩春(路郎「楊柳」創刊号、大8・6)の「明治37年「読売新聞」の柳壇へ投句をはじめたのが最初」(橋高薫風「川柳総合事典」路郎の項、昭59・6)

という路郎は、同じ読売系なのに何故か入っていない。半文銭の文もほぼ同様なので、この時期路郎はまだ「葉柳」に入っていないか、と考えるのが正しいのではないかと思います。

年譜明治39年に「夏、平野町五二館楼上の川柳大会で浅井五葉と隣り合わせる。」と書かれています。これは誤りではないでしょうか。半文銭の文に、「その合併記念会は、御霊の東側、五二館楼上であった。」その後、「六厘坊に随ふた人々の手にやがて「葉柳」が郵送された。」とあり、会が改題「葉柳」発刊(6月1日)以前の5月か4月末頃開かれたと思われること、「合併記念会」と書かれていますので、句会ではなく、料理旅館カレストランでの懇談会だったのではないかと思われるからです。日車の文に、「葉柳」改題後最初の西柳樽寺句会も、以前同様新町南通3丁目の光禪寺で開かれた。」と書かれており、この句会に五葉は出ていますが、路郎の記事はありません。5月5日に第4回川柳研究会兼大会、8月2日に西柳樽寺建立一周年大会が開かれています。ただ大会の場所が光禪寺だったかどうかは明確ではなく、路郎が

「川柳雑誌」(昭8・6)の「句集の事其他」に書いている、三十九年頃、「おい看板を書いて呉れ」と云はれた。平野町の句会もどんな会だったのか、傘下の会がいくつかあったので、はっきりしません。半文銭の先の文に、「その後(葉柳)がでて、かなり経ってから、旧日報系のものが主催で(西柳樽寺別山といふ)川柳会を開くようになった。これには六厘坊が単独で出席していた。会場は篠村力好君の堀江の旅館(注、路郎が住んでいたという西横堀の篠橋に近かったように思われる)。」その第一回の席上で浅井五葉氏(当時了軒と号す)麻生路郎氏(当時天涯と号す)などにお眼にかかることを得た。路郎氏の金釘の学生姿も、はつきり浮き出して残っている。(要約)とあり、「浪花樽」に出句していた半文銭が、この時はじめて路郎に会ったことがわかります。浅井五葉は読売系で大阪日報の「浪花樽」に出句していません。路郎も家が近く、同じ読売系だった五葉にさそわれて、初めて出席したのではないかと思えます。これは推測ですが、東野大八氏が、西柳樽寺別山川柳会第一回句会と合併記念会を勘違いされたのではと思

平成二十二年十二月七日

中川 一 拜

つたりします。路郎が六厘坊に初めて会ったのは、この別山川柳会第一回句会ではなかったでしょうか。天涯（路郎）は、「葉柳」の中頃維持会員になっていますが、全号を通じて作品は年譜に書かれてはいる号にだけ一回出しているに過ぎません。

それから、年譜明治39年のところに、路郎の「句集の事其他」の中の、「私は勉強時代彼（六厘坊）は既に世に出てゐる、この違ひから同年乍ら私は彼に教へられたのであります。〃も入れておいていただけたらよかつたの」と思っております。三十数歳の西田當百が六厘坊に教えられたように、路郎も教えられたのですから。

あるいは間違っているかも知れませんが、私の知っていることを書かせていただきました。ガタガタと余分と思われることを書きましたが、それが「麻生路郎読本」の素晴らしさを減ずるものではありません。多くの柳人にこの本が読まれることを望み、そうなるようお祈りしております。最後に、重ねて兼原道夫氏の非の打ちどころのない編集と、委員の方々のご協力のあり方に感銘しましたことを書かせていただき、厚くご惠贈のお礼を申し上げます。

川柳塔社 編集部御中

(注) 六厘坊については、川柳学会のご依頼で、「天才児小島六厘坊」(上)(中)(下)を執筆、学会編集、新葉館出版発行の学会誌「川柳学」No11(平成20・12) No12(平成21・10)に(下)中掲載、(下)が載る予定のNo13は未刊状態。No11, 12(各1500円)の在庫については、新葉館出版へお問い合わせ下さい。

中川 一さん略歴

1932年生まれ。

1968年ふあうすと川柳社同人。

以後、副主幹、編集部長(阪神大震災時)を経て、現在理事。

2011ふあうすと川柳大会

平成22年 年間賞発表

日時 平成23年4月3日(日)

午前11時 開場

場所 兵庫県民会館 9階ホール

TEL 078-3211213

神戸市中央区下山手通4-16-3

宿題

「りんご」 増田 マスエ 選

「便り」 藤原 正明 選

「歩く」 谷口 幹男 選

「ソフト」 小島 蘭幸 選

「友」 中田 たつお 選

「惑う」 平山 繁夫 選

「自由吟」 赤井 花城 謝選

欠席投句 拝辞

出句締切 12時(各題2句)

会費 2,000円(記念品・発表誌含む)

(昼食は各自でお済ませ下さい。)

地下に食堂あり)

懇親会 5,000円(当日 受付)

主催 場所は同会館10階

ふあうすと川柳社

冬二さんの句帳

内海 幸生

西尾葉先生の通信講座のご指導を受けていた初心の頃、高杉鬼遊さんに連れられて薫風先生の句会へお伺いした事がある。鬼遊さんが「此処の句会はなあ、川柳塔は勿論、他の柳社の錚々たる方々ばかりやから、分かん事があつたら遠慮せんと何でも聞きや」とおっしゃった。

西も東も分からぬ儘に、隣に定金冬二さんが居られたので「先生は何処の句会でも数多く、それも上位で抜けておられますが、何か秘訣がありませんのでつか。今考えても顔が赤くなる様な不躰な質問に嫌な顔もされず、じつと顔を見ておられたが、やおら「きみなあ一題に何句作ってる?」「10句からせいぜい20句ぐらいですけど」「そらアカンわ、僕はなあ一題に100句作るねや」「100句?」「その顔は疑ってるな?ほんなら見せたら」

ポンと出された句帳を見て驚いた。目で追

うと優に100句を超えていた。「へえー」嘩然として顔へ「これを自選して天地人を決め投句するねんや、よう抜けて当たり前やろ」「ハイ」と答えるのが精一杯であった。

人によっては多作は句が乱れるから、良く練つて練り上げた句を生むべきだ、寡作でも良いと言ふ意見もあるが、浅学の私には判断する能力は無い。

然しながら冬二さんの句帳から強烈なカルチャーショックを受け、真似してみようと何回も挑戦してみたが、未だに半歩も前に進めない。自嘲しきりである。

だが待てよ、偉大な柳人・定金冬二さんを真似しようと思うから無理があるのだ、一歩ずつピラミッドの頂点目指して、蝸牛の歩を進めれば良いのだ。

そう考えて少し気が楽になったところでドキツとした。もつと早く気付くべきだったなあ。無い物ねだりで時間がほしいよ。

川柳塔一千号記念大会の時、木津川計先生の「人生としての川柳」が欲しくて朱夏さんにお聞きしたら、用意した分は売り切れて無いとのお事だった。ガツカリした顔を見かねたのか、朱夏さんがご自分の分(木津川先生のサイン入り)を譲つて下さった。駄目かと諦めかけていたので嬉しくて、歎びの余りお金

をお払いするのを忘れて帰つてしまった。(ご免なさい。)

人間陶冶の詩、路郎先生の遺訓・木津川先生の川柳観も良く理解でき、他柳社の先達たちのお考えも良く分り2回も3回も練り返して、熟読した。身近過ぎて見え足り無かつた薫風先生の偉大さも、拡大鏡を覗くように理解できたのである。

木津川先生の川柳に対する情熱が行間に溢れ博識に大いに感銘を受けた。もつと早く拝読したかつた思いと、これからの作句に大きな指針を頂き、胸がいつばいである。

川柳作家の高齢化が問題となり、若年層の参入が叫ばれて久しい。一朝一夕に解決できる問題でなく、文殊の知恵の欲しいところだが、手を拱いていられない。70歳には70歳の80歳には80歳でないと詠めない句があるはず。それを探す旅に出かけよう、真面目に。

同人名簿発行のお知らせ

七月一日に川柳塔社同人名簿を改訂発行します。

変更のある方は、五月末日までに本社事務所へご連絡下さい。尚個人情報につきご本人からのお申出に限りです。

同人誌友部

本社 一月句会

一月七日(火) 午後一時
アウイーナ大 阪

一月の句会は、お屠蘇気分も醒めやらぬ七日、投句者4名を含む12名の参加で開催された。初参加は台湾の涂世俊さん始め4名。

句会に先立ち「初歩教室年間賞」の三氏、次いで昨年の月間賞杯水久保持者の両川無限氏が表彰された。

今月のお話は小島蘭幸主幹。「川柳初心のころ」と題して、主幹の高校時代の体験を中心に、遠い記憶を辿りながら紹介された。

素晴らしい呼名に感動したこと、初人選して仲間5人と喜び合ったこと、初めての選者で没にした句を48年経った今でもはっきり覚えていてること、時の総理池田勇人からの祝電のこと等々。何よりも驚かされたのは、当時の句会参加者の平均年齢が40歳代ということ、川柳人の高齢化が進む昨今との差を痛感させられた。

月間賞は西口いわえさん(西宮市)に輝く。
(司会)昭・美籠(協取り)真理子・恵子(受付)理恵・日の出(清紀)勝弘

席題 「待つ」

奥田みつ子選

やわらかい春待ちちびる土の中
福袋徹夜で待つてゴミの山
孫が来る玄関出たり入ったり
未帰還兵の父を今でも待つて
ただ今の声待つてのは亡夫だけ
柳誌待つてポスト恋人待つて如く
めしまだか犬でも待つて分るのに
待ちながら川柳作句しています
待つてことに馴れて夫婦に五十年
待つて間に一つ歳を取り
待つて事だけが私に出来る恩返し
診察を待つて間に三句詠めました
水仙の香りと客を待つて座敷
良い知らせ大口あけて待つてポスト
お年玉待つて子がふたり幸せね
真つ新な心で古希の初春を待つて
凱旋を待つてカンペイのラストラン
トイレの中で神様を待つて居る
定年後妻の帰りを待つて居る
内定を頂き春を待つてころ
しがらみは切つたが電話待つて居る
今年また帰り待つてるつばめの巣
ゴタゴタの間国民待たせる気
くしゃやくしゃの顔で春待つてふきのとう
満腹のポストそれでも賀状待つて

賢子 公誠 弘光 保州 楓楽 キヨミ 蕉子 千枝子 美籠 美義 美智代 太郎 富子 朋月 朋月 ばっは いさお 直樹 昭 恵子 時雄 千代 りこ 求芽 黒兔 紀乃

鬼が良い時々は待つて一人ぼち
遮断機の向こうで春が待つて居る
バーゲンのおニューの服が春を待つて
待つてことも仕事だつたと亡母の頃
梅の花雪のたよりで待ちぼうけ
のんびりと待つてことにする温い風
七種の若菜叩いて春を待つて
待つて待つて待つて幸せになつた
真つ先に景気回復待つてなし
雪帽子の野はとけさまへ春よ来い
待つて居るだけでは何も起こらない
無我無心待つてくれない日を生きる
幸せは待つていないよつかむんだ
ゆつくりと待つてからうんと言つてはし
賀状の束大事な一人まだ来ない
兼題 「冗談」 柿花 和夫選
冗談のつもりでしようが胸を刺す
単なるジョーク聞き流す日と流せぬ日
冗談が土足で入りすつと抜け
冗談で口説いた君ももう米寿
冗談の語尾に包んだ含み針
遠野 無限 俣子 宏子 かずみ 能子 宣子 蘭幸 紀雄 ばっは 靖鬼 公誠 一風 月子

冗談の通じるひとと旨い酒

いわゑ

〆冗談でしょうとこぼれている笑顔

哲男

ジョークだとやつとわかつたマニフェスト

直樹

冗談やで前置きをするコップ酒

滋彦

お前だけやこんな冗談真に受けて

ばつは

冗談で好きと言つたらジ・エンド

茂

三万田位で子供産めと言う

正和

冗談に託して愛の小手調べ

黒兎

負け癖がついて冗談までやゑぬ

公誠

説明のいるジョークには肩が凝る

りこ

冗談のわかる人だけ領いた

扶美代

冗談の真意が読めた仕舞風呂

〆千代

沈黙の壁へジョークを二つ三つ

啓子

冗談にしても瘦せてる蟹の足

義

品の良い軽いジョークをデザートに

俣子

引きつった顔で冗談オベの朝

隆彦

冗談が通じぬ妻のひと波乱

満作

冗談が分かる娘の歯が白い

〆千代

冗談のひとつを解毒剤にする

無限

冗談じゃないよと死に神を払う

森子

生きていることが冗談かも知れぬ

いわゑ

本人が笑つてるからジョークだろ

りこ

冗談で誓つた愛が発火する

富子

冗談に怒り出す酒笑う酒

郁夫

冗談を今日は許せぬ肚の虫

好

うっかりの冗談ツケが大きいぞ

ばつは

ジョークだと打ち消したから本気だな

葉子

佳題

副作用のない冗談に腹かかえ

たもつ

まつ新のジョークを一つとつてある

扶美代

冗談でビエロやつてるわけじゃない

富美子

すり切れた冗談ひとつポケットに

朱夏

終章を粹なジョークで締めくくる

いさお

人

冗談のジャブで本音を打診する

集一

地

冗談のように楯の中に居る

夕胡

天

冗談は解凍をして召し上げられ

昭

軸

もう誰も笑わぬジョーク捨て切れず

兼題 「マドンナ」 徳山みつこ選

マドンナと呼ばれ表と裏の顔

准一

国会のマドンナ気取るチルドレン

朋月

マドンナがウインクすれば座が軋む

滋彦

マドンナも胃ぐすり持つてご出勤

日の出

マドンナの隣でいつも引き立てる

ふりこ

マドンナに囲まれタジタジしてる僕

いくひろ

マドンナは臉にずつとそのまんま

修

政界のマドンナ期待ほどになし

〆千代

マドンナの頬つべにチュッとおまごと

直樹

自爆テロ叱つておくれマリア様

一步

マドンナに逢いたい時は目をつむる

好

マドンナってトイレの神様だった

美代子

二輛目が混むマドンナが乗る時間

美籠

年取らぬばくのマドンナ額の中

りこ

朝市のマドンナ膏薬貼つてはる

天和子

マドンナはどなたにも距離とつてはる

天笑

マドンナの夢壊れたり河内弁

扶美代

マドンナが二人視線を合わさない

無限

マドンナの元祖はきつとアマテラス

楓楽

スカレット我が青春のマドンナよ

紀子

マドンナのネールアートを褒めてやる

奮水

マドンナは生年月日など無縁

富美子

マドンナに見えたと笑う逆光線

一風

絡み合う蝶とわたしとマドンナと

森子

アルバムの母丸ぼちゃで村小町

哲男

マドンナの金魚のフンも切ないね

恵子

マドンナが今三人もいるのです

勝弘

父さんはマドンナが好き母が好き

富美子

マドンナも老いたか妙に愛想いい

修

マドンナのように赤子を抱いてみる

〆千代

マドンナへ罪ほろぼしに背を流す

弘光

男の骨抜いてマドンナひとりきり

富子

佳

マドンナにちよっかいかける招き猫

滋彦

おい寅オレも哀しい恋ばかり

真理子

マドンナの椅子は案外楽でない

すみ子

マドンナも口をポカンと齒科の椅子

みつ子

マドンナにされてはとほと困つてる

千枝子

人
マドンナは今も心の森に住む

集一

地
春風と共にマドンナ咲いてくる

蕉子

天

こわれそうなマドンナ僕が守ります

ばっは

軸

一月のホームマドンナたち和服

兼題 「嘘」

水野 黒兎選

騙された振りして嘘を仕分けする

准一

嘘重ね自分自身を見失う

庸佑

オメデトウなどと今年の嘘始め

完司

嘘つく口内炎がすぐ出来る

瑠美子

大嘘をつけないボクはまだ小者

直樹

素敵なら許してあげる恋の嘘

公誠

嘘と実を使いこなせばもう大人

好義

美しい嘘は裁けぬ魔さま

俣子

ぎゅっと結んだ男の口に嘘がある

寿之

また会おう嘘でなかつたはずなのに

耕治

角取つた丸いはなしに混ざる嘘

公誠

隠し味のように小さな嘘を交ぜ

保州

プロポーズ嘘でも一度して欲しい

たつお

生きるのは八百以上嘘をつく

勝弘

不器用の嘘に尻尾がついている

たもつ

嘘一つドミノ倒しになつてゆく

富美子

嘘一つつけないのかと叱られる

たもつ

嘘だらうでも抜け出せぬ噂の輪

東吉

曲がり角あたりに嘘が積んである

よしみ

嘘にしても筋道のあるしたたかさ

修

全身で言うているから嘘じゃない

郁夫

嘘うそと言うて目を見るやはり嘘

みつ子

大きくなった嘘を丸めているのです

蘭幸

自分に嘘ついて渡つた橋もある

楓楽

深深とお辞儀しながら嘘を言う

堅坊

他人かばう親の嫉に嘘がない

弥生

他愛ない嘘にピンチを救われる

みつ子

騙されてあげるかわいい嘘だから

能子

嘘が出る程に元気をとり戻す

月子

今日はまた誰にも嘘を言つてない

由一

嘘見抜くメガネを母は持つていた

滋彦

佳

コーヒーとパンとわたしの甘い嘘

森子

傷口にやさしい嘘をぬつたげる

朝子

美しい嘘が女を太らせる

千代

呆けたなあ昨日と同じ嘘いうて

理恵

美しい嘘を柩の中で聞く

無限

人

体重を掛けて女は嘘をつく

義

地

嘘半分その半分が恐い武器

光久

天

嘘のない子の眼に日本美しい

弥生

軸

身を切れば場をなごませる嘘もある

兼題 「騒ぐ」

三宅 保州選

思惑があつて騒ぎに火を付ける

准一

騒の字が跳ねる気配のする卯年

直樹

騒ぐだけ騒ぎ示談というケロリ

蕉子

三億円出た町内のくじ売場

遠野

早朝から並ぶ福袋のはしご

美代子

ゲルニカをそんなに騒ぐことはない

瑠美子

騒がしい猫の駅長眠られず

かすみ

あの方が騒ぐと上下する株価

弘一

騒がしいマスコミ白を黒にする

能子

洗面器の中で騒いでいる議員

朱夏

年明けると梅だ桜だ騒がしい

宏子

騒がれるうちが花よとサクラ言う

千里

第三のビールを飲んで空騒ぎ

富美子

ソプラノで騒ぐピンクの渦二十歳

理恵

ふいに騒ぎたくなる通夜の外野席

夕胡

したたかに呑んで騒いで以下余白

柳弘

居酒屋で騒げるほどという会費

たつお

心ざわざわする日は酒を呑んで寝る

希久子

酔つぱらしい喧嘩でしたと暮を引き

耕治

すれ違うだけでも血の騒ぐお方

天笑

いたわりを避けて騒ぎの渦にいる

葉子

賑やかにしてなきや私でないでしょう

真理子

御神輿を担ぐのがすき人が好き

富美子

ガミガミと言ってる人が味方です
折れそうな心へことさらに騒ぐ
蟹が出てやつと静かになりました
騒がしいねずみが消えたちと不気味
騒いでも助けてくれぬ夢の中
よく騒ぐ雑木林よ雑草よ
喧騒が磨いてくれたわが鱗
血の騒ぐ話に遠く日向ほこ
お隣も新地になつて風騒ぐ

住
牛乳の空瓶並び騒がしい
加減乗除生きてこの世の大騒ぎ
騒音の海を泳いできた鼓膜
パークッション今衝撃のわが脳波
お腹減るように目一杯騒ぐ

人
騒がしい家だらやましい家だ
耐え抜いて桜の下で騒がんか
天
旅人のマントで風が騒がしい

軸
喧騒のるつぼと化している地球

兼題 「突然」 西出 楓葉選

突然にしては段取り行き届く
家買つて突如転勤命じられ
突然の指名に答出て来ない

賢子 日の出
一歩 義
舞夢
森子
森子
朝子
月子
公誠
和子
朱夏
ばつは
天笑
恵子
完司
和子

突如妻探さないと置き紙
初詣でポツクリ寺がよく流行る
死角から突然飛んできたボール
真夜中の電話にベッドから落ちる
ひらめいて突然消えてゆくヒント
順番のない順番は不意に来る
怒つたら突然河内弁になる
突然に行つたら嫁に嫌われる
皴白髪突然増えたわけじゃない
突然の客に素顔がうろたえる
支持率も突然下がるもんじゃな
裏口に熊がぬくつと顔を出す
突然死同情したり僻んだり
腰痛も恋も突然やつてくる
突然と見えるがこれは必然だ
突然もあろう遺影を決めておく
目が合つて突然降りた白羽の矢
突然のお客に財布泡を食う
どうしたの突然酒を止めるやて
願わくば夫婦揃つてポツクリ死
気がついたときは集中治療室
転んだら星が突然さらめいた
幸せが降つて湧きそな春の天
突然の代役こなす芸の幅
突然に我が子現われ大騒ぎ
突然の祝儀袋を書いている
突然に来たわけではない締切り日
突然の雪に枯木が弾み出す

好
いさお
希久子
森子
哲子
好
玄也
集一
明子
能子
修
公誠
和夫
富姜子
昌紀
耕治
キヨミ
忠昭
弘風
則彦
保州
哲子
賢子
倅子
舞夢
耕治
みつこ
美花

突然の別れに語尾が裏返る
佳
朱夏
柳弘
義
玄也
富姜子
時雄
真理子
宏子
西口いわゑ

突然の告白愛がうろたえる
突然に紳士淑女になれません
近づくと突然笑い声が止み
突然という神様の慈悲がある
幸せは突然降つて来はしない

人
絶壁を歩いていと知るある日
地
突然に発火もします十五歳
天
突然が大きな渦を連れてくる
軸
突然の出来事にある神の意図

平成22年度本社句会の月間賞永久保持者は
両川無限さん(神戸市)に決定しました。

寒中お見舞い申し上げます

山岡 富美子

〒586
-0002 河内長野市市町六四二
電話〇七二一五六一三三八

おぼせぬ城

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

岸和田川柳会大阪(前月分) 仲谷 弘子 報

行楽の供には妻が無難です
 コンビニの弁当さげて紅葉狩り
 円高後行楽範囲地球圏
 ヒヤッキンに寄って行楽客帰る
 尖閣で出来た隙間が埋らない
 すきま風止めて下さい論吉様
 すきま風入る余地ない夫婦仲
 ボケ防止手こわい方に刺激され
 婿達が陰で手こわい遺産分け
 とまかかも君が悪いという相手
 板さんの手こわい相手なじみ客
 ダイエット手こわいケキ唾を飲む
 小心者手こわい相手さける癖
 倒産の後で粉飾あばかれる
 ガチガチの本命倒れ穴あける
 ライバルが倒れ調子が狂い出す
 母たおれやっつと分った大切さ
 毎日を企画だおれで生きている
 神の木を倒し跨がる御柱祭
 五十年経てばトリオもソロになり

見清 淳風 笑司 ダン吉 俊昭 珠弘 樋代 隆昭 つかさ 和美 弘子 玄也 忠太 香枝 房枝 蛙城 仁緑 幸子

嫁舅そこへ姑三つ巴
 おぼちゃんのトリオに怖いものがない
 三人の窓際族が縄暖簾
 トリオからコンビニになって秋の風
 三婆は愉快暮らしの人気者
 三原色配せば料理生きてくる

竹原川柳会広島

古田 太虚報

今度こそ逃がさず掴むこのチャンス
 きっかけを掴んで空気一新す
 いつまでも欲を掴んでいる拳
 政権を掴んだ党のだから無さ
 あなたの心掴む両手を洗つとく
 主婦五十年茹で蛸のコツ掴めない
 雲掴む雲の流れにさからわず
 方言で堂々掴む愛もある
 まっ白に洗い直して冬支度
 岸を洗う波をみつめて決意する
 顔洗う涙が枯れるまで洗う
 里芋を小石と洗う父の知恵
 洗われて見ればイケメン鬼瓦
 気がつけば無心絵筆に洗われる
 高野山の雨で洗って来たいのち
 あれは幻私は蝶になっていた
 幻覚よ神の悪戯だったかも
 錦秋の幻の瀑神を見た
 幻を追って少年ノーベル賞
 家柄と言う幻が邪魔をする
 極楽の幻ばかり見る輪
 四角四面を生きて同じ風の中

洋清 義泰 力子 東吉 半徳 汎美 房子 節夫 静風 弘子 比呂子 慶子 栄恵 規代 千代美 敬子 白狐 蘭幸 笑子 一路 淑子 幸子 輝恵 節生 厚子

新米の炊きたて湯気ある至福
 童心に戻りシャボン玉追いかける
 あと少し予定日までがドキドキで

川柳塔吹吹鳥取

野口 節子 報

来年の春を育む土の中
 来年こそ三日坊主にならぬよう
 へえ七十我に返った御婆さん
 来年はハワイ旅行の旅プラン
 母の愛痛みを治す万能薬
 百寿まで治す気はない恋病
 万病を治す神の手待つ孤島
 刃こぼれの治らぬ太刀が胸にある
 雨蛙のんで治した胃潰瘍
 気短を治すと長生きができる
 仏壇に黄泉へ導く道がある
 子導く母のしぐさがすべてなり
 明日があるそんな言葉に導かれ
 人々に導かれては今に生き
 子や孫の導く俣に生きて行く
 尖閣が寝た子起こした導火線
 お寺から仏になれる話聞く
 塾通いよりも大きな父の背
 海へ海へ水を導く川がある
 炭で焼くさんまペロりと舌鼓
 竹炭の浄化効果はすばらしい
 背丸め炭の火鉢で暖をとる
 炭焼きの串で一杯明日の糧
 暖をとる火鉢の炭火亡母偲ぶ
 竹炭は美肌効果とすすめられ

栄香 千枝 史子 三津子 芙美子 道子 善江 たけ代 禎元 美代子 いさお 重忠 玲子 みち子 紀美恵 美知江 和子 勝憲 義人 節子 龍枝 富恵 泰輔 清 久芽代 貴恵

灰になるまではと炭火燃えさがる
眉は炭口はトマトのあたたかさ
竹炭の需要が増えて欲しい山
炭だつて灰になるまで生きてる
身を焦がしつくす炭火のあたたかさ
練炭は人温めたり殺めたり
消し炭になって不満を言っている

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

全員を連れて行きたい甲子園
ゴルフ知らないが遠君知っている
ピンボンのボンのあたりで息が合う
口と胃の運動だけは怠らぬ
スポーツと思い家中大掃除
幸せの明日紡いでいるスクワット
スカウトの目を気にしない草野球
ハードルを越えねばならぬ意地がある
プロレスよあれがスポーツかと思う
ボクだつてメダルが欲しい逆上がり
スポーツ党出来て不思議でない政治
運動会孫の演技が見当らぬ
草臥れた背広と果すと定年日
果すまで背せつせと小石積む土台
果せない夢は来世で結ばせる
約束は果すと男軽過ぎる
柔軟剤の役目も果たすひざの猫
使い果たして禿びた鉛筆捨て切れず
暮れからいい酒あると果し状
努め果しやつと風船糸を切る
約束を果す気のないまた今度

玲坊 芳香 照彦 泰山 紀の治 芳光 碧報 武 千鶴子 朱夏 理恵 かずみ 富子 絹子 みね 登美代 紀子 桂香 八重子 准一 次根 菜摘 章子 昇 起世子 夢子

芳香を残して果てた風蘭よ
冤罪の構図に体震え出す
怒つたら相手の思ふ壺になる
腹の虫写経の筆に撫でられる
毛糸玉嘘も怒りも混ぜて編む
鉛パンを食べると萎える憤り
折り鶴へゆうべの怒りふくらます
コスモスが揺れて奇立ち癒される
拳骨の怒りは父の思いやり
内心の弱さを隠す怒り肩
生き仏さまです派手に生きてます
画竜点睛貰つ赤な絵の具絞り出す
ミシユランへ派手に騒いだ星の数
淋しいと派手な指輪が欲しくなる

松露川柳会鳥取

小西 雄々報

寒風に干し大根も縄のれん
ホテルより安い旅館でのんびりと
大根も漬けてゆつくり冬仕度
ダイナーショー少しリッチに感じとる
大根の白さはいつも変らない
普段着で行けぬホテルのわだかまり
朝と星のホテルに泊り気をつかう
三つ星のホテルに泊り気をつかう
金うごく政治を知っていたホテル
川柳ふうもん吟社鳥取 夏目 一幹報

房代 東吉 保子 純子 当子 町子 孝子 イセ 義雄 元三 和子 幹子 智三 公美枝 鈴枝 久子 弘子 智恵子 和代 静光 正光 雄々 洋々 一瑠 妻 子

佳句地十選 (1月号から)

井上 じろう

老いてこそときめき探し春つらら
淋しいと素直におもう雨の午後
こりもせず高嶺を目指す亀の足
母さんは怒ると先に泪する
ひっそりと生きて時どき笛を吹く
頑張って生きた証の現在地
嬉しさを隠しきれずにいる巨尻
正直に言われしんみり顔洗う
叶ってもまだまだ尽きぬ欲の種
すぐ歳を聞くからあんだ嫌いだす

太陽がキーマンだろうこの地球
五割引き元の値段が気にかかる
妻からは既に格下げされている
凡人には凡人の夢つかあさる
キーマンの失言支持をさらに下げ
一目散ゴリ押しもした若かつた
小細工は止そう心が寒くなる
拳骨というキーマンがいた昭和
ゴリ押しの赤じゅうたんにしが付き
老母の介護してつかあさる嫁が来た
半世紀過ぎた自慢をじつと聞く
格下げの力士不思議に勝ち進む
政界のキーマン早く現われて
正直に本音語ると首になる
キーマンも妻には頭あがらない

昌鼓 振作 清信 菊香 圭一郎 節子 一京 無限 金祥 智名 春男 孝名 凱柳 悦子

格下げに朝の太陽遠くなり
 格下げにされても飯が食えりやいい
 足のない松葉蟹なら買えるかも
 キーマンをおだて三三七拍子
 熊もいうわたしの餌をつかあさい
 金もない暇もないのがわびしいな
 グリ押しだ人の意見が聞くがよい
 ストレスが時にグリ押ししろと言う
 グリ押しのできるあの女頼もしい
 グリ押し拒否私の道は決めてある
 リストラで格下げ家計火の車
 格下げに心配はない自営業
 格下げの米が変身パンに化け
 ほっかぶり格下げ顔は見せられぬ
 グリ押しで通した頃は懐かしむ
 首の皮一枚残し左遷され
 グリ押しの人生かえりみて詫げる

葛子 雅女 大鯨 蟹太郎 雄太郎 敬
 せつ子 孝二 善夫 房江 由美子 秋月 はつ江 益子 茂登子 啓治 一粹

ブライドが高くてメロン売れ残り
 おみやげのメロン気になる子供達
 愚痴などは知らぬメロンの澄まし顔
 メロンもう食べ飽きましたおほほほは
 川柳くだの会鳥取 岸本 宏章報

日に三度サイレン鳴らす腹時計
 難病が恐縮ですとやってきた
 お互いが譲った席に割り込まれ
 童謡にかわる十二時のサイレン
 平坦な道ばかりでも飽きがる
 救急車乗っていたのは母だった
 畑打ち思いを込めてならしめる
 昨日会いまさか計報を耳に聞く
 隠居して平らになった親父さん
 救急車まさか私が乗ろうとは
 先走りしたら囧にされている

希久子 いわゑ みつ子 楓 楽
 (尚)孝子 (山)紀子 (常)清 (山)玲子 せつ子 宏章 仁子 邦昭 寿賀子 富貴子 大鯨

お歳暮に嫁いだ娘欲しい父
 年の暮れに笑顔比べるつるとかめ
 よくもマアたまつたものとすす払う
 そして今タイムカプセル掘り起こす
 九ちゃんの笑顔カレーの味がない
 インフルも歳暮も我が家にはこない
 青春をひきずってまだニキビ跡
 手術と言う病気いまだやってない
 穏やかな顔していよう年の暮れ
 神の手に命あずけて脳腫瘍
 はやぶさの帰還にどきどきする地球
 年の暮れいのちの米を研ぐおとこ
 神の手と信じて任す手術台
 待合室長びく手術案じられ
 外堀は埋めた着小音を待つ
 老いてなおネプタの太鼓に血が騒ぐ
 喪中ハガキ歳暮に代わりやつてくる
 くる来ないどきどきしてる花時計
 お歳暮にされると知らず鮭週上
 少年の音符吹き出て来るニキビ

初枝 吞舟 柳子 洋子 和香子 ひとし 芳生 準人 則彦 一吞 花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 一花 荔

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

甘やかされ人もかぼちゃも煮くずれる
 メロンパンにソース掛けてはいけません
 責任転嫁してから僕の影がない
 価値観の違う夫婦の歩が揃う
 蚊帳にまだ捨てきれなくて出番なし
 メロン飴みんなの気持和らげる
 明日の客待つまでメロンはうれすぎる
 ゴミ捨ての日まで食べているメロン
 饒舌にメロンジュースの気が抜ける
 不器用で愛想笑いはせぬメロン
 お見舞へメロン一個が重くなり

川柳塔唐津佐賀 仁部 四郎報

言い訳はやめよう男が軽くなる
 芳香を口いっっぱいに菊贈
 買ひ物のリストに豆腐恙なし
 語り部の話生長する月日
 玉碎と兵士の命称えても
 骨董に激戦の地の砂眼も
 冬の贅狭い我が家に風呂がある
 川柳塔みちのく青森 小寺 花菱報

執刀医安堵玉汗拭く微笑
 遺言書いて心おきなくする手術

輝夫 高明 四郎 蜂朗 晴實 晴翠 勝視

催眠商法ただを囮に買わされる
 円高の囮馴染みの発泡酒
 囮とは知らず擦り寄りかかる針
 格安の野菜が囮朝の市
 おとりになろう子等を泳がす海だから
 採用へ囮となった保証印
 瓜二つ父を案山子にして囮
 寝たきりも骨も囮になる地獄

高知川柳社 小川てるみ報
 てるみ 哲史 健 千鳥 正躬 三郎 美々

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

幸せは無理を言う子がいてくれる
七難も八苦も友に支えられ
消えかけた鉛筆書きが語る日々
鉛筆はわたしの一生知りつくす
いつからかやさしい顔になった歳
おしゃれして出掛けた今日は年金日
無理言つてすみませんが無理を言い
裏表あるがあつさり乗つてみる
あつさりと怒をはき出し空童筒

大阪富柳会

古田 千華報

赤トンボの記憶に路地の賑やかさ
十歳の記憶毎日々空きつ腹
温かい母の記憶が浮く葛湯
柔らかい頭だ明日を読んでる
柔らかな話し言葉をつかかむ
纏いつく指の隙間にある嫉妬
はずされた指輪に熱い思い抱き
筆談の指が嬉しく踊る文字
初恋の思い心の襲に踊る
これからが本領八起木守柿
私を忘れた母に編む帽子
うすれゆく記憶の底の守り唄
盃に情けを注いだ白い指
目隠しのゆび柔らかくやわらかく
笑い茸鍋に入れたか隣の家
顔なんか忘れてもよい生きてはし
あいまいな記憶を笑う電子辞書

はるみ 好栄 惠美子 英子 仲子 ちよえ かつ子 博利 清泉 晴美 七朗 佳子 田鶴子 和子 高鷲 安希子 紅紫朗 壽峰 秦子 鐘造 アキ 彦次 伸雄 よしみ

合掌の笑みを閃かに伎芸天
熱燗を飲めば昔を語る父
透明にした記憶が数多有る
堂々と影が私を越えてゆく
弥陀の掌の皺が隠していた本音
ふるさとで聞く柔らかな風の音
波柿の戯画一枚と深む秋
省略をされてるらしい氷点下
褒められてうれしさ一斗樽に詰め
川柳塔きやらばく鳥取 大塚 惠子報

欣之 武人 華 惠 未知 鬼焼 信子 森子 千華 惠子 瑞枝 惠子 麗 章江 千代 寿々子 亞弥 爾 未延子 春枝 てい子 やえ 初枝 ふみ

寡黙だが筆は私によく懐く
根性の曲った菊をなだめて
秋深く読みたい本の多きこと
道端のうわさ話を聞くすずき
鳥たちも情報掴むのが大事
夫と共に北壁の紅葉掴みとる
突然に襲う病にたち向う
スリッパが逃げる卒寿になった足
役に立たない鍵をチャラチャラ持っている
本当の幸せ追って旅つづく
人間に生まれて風に叩かれる
美しい夕焼ながめ廻る打つ
思考力衰えぬ内フル回転
もろもろの支度があるが目を瞑る
川柳ささやま兵庫 遠山 可住報

久子 美緒子 二英 可住報

近くまで来たとやさしい嘘で寄り
自我賛否短冊焼かす自尊心
私にはやさしくするなまぢがえる

久子 美緒子 二英

日焼けした顔が白球追いかける
もつれ糸母は優しく解きほぐす
やさしかったあれこれ忍ぶ通夜の席
里山も十二ひとえに衣更え
山を越え谷を越えて今日がある
片隅で生きて年金貰ってます
おし鳥の絆年金あればこそ
蕎麦がらの枕やさしい夢を見る
海外で歳を忘れて小麦肌
山門のここから善男善女なり
勧められかけてた事に今感謝
ご飯ですよやさしい声が島へ来る
病人にやさしさ添えて介護する
カラフルな秋の野山は美術館

純子 文子 美紗子 哲男 稠民 真由 啓子 多美子 開子 可住 かほる 幸子 照代 美智子 佐津乃 千恵子 ひさ乃 千歩 ルイ子 妻子 求芽 東吉 とし子 あさ子 正 懸笹 勝弘

城北川柳会大阪

伊達 郁夫報

夏物にご苦労さんと衣替え
一日を同じバターンで生きてます
聞き上手うっかり乗って口を割る
割り切れぬ昭和中和と歳暮
裏切りのバターン又かとお人好し
墨色かゆるむ大工の裏話
すき間から咲く萩石を割る萩
牛井の安値うれしいデフレの世
マンネリのバターンでおせち又残り
ワンバターンタイプ変らず恋してる
腹を割りわかり合えるに酒がいい
財界に献金ぬだるのは同じ
温暖化季節のバターン狂いだす
裏話はいいつもカヤの外

勝弘

陽の射さぬ裏道ばかり混んでいる
 吟行の空一べんの雲もなく
 後腐れない割勘のお付き合い
 着たきりのモンベ姿で子を育て
 裏生地に贅を尽くした京の粋
 気に入らぬ話ゆっくりに裏返す
 裏口で入れた息子が出て来ない
 本当の痛さ知ってる足の裏
 損得で割り切れぬのが人の情
 裏方の汗が舞台に咲かず華
 錦秋の戯れ撰津峡食べる
 ワンパターンの岸壁の母歌います
 秋ひと日命を洗う撰津峡
 札束の裏に野心が渦を巻く
 一寸だけためにパターン写し取る
 割り切れぬ拳が今日も宙に浮く
 裏切った人は責めない訳がある
 おもわくが外れB面ヒットする

川柳塔おっぱい吟社香川 川崎ひかり報

見栄張った財布が思案する羽目に
 幾つもの試練を刻み深いシワ
 健康が全てに勝る財産だ
 目標があった財布の口を締め
 財布から吐息が洩れる不況風
 忘れてた蓄財本の間から
 平和主義財産等は残さない

川柳塔なら 坊農 柳弘報

戯れの歌舞伎に自分重ねてる

郁夫 美智子 満作 麗 倫子 野鶴 じゅんこ 典子 賢子 朝子 柳弘 修 志華子 集一 弘風 昭 一歩 たもつ 賢 はつ恵 あきら いさむ 八重子 弘 ひかり 彰 治

戯れに飲めぬお酒をなめている
 前面に善意を出せば緑色
 デジタルも心のひだは映せない
 感動の救出劇にもらい泣き
 地下七百涙涙の無事帰還
 怒鳴るより涙ながらに子を諭す
 平均寿命デジタルの音容救なし
 戯れが過ぎて思わぬ事故に遭い
 恋文も本もデジタル指で読む
 力作の嬉し涙は果てしない
 出し切った涙銀河の応援歌
 デジタルが余韻の情緒奪い去る
 瓢箪から駒戯れの恋みもの
 ウィンクは戯れですか愛ですか
 いい歳して戯れ言うの止めてんか
 稜線が間近に迫る秋の空
 おねだりか甘えか妻の目に涙
 平安の空気に触れた團成寺
 ひとしずくの涙と語る紙おむつ
 弱味にも武器にもなっている涙
 いっときの迷いを嘔う秋の空
 秋ひと日紅葉まぼろしまた人も
 デジタルな頭脳で美人仕分け人
 團成寺はとくとと神が同居する
 風と遊んで雲と遊んで花野かな
 ライバルの顔を彫ってるハロウィン
 デジタルの向こうに何かあるだろう
 デジタルの風に吹き飛ばされて
 一生の涙交々洒れるまで
 いけずしてじやれるとつても好きな人

いさお 隆子 隆之 萌子 博一 賢子 千梢 典子 寿之 次郎 ふりこ 弘風 修 郁夫 恭昌 勝弘 柳弘 寿美 道子 良一 理恵 のりこ 真理子 隆盛 卓 惠美子 蕉子 完次 順啓 朝子

魂を揺する仏と円成寺
 冗談が本気になってから地獄
 胴上げの涙が秋の天に舞う
 御破算にするには空が青すぎる
 川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報
 フェロモンの匂う男に殺される
 さわやかに乙女の匂い遠花火
 花を切る花の匂いは消えました
 嘘っぽい匂いがするが信じよう
 待つ余裕できて大人の香する
 道の駅ふるさとまるく匂ってる
 残り香が少し匂っている小部屋
 にんげんか獣か闇にあるにおい
 僕が居る限りきくしゃくする家族
 限界を悟ってからの生き上手
 シャッター街また一軒が今日限り
 この椅子が明日もあるとは限らない
 限界は明日の寿命と根比べ
 はるばると心許無い埴輪の目
 食卓へ北の海から来たサンマ
 蒔いた種やがてわたしの意地で刈る
 失敗をチャンスに変えて立ち上がる
 駒ひとつ挽回の手を練っている
 若返る手だては恋という媚薬
 失った日取り戻す潮が満ち
 出遅れを挽回したい一本気
 挽回へあの手この手の揃い踏み
 大和魂挽回せねば日本丸
 秒針が急ぐ何か挽回するように

富彦 俊彦 洋三 富子 克子 和香 夕胡 美羽 小雪 ほのか 准一 あきこ 愿 紀子 英子 保州 佐一 輝子 登美代 富美子 美子 徑子 俣子 寿子 真里子 利治 めぐみ 紀久子

長い人生終わりをしなければすべてよし
挽回をするため眠っているのです
挽回のつもりが恥の上塗りに

茶子報

西行か泡沫の夢という無常
それから兎時々油断する

注連飾り雑草だつて夢がある
三十余年夜を徹しても解けぬ拉致

白で居る事に疲れてきた兎
波風を立てて所詮うさぎ小屋

百寿までサユリ咲かす夢がある
徹夜してゆつくり昼寝徳はなく

改めて草食系の老いの膳
記念日に晴れて嬉しい二人旅

注連飾りメタボの腹に結ばうか
まんじりと息を見詰める日が続く

朝帰りの徹夜の訳を考える
松食い虫に橋立の松食られ

ヨソ様のロマンに酔つて紅を引く
注連飾りに御縁投げ込む初詣で

夢は四、五十年賞という現
目の前の兎が昼寝してくれぬ

香を焚く夢もからだもリフレッシュ
注連飾りあむ爺さんの腕たしか

真つ白な兎に遭つた神の森
学校の庭にも建てた兎小屋

天に星地も賑やかに注連飾り
果せぬ夢でも抱いて暮せば温かい

兎年白兎神社のもうけ年

よりこ
泰女
大輪

いさを
八重

富久江

彩子

盛桜

茶子

重忠

久枝

弘子

和子

節子

実満

照彦

宣子

二ヶ月振り夢のストーリー覚えてる
夢はるか求めて花の足もとに
注連飾り昭和平成見届ける
夜なべが面白くなり朝まで続く
漁師根性夢にまでマグロ追いかける
夢枯れて泉は何も語らない

あかつき川柳会(大阪) 宮嶋シマ子報

ただ一つ不満は入れ歯合わんこと
唯一のわたしの取り得よく笑う

唯一つ叶えてほしい尊敬死
喜怒哀楽オンリーワンのその笑顔

唯一の反動的な突く意見
唯一の命悔いなく使い切る

唯一自分を信じている自分
凍てついた星を見上げる青テント

一夜明け妻の姿が有りません
DNA夜になったら目が冴える

眠れぬ夜心配事を数ええる
夜と霧アウシユビツは許せない

形勢は夜中のうちに逆転す
朝になれば目覚める筈だ今日も寝る

金曜日之夜はくろげになつて
老いの手をつなぎたくなる星月夜

憎しみもこんがり焼けば香ばしい
憎んだらあかん私が小さくなる

戦争を憎む人は憎まない
親友をふと憎んでる時がある

憎むことやめとこ賊がまた増える
人間を捨て去る戦争を憎む

人間を捨て去る戦争を憎む

(和)和子
永子
睦子

蟹郎
小鹿

篤

朝子

柳昭

祥昭

房男

シマ子

正

紀雄

克己

忠昭

一行

武

アクロバットの演技はゴムのようでんな
九十九折り上り下りをして傘寿
海外に出ると企業がこねまわる
幸せは己が心と言つた母
もらう人不在ノベル賞が泣く
よつ成田屋まずは人間磨かなきゃ
ネクタイが曲っているなヤル気だな
武器輸出買い手はどここの国ですか
戦争あかん教えてくれた開戦日
府知事さん他府県までも口だすな
バンドラの箱から機密あふれ出し
どさくさに三原則がかけられる
国造りヒットないままオフになる

ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

遷都祭終り大和に紅葉降る
失言をして大臣はおぼえられ

えんぴつが気楽にしやべる内緒事
0とX赤鉛筆が躍る

鉛筆の芯とがらせて今日をメモ
ちよつとやそつと縁でなかつたなあエンピツ

植木も仲間と行けば楽ししかろ
ご覧じませ木々紅葉の自然体

川柳茶ばしら(愛知) 板山まみ子報

意地悪な医者から禁酒告げられる
値上げせぬ代わり竹輪の丈縮む

早とちり私に似てるポケの花
丁寧な頭を渡るパーコード

バス旅行夢の中で雨降られ

太朗
哲男
哲甲

君代
いさお

勝弘

郁夫

和美

美世子

野鶴

樹

妙子

哲子

いわゑ

貴代子

みつ子

藍

年代

義子

古希迎え長生き上手まる儲け
テニス靴脱いで勞る足の指

雅美
まみ子

川柳花の輪(大阪)

妻谷 重風報

算盤を弾いて味方ついでくる
辛口の強い味方のいる余生

泰子
克衛

世界中敵でも妻は味方です
父と母風になつても子の味方

勇太郎
音成

杖ついて走れだなんて何を言う
十五夜に走る影追いかくれんは

重風
風

共白髪一人で走つた五十年
暫くは里でくらすと走り書き

やすの
一幸

病む人に希望与える無理なうそ
好きだから無理はだまつて聞いている

ミヨノ
薫

ボス猿に消えることない向う疵
金婚のおらが迎えるクリスマス

淳司
靖博

好きですと書いては消したラブレター
漁火が消えて今夜の漁終わる

よしお
幸子

義理人情いつの間やら消えた世に
消えるまで眺めていたい虹の橋

たけし
芳野

手に負えぬ一兵卒が駄々をこね
検査つけ病も軽く安堵する

輝子
明子

ケシゴムで過去のあやまち消せるなら
日本猿大事にされて減つてゆく

正一
正一

同窓の視野から消えた友の顔
身のまわり軽いものへと心がけ

けい子
マサ

果報者鍵を預ける人が居る
意固地な子因果なことに三代目

ふみ

集金に行けば表札消えている
消えた高齢者幽霊も怖いよ

武男
エミ

前例があるか否かが決め手です
面影が消去できずに古希の坂

篤
敬二

もみ消しに来た札東が悩みだす
光さえ鎮魂祈るルミナリエ

英美
もこ

戸籍から消えても逢いに來る夢路
ひな飾り一人暮らしのお客様

三和子
ヒロ

何の因果か脳が化石になつてゆく
へらへらと親の説教又カにクギ

和代
光弘

おまえ似と子の悪いとこみな私
嫁ぐ日のイブに泣きべそ父の顔

孝代
久美子

小数点以下は消去の楽隠居
親の名を一字つけられ家系継ぐ

一慧
隆彦

そもそもは去年投じたあの一票
スポットライトの裏で消したい過去がある

弘光
和子

紙の辞書紙の本へと迫る危機
無縁社会温みが消えた冬の画布

正美
富美子

明日逢える予感こんなに着い月
ほたる川柳同好会(大阪) 水野

直樹

菊花展並ぶ大輪瀧と咲き
隠し芸お蔵入りした煙草の輪

黒兎報
長一

ウンツきの輪日米でがっちり
知恵の輪のように解けぬ世の纏れ

信男
契子

基石置き参つたさてと酒に功
参つたと言わせてみた妻の口

正子
郁子

大吉がでるまではしご初詣
話し好き彼の毒舌には参る

見清
美智代

降参は口先肚はこん畜生
貸す耳はあるけど知恵はおまへんで

勝
幹治

耳を貸す位は出来る長電話
いつまでも貸した十円覚えてる

桂子
順子

貸切バス連ね大和路千三百年
赤ら顔に姉は母さん貸す気分

柳童
黒兎

好きだから考えないで良い返事
おしゃべりな友は朝から貝になる

洋子
純子

はびきの市民川柳会(大阪) 徳山みつこ報

降り止まぬ雨にたたずむ老夫婦
雨上がり私の視界絶好調

アヤ子
真一

夕フガイの背中淋しく雨が降る
雨宿り都合の悪い人に合う

フジ
庸佑

戦争はいかんよ黒い雨が降る
てんぶらの紅葉をアテに吞んでます

美代子
敏

オッパイに紅葉のような手を添えて
落葉掃く風がいじわるして困る

久仁子
ヨシ枝

幸せをきつと掴めよもみじの手
にらみ鯛予約注文冬に入る

いさお
喜喜

びつたりの口実あとは演技力
弁解の相手も負けずよく喋る

喜久子
喜久子

下らない理由でつける言いがかり
欠席の口実咳を二つ三つ

美喜
喜喜

口実を見抜いては後で自己嫌悪
口実も見抜いては後で自己嫌悪

章司
ちづる

トラブルが刺激となつて飛躍する
お互い様小さなミスは見えないふり

登志子
一壺

トラブルの先に小さな針の穴
静かだなトラブルメーカー休みです

佳代子
一知

ガタガタの体で空気吸つてます
ごたごたも呑んで男がでかくなる

京都塔の会

都倉 求芽報

残照を自分らしく染めあげる
山の色一瞬変える自然技

見下ろして笹舟のよう保津下り
北山杉仰ぐと背筋までも伸び

威儀正す北山杉がどこまでも
散りもみじあなたのとをついてゆく

寒空に真っ赤に燃えて自己主張
流れ行く先知らぬまま散る紅葉

北山杉ほど素直には生えられず
五割引平常心でおられな

自尊心強い女で嫌われる
親切心余つて妻に睨まれる

訂正をされてムカツク自尊心
父似だと少し傷つく自尊心

ライバルに競争心を煽られる
バーゲンでかなぐり捨てた羞恥心

やんわりと釘差しておく嫉妬心
持ち運びできる範囲で夢を追う

金平糖 口に運べば祖母の声
口下手がポツリ運んだいい話

引越して手伝い腰痛に悩まされ
ここだけの話へ酒が運ばれる

若者を戦地に運ぶことなかれ
月給を運んで家事もする息子

スムーズに事が運ばれている平和
告白をする気になった流れ星

悦子
みつこ

輝美

文代

芳子

則彦

求芽

義子

茂幸

勲弘

義

すみ子

庸佑

美肇

美義

浣皮を剥がす期待の顔バック
不機嫌な人にひとまます執燭を

演出の効果あげる黒子役
シユンのもの食べて元気を蓄える

サブリメントどれが効いたか分からない
痛み止め酒三合が効いてくる

ありがとうその一言で仲直り
南大阪川柳会

カレンダーの一日一善背く日日
カレンダー我が人生の過ぎた道

役に立つトイレの中のカレンダー
生まれる日花丸にして産着縫う

土と陽を愛した老父の農曆
蜘蛛の巣がいつばいの知恵張っている

折れそうな鎖骨美人はそつと抱く
細々と見えて女のすこい腕

細々と寡婦が支える屋台骨
細々と長生きしたが太つている

自信ない言葉だんだん細くなる
細々とたるんだ手足いとおしく

喜寿傘寿細々夢を持続する
腹立ちを抑えるためにポチ叱る

満腹で熊は冬眠したのにお腹一杯
腹一杯夢と希望を食べている

愛でんこ盛り母の手料理里がえり
満腹になる迄抱いて下さいいな

六十億の一人と神につながる
南北の文化をつなぐチマチヨゴリ

耕治

寿美子

光子

葉子

じろう

一兆

ふりこ

吉川 寿美報

一步

弘泰

勝弘

克己

楓楽

太一郎

負の遺産つないで泣いている後継者
点滴いのちをつなぐ夜のしじま

一枚の賀状でつなぐ友がいる
コンニャクで満腹感のダイエツト

細々とまだ温もりも愛もある
オリンピックク世界をつなぐ橋わたし

両隣留守を頼んで輪を結ぶ
叱られたとおりに叱つてパパになる

頭から叱り付けても子は聞かぬ
細々と暮すことさえできぬ国

細々の暮らしに税金まっつたなし
満腹の夢ばかり見るダイエツト

満腹になって礼節忘れてる
医者通い寿命細々つないでる

會吉川柳会鳥取

いのち綱和尚と医者が握つとる
綱張つて動物人間知恵くらべ

唾つけて燃つた絆の強い綱
生き下手で綱のゆるみに馴らされる

綱引きで尻もちついて大騒ぎ
もやい綱ほどきやすくてどげない

わずかだが命の綱は年金だ
イラクでは毎日空襲警報だ

緊張をほぐすお酒が虎になる
緊張が隠しきれない手の震え

美しい女に緊張してしまふ
緊張がとけたとたんに酔いまわる

忠昭

憲太郎

栄美

直樹

柳右子

タカ子

とし子

庸佑

昌紀

萬昭

祥昭

東吉

ルイ子

石花菜

貞子

喜美子

睦子

瑞子

玲坊

泰輔

次男

康子

賀寿恵

登

美津恵

恭子

美代子

人間は火を操つて王となる

火たるまの日本経済明日がない

焚き火する通りすがりも寄つて行く

お寒い火の気が無いと生きられぬ

一つ一つ秋をたたんで火にくべる

半島の火薬庫点火許すまじ

あなたより火の側がよい寒い夜は

かあちゃん外れじやないぞ大当り

疑いが外れてほつとする検査

櫛入れる度には抜け落ち老いの髪

笑いすぎ顔が外れたことがある

どないしよう外した入歯見つからぬ

されたくない仲間外れしたくない

人並みを外れないよう生きている

衿卸せば風が覗き込む

女房も亭主も当り外れあり

翠洋会大匠

佐々木満作報

乱れ髪夜叉にもなれず泣いただけ

言い勝つて夜の長さをもてあます

少し甘え少し乱れる夜が好き

語らひはモノクロがよい冬の夜

秋夜長詩人となった曼珠沙華

夜のとぼり下りて心に灯がともる

派手な顔利用してます稼いでる

年一度派手な喧嘩でガスを抜く

あと十年いざればきつと派手になる

残照の舞台で派手に舞っている

海老蔵は派手と言うより乱れすぎ

はくはくと深い話をして帰る

悠子 智恵子 祐子 和子 風露 鬼一 由紀子 宏 龍枝 日出子 重忠 和枝 けいこ 醉芙蓉 萩江 照彦

三億円ホクホク求めぬぶ列
わらべ歌芋ほくほくと落葉焚き
ほくほくの肉ジャガボクの誕生日
良いニュースはノーベル賞だけ年の暮れ
老いか知ら流星群も興味失せ
民主党総理が二人いるみたい
じむさいてせにネクタイクリスマス
世に中の話題の種は菅と海老
止り木をどこへ引こか阿弥陀くじ
夫婦とは悲しきものよ積木積む
子供から優しい言葉もらう歳
歩こうときめて歩いた吾をほめ
肩書のゼロと枯れ葉の並木道
平和像深い祈りが身に沁みる
クリスマス光り輝くダイオード
写経して励みをくれた友が逝く
うるさいが居ないと困る人と住む

蕉子 志華子 みつ子 げんせい 叡子 善之 真澄 公澄 慈彦 千梢 日の出 照子 正雄 紀子 弘子 捷也 集一

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

ゆつくりとテンポを合わす夫婦道

ほめ殺すセリフゆつくり練り直す

浮雲のようにカタツムリのように

ゆつくりと頭を冷やす日本海

止り木でゆつくり疲れとつている

美しくあり虚しくあり十二月

年末も仏壇掃除からしよう

年末にあれもこれもと来るラッシュ

心配が解けて明る也大晦日

年末に道路工事をする不思議

懐の寒さ師走の風凍みる

清帆 孝男 完司 一瑤 一京 螢 陸子 一粹 節ぬ

年末は家族揃つて大掃除
師は百寿カニを噛む歯はいまだある
師の袴たんで弟子にしてみもらい
人情味あつて勝負師にはなれぬ
花も実もあつた教師の鉛と鞭
川柳にさそつてくれた師に感謝
師の一字入れた息子が吾を越す
心打つ講師のことば胸に抱く
生きて来た師は父母の背中なり
師の影も靴のかかと踏む世代
師と呼んだ人への恩は忘れぬ
師に感謝時々教えふと浮かぶ
急かしてもゆつくり化粧だけはする

川柳あまがさき兵庫

田原一兆報

悪役にピッタリなのが傍に居る

神さまも粋なはからい夫婦松

負の時を楽しみながらハープテイ

階段の上にご利益鎮座され

曾根崎に通う酒場の美形ママ

はんだ鍍金の教えが今生きる

階段で立ち止まつては景色見る

蜜入りのりんごを剥くと雲の音

瞬きも出来ず氷の華に酔い

ヒロインはやはり美人に仕立てられ

美人ではないが優しい妻元氣

旅プラン嫁には内緒娘と二人

見飽きると言うが美人の方が好き

美人の湯こぞとばかりツアー客

美人より心やさしい人に惚れ

菅子 重忠 蟹郎 圭一郎 忠良 幸安 幸枝 和枝 雅女 幸子 和子 美恵子 一兆 義 和子 純 柳明 イサミ 芳治 雪菜 美也子 耕治 五月 美代子 かずお 求芽 江美

美人湯に来ていますまだ効きめなし
 神の杜太古の風に戯れる
 美人でもゆきつく先はみな同じ
 清水の舞台で躍る「暑」い文字
 螺旋階段三オクターブほどのほり
 三猿を守り同居の基礎がため
 一歩ずつ愛の階段踏みしめて
 階段をリズムで降りる若い脚
 階段の高さで神に試される
 私達美女と野獣の夫婦です
 美人画を観てる男の鼻の下
 不整脈美人接近禁止中
 有難や買ったマスクに用がない
 愛はいまうせん階段ゆるやかに
 雨は無情余命ある花まで散らす

川柳大阪

長井

善純報

あかり 奮水 登子 野薫 菜々子 里江 朋月 靖鬼 キヨミ 茂幸 正和 勝巳 紀乃 美籠 照月 すがお かよこ 珠生 和美 五世 勝弘 鉄心 喜楽 彦太 花笑 哲也

北方四島文句あるなら買うてやる
 宝クジ三億当れば二億寄付
 豪快なスイング柵越え大ファール
 ハイの次けとで始まる言いつけが
 軒さき小煩いけれどほととす
 家族愛まんねりやけど皆笑顔
 おい野党ふりむきなはれ五十年
 どつさりとおるけど質素お金持ち
 割勘の筈だが財布開かない
 青汁の愛好者です入院中
 足腰弱るだけと僕にはベンがある
 叱るけど母の目すでに許してる
 中国船言いたないけど無茶し過ぎ

川柳クラブわたの花大阪 西川

義明報

まつお いっふみ 柳弘 美花 とし坊 義明 青道 信醉 東一 善純 宏 義明 正春 妙子 俊子 晴美 浩三 孝子 和子 ますみ はじむ たえ子 美代子 耀一 知佐子

可愛い娘の甘い言葉についてコロリ
 核兵器持つて世界にごね通す
 なめらかな舌味方とは限らない
 義理拾つて生身のままで勝負する
 ラーメンで気力補給の受験生
 計報受けパソコン開き名簿消す
 秋桜の海に蜻蛉がバタフライ
 虫すだくやっぱり秋だ汗がひく
 物忘れ今日もこりずに繰り返す
 勝負を秘めた男の自信面
 官僚の失言又か独り言
 汗かぬ人があれこれ指図する
 女房にもあったらしいなトレード制
 この足で歩くはかなしスベアなし

岬川柳会大阪

八十田洞庵報

介護士になると言う娘の瞳がきれい
 ハロウィーンのおどけた笑顔秋の色
 温暖化木の実探してクマ悲劇
 世界の目チリのニュースに安堵する
 愛なんて心に響くいい言葉
 あの頃の瞳も今は白内障
 青春の汗思ひ出す古日記

すれ違い君の名聞えば彼岸花
 ひとり居の姿を風がのぞく窓
 他人は他つましく歩む己が道
 幼子の一歩歩いて誇り顔
 故里の誇りと期待の甲子園
 サロンパス駅でこっそり外す朝
 病む人を見舞いしばし指を折る
 ほっとして孫台風の去ったあと
 城下町誇る歴史の天守閣
 骨折つて八十路もすぎる親不孝
 思い出を辿るが故に秋悲し
 八十路坂ひと息いれる丸い石
 木の下で語つた夢が雲に乗る
 虫退治益足なれば逃してやる
 鍋の中蟹あばれればああ無情
 義理よりも本気で行くこころから
 外湯へと揃いの浴衣下駄の音
 来年のラスカル対策妻笑う
 ハイウエー時短で友も近くなり
 仏様無理な願いもいい笑顔
 病院で骨折しているドジな人

民 博子 愛子 奈良司 宏至 いっふみ 一風 和美 和香 東吉 とみ 清一 蛙城 桜琴 茂平 富美 悦子 寛 富美子 年子 富美子 圭子 洋子 とみ 利武 覚庵 貞夫 令子 禮三

自分史に小卒誇る創業者

いずも川柳会鳥根

佐藤 治代報

洞庵

ざわざわもかたちを変えたる吹きたまり

スト終りのどかに旗も背を延ばす

二日酔い狸に化けてストライキ

ストらしい我が子褒めよか叱ろうか

うまい汁吸うと後かたつけがくる

レモン汁すすり気合いを入れ直す

味噌のにおい階段かけ降りる

秋風に暑さを忘れ食進む

種物もストするらしい生えて来ぬ

ざわざわと春一番が背中押す

ストやって仏にわびを入れました

ストライキ夢の又夢職がない

拒否をする少年脱皮の兆しあり

立秋の暦もよそに猛暑なり

ざわざわが静まるまでは寝ておこう

人間を山と川に分けるスト

汁椀を褒めて中身にふれられず

少しずつでも私の灰汁絞る

底冷えがざわざわと背なを這う

甲子園一番燃えた暑い夏

酷暑の日やさしい風に逢えそうで

公園の隅冬眠をする猛暑

スト権を持たないままで鬼籍也

ざわざわの鱗流してから泳ぐ

ざわざわの予感深読みせぬつもり

暑いか寒いか生きてる証

ざわざわのまんまんに居る孤独

寿昌

美枝

同じ人間話せばとける連れ糸

嫁姑同じ話題で茶が旨い

暑中見舞今年はこない彼のペン

お母ちゃんのストは痛いねお父ちゃん

ストライキじつくり骨を休めてる

悪汁が濁らぬように水を飲む

ざわざわの合い間に話詰めておく

建前と本音がストの中で揺れ

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

捨てられた種が意地見せそつと咲く

再手術とんぼになって孫の傍

物忘れそつと医学書読んでみる

陰悪なムードにそつと袖を引く

遠距離をとんぼ返りで介護する

山をキャンパスに秋色ちりばめる

留守番でゆつくりできたためしない

留守番と聞いて集まる老い仲間

ススキ荒れ先祖が泣く休耕田

流行り風邪はらはらさせる受験前

はらはらはらと若葉マークのおともする

よその子を叱ると風が騒ぎだす

裏果てて虚しさを抱く空騒ぎ

若さまだ忘れられない欲な俺

都会へと親を忘れて子が急ぐ

都合よく思い出したり忘れたり

振られた夜募る想いに酒がいる

転んでも変化一途の道辿る

民謡がふるさと自慢しうたう

欲望は働きものだ休まない

玲子

敬子

茂美

きみえ

蘭水

文子

章峰

ちかし

久司

礼香

温子

章子

美恵子

ひとみ

千恵子

引ふみ子

ちず子

勝之

敦子

嘉子

くにこ

純宏

陽子

山 ぶみ子

勇

菜美

勢津子

安子

何も変わらぬ私一人が騒いでも

欲深な心に右往左往する

雀の涙ほどの利息に我慢する

月光に騒ぐ薄の群れにいる

霊柩車予約はないが忙しい

帽子変えるのにんげんが生き返る

八尾市民川柳会大阪 宮西 弥生報

本棚で若いむかしと目を合わす

花盛りを過ぎてても人を愛せませす

そつとしておこう花芽が伸びている

大トリがまたまた来ぬ断を引き伸ばす

若松を矯めて流儀の型にする

丘からの眺め想い出がよぎる

何のため生きているかと問う座禪

出世して親を見に来ぬ蛙の子

初孫がやつと男たあと継ぎだ

大の字になって今宵は自由人

身から出た錆名門のお騒がせ

晩鐘の中へ帰っていく夕日

気がつけば不安ケータイ置き忘れ

一筋の道に徹している気骨

緊縮の家計へ寿命ばかり伸び

のびる芽に一生分の設計図

少年の夢はどんとど豆の蔓

平穩のところどころに水溜り

サンタへの期待に悩む親心

就活がなかなか伸びず超氷河

師走には師走の風に抱かれよう

上の上目指しゼロから開くドア

華連

一眸

和代

遊子

帆雀

公弘

弥生報

一風

耀一

草風

あかり

紀乃

いさお

五柳

幸生

柳華

欣之

秋子

朝子

賢子

園

寿之

扶美代

留里恵

紀雄

森子

弥生

生

川柳塔まつえ吟社(鳥根)三島 浜丘報

叮紅

急いでも手足は年のことを言う
カラカラと落葉わたしを急がせる
陽が沈む急がなくて初春は来る
急かされても覚束かぬ手のもどかしさ
救急車とけどどけと走りゆく
旅立ちには急がず白寿越えてから
ラッキーと笑ってしまふ黄身二つ
洗濯に出すポケットに二千元
束の間のラッキーだった晴れた富士
早起きに分だけ空気多く吸う
村芝居正面の座でラッキーだ
健康で動けるラッキーさすけられ
惜しみない拍手フルト酔いしれる
六道湖の夕日を惜しむ鴨の群れ
惜しいけどつべんの柿鳥の物
言えなくてチャンス逃がし惜しまれる
死にたくない死にたくない年惜しむ
賢明な姿残した杉さん
まだ登る坂があるから靴を買う
幸せを計る物差し買いいに行く
指輪買ひようやく心決めてさせた
病院で寿命を買ったのは去年
人生の良き買物はあなたです
時々は無駄を買うのも楽しくて
思い出の旅を手帳は知っている
母の知恵手帳へメモし未来へと
手帳には重い荷物を背負わせる
びつしりと手帳を埋めたポランティア

幸子 政子 芳山 涼子 玲子 治代 茂美 雪代 和歌子 長吉 知恵子 禮子 芳恵 幸代 柳歩 桂子 美智子 注湖 小蘭 小鹿 ゆき 英子 ちえこ きみえ たけし

秘め事は手帳の中であたためる
約束を果たして手帳軽くなる

西宮北口川柳会(兵庫) 小林 わこ報

寿代 浜丘

ここにある探し求めた青い鳥
求めても何もしませんが役所で
親が出来ぬ事を子供に求めても
職求めハローワークの常連に
求めすぎるとあなたの言葉重くなる
妻からの自由求めた悪あがき
イライラと脱いだ手袋裏返り
哀しみをはらり手袋脱いでように
過労死の軍手に穴が飛いでいた
手袋を握りしめて帰る道
泥にまみれ軍手は軍手らしくなる
手袋のままの握手で伝わらぬ
この手袋穂高へ一緒だったよね
二つ目の辻を曲がると僕の基地
赤いセーター誰が着せたか辻地蔵
六道の辻迷った場合地獄へ行く
辻いくつ越えたか母のいい笑顔
ロマンしてひやり社長は会議中
遅刻してひやり社長のいい笑顔
握手してひんやりした手温くなる
おしゃべりにバッテリー会った場所が場所
救急車ひやりとさせる胸さわぎ
CTに痛のようだと言医者が言い
ませた孫ひやりとさせることを言う
金星をひやりあかつき掠め飛び
流星へ孤独の気持ち話して

千代 直 浩司 歳子 能子 宏造 宣子 紀乃 耕治 嘉代子 いわゑ 義子 美籠 勝弘 玲子 木ヨミ 奮水 里こ 茂 光子 朋月 哲男 野鶴 早加水

携帯は現代版の迷子札
間一髪間に合ったのに女専車だ
母のよに大人になれぬ古希の我
凜とした竹林の道駈行く
日向ぼこ今は落葉の見頃です
人生の秋紅葉のように燃やしたい
み仏に一步近づく除夜の鐘
迷いから抜けたいはじめに鏡拭く
左手にたぎる想いのピアノ曲

岸和田川柳会(大阪) 仲谷 弘子報

清

また一年生きたと笑う老夫婦
ジングルベルが師走の空気をわせる
年末も正月もない受験生
寒いわね師走ですからこんなもん
秘め事を心に仕舞う十一月
師走とて大黒柱なき家も
足早に諭吉出て行く十二月
雲流れるなるようになる十二月
うららり売舌のすべりがさこちない
断家の羽織のすべり袴に落ち
手ぬるさが見え隠れする日本丸
教育が手ぬるくなつて罪つくる
先生の叱り手ぬるく生徒荒れ
尖閣の暴挙横目に柳腰
手ぬるさと優しさにある車間距離
ワちゃんにケすわが家のセキユリテイ
技託す息子の苦悩なやむ母
恋こころ歌に託して書く手紙
一生を託した夫が先に逝く

基輔 武臣 弘子 順子 敏夫 盛夫 秋果 求芽 哲夫 玄也 泰弘 和美 笑枝 房枝 珠子 ダン吉 幸昭 忠太 俊昭 淳風 仁緑 蛙城 洋 つかさ 義泰 弘子

託すにはまだまだ不安民主党
辛抱のトンネル出れば花ざかり
基地移設トンネル続く珊瑚礁
トンネルを無心に走る父の貨車
麻線のトンネルワイン眠らせる

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

大安吉日棟上げしきで餅拾う
鍋好きの家族たまらぬ季節です
子育てを人に預けて文句言い
サムライの眼にも涙の死刑判決
商人米子で水を売る度胸
振袖も老いてタンスの虫干しす
庭の草見て見ぬ振りでつけもらう
治るなら我慢もしよう副作用
みたくない景色セイタカワダチソウ
秋空の雲の移りぎ冬想う
いざと言う時は指紋がしゃべり出す

六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報

ライバルのジョーク深読みしてしまっ
お早うの挨拶だけがプレゼント
巢立つ日の校舎に響く送る歌
サンローラン亡母に御供え口の紅
お帰りに笑顔がつけば最高だ
父の日には何事も無いそれでいい
忘れてた思い揺さぶるプレゼント
知らない方がよかったことを知らせれる
何気なく食べるお米に汗を知る
知ってるが知らん振りしてとぼけてる

東吉 榎代 香代 力子 みつ江
欣子 札子 正二 未延子 公一 ふみ 多美子 宏之 登実枝 すみえ 楓楽 光久 和郎 夏子 武弘 順子 能子 保雄 寿朗

ゆつたりとローカル線で風をよむ
知らん顔しているけれど地獄耳
自社の危機新聞記事で知るうかつ
尖閣のビデオが問うた知る権利
意地張らず負けるが勝ちで明日を生き
シベリアを語らずこの世を去りし父
寂しさを流れる雲にひよいとのせ
愛情とひと手間かけるお味噌汁
パソコンに振り回される老いの我
アイパッド妻が茶の間で使ってた
リストラで金の成る種海外へ
わが妻はいつも私の三歩前
羨して私色になるペット
孫来ればペットが拗ねて部屋の隅
我が家にも戌年二人吠えてます
日溜りに猫とまじろむ昼下り
ひきこもりペットにだけは話しでき
隣の大家よりうまいものを食べ
ピカソ見て優越感に浸る孫
経験が迷路となつて邪魔をする
千羽鶴愛の一片がまだ折れぬ
要るいらぬ仕分けたものにまだ未練
いい夢の続き見たくて二度寝する
童話を歌うと鬱も溶けてゆく
庭はないがペランダの花負けてない

千賀子 繁義 浩司 武彦 義一 義行 利子 礼甫 芳江 洋一 和子 和恵 美恵子 勤 悦子 山弘子 基輔 茂 弘弘子 盛夫 毅 美穂 無限 いわゑ みつ子

白寿まで元気でいるという抱負
神様に預けておいた夢一ツ
深呼吸すれば心がまるくなる
風邪で寝る家族と住めるありがたみ
煩惱が理性を破り朝帰り
煩惱を絶つたと思う棺の中
除夜の鐘くらいじゃ煩惱捨てきれぬ
少年の狂気に走る闇を問う
貫こう自分でこうと決めた道
翠櫓のひこばえが見る高い空
語り合う抱負若さに夢のあり
みたらし団子あの時の恋思い出し
枯れぬようお酒を飲まず私の木
役立たぬ身で聞く少子高齢化
煩惱は忘年会で置き去りに
終つたと割り切れなくて鬱つづく
美術館はしよつてケーキに走る秋
新しき十年日記生きて書こ
荷を減らし卒寿の坂の準備する
百八つの煩惱に日さらされる
プレッシャー逃れて炊いた米のめし
煩惱が時々消えた振りをする
プレッシャー初仲人の舌纏れ
期待などしないではいままき猫

弘風 博泉 弘一 三郎 郁夫 朝子 賢子 鈍甲 一風 忠央 洋 じゅんこ さち子 修 銀杏 尚世 美江 美智子 とし子 恵子 柳弘 仁清 朋月 章子 ひとみ ちあき

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報
新年へ抱負ばかりが先はしる
わたくしの抱負少うし背のびさせ
ああしんど四十本の爪を切る
かすみ

川柳さんだ(兵庫) 北野 哲男報
シャッター街ノジングルベルを聞いている
あげ底にしますサンタのプレゼント
長靴の中にレシートありました
クリスマス会さえない貴方の泪雪

二次会へあうんの返事さすが友
顔ぶれを見ると二次会行けぬ歳
二次会になると幹事は酔いつぶれ
おい呑もか遺影に向いひとり言
極上のつぶやきですなごちそうさん
冬銀河つぶやいてみる「お母さん」
つぶやいていても聞こえぬ振りの夫
結婚の予感がしたよあの二人
宝くじ当たる予感の夢で買い
一隅を照らすつもりポランティア
私の心の隅にある善意
シャイだから隅から食べる幕の内
来年は我が家に来そうこのとり
理屈ばい道理が欠けた子が育ち
忘年会ワルツで締める趣味の会
首よりもお酒選んだ人もある
子の笑顔借りて織ります紡ぎ糸
躓いてひとりの暮し羽たむ
変われない声で確認母の感
休肝日だけが自棄に早く来る
お歳暮に見えない紐もつけておく
山茶花がつぶやく様に散って行く

川柳塔すみよし(大阪) 岩崎 公誠報

美紗子 哲男 正和 茂山 菜々子 歳子 裕美 一良 二英 キヨミ 喜代子 忠 直美 雅司 一泉 哲夫 美和子 一子 好文 宣子 順子

できる子も素直になれぬ反抗期 (奥)五月
中告を素直に開ける子に育ち のん子
言われた事言われた通りしています 太郎
夕焼けにカーテンコールしたくなる 妙子
三丁目の夕日あればやっぱり絵空事 昌紀
ママチャリで夕焼け背にし子を迎え チエコ
素直やは挨拶ちゃんとしてくれる 美世子
美人だと言われ素直に聞いてます 日の出
世の移り夕焼け空は変らない 半銭
ふぐ蟹と旅のプランが姦しい 直子
人生はプラン通りに行きまへん たかこ
プランには無いリストラムも転職も 直子
次の世のプランもあなただと一緒です 美籠
来年のプランも元氣祈るだけ 芳香
進まねば後がいつはいつかえてる 勝弘
感動がペンの後押ししてくれる 舞夢
待つよりも進んでみよう逢えるから 一步
進展がないので途中下車をする 裕之
突き進む勇氣恋って素晴らしい 岳人
ラップかけリンゴ半分君のため 朝子
吉報をもたらしそう半陽が燃える 朝子
きっちりといかぬ人生また妙味 朝子
回転数落ちてきた脳いとおしむ 朝子
食欲がいつも進める腹時計 (笑)五月 朝子
打算から入ったプラン隙だらけ 遠野
進まない話うどんが伸びている 蕉子

豊中もくせい川柳会大阪 藤井 則彦報

阿修羅像力んだ悪を追い返す 郁子
九十二歳矢つ張り朝の髷をそる 萬的

人情のしがらみ無下に断ち切れぬ
しがらみを若い心は血で染める
度度の夫の言い訳感じ入る
はつとする美女が男で狼狽える
しがらみを越せぬさんか散る定め
鈍感力を磨き憂き世を泳ぎ切る
包丁を研いでしがらみ切る用意
いい感じ今日はすべてが思うまま
悪友の誘いへはつとする師走
ブルカから覗く眸にはつとする
爾爾と妻の歩幅に合わせる
しがらみが解けて孤独をかみしめる
温い手に触れて力みが消えてゆく
ゆるキヤラでいつもジョーカー温める
感動のドラマ老いには重すぎる
しがらみを物ともしない天邪鬼
玉手箱恋のしがらみそつと入れ
鬱の字が常用漢字になったウツ
しがらみをみんな落して冬木立
一歩ずつ地に足付けて生きる自負
良心のしがらみが茶茶入れに来る
秋の木木いろはにはへと生きた色
鈍感といわれる方が氣楽です
誇るもの無いが劣等感もない
感謝する心で余生あたためる
出産の力みで母は強くなる
切札を握ると感性が鈍る
長生きの祖母と平和な路地が好き
感性の違うふたりのおでん鍋
力んでもいつかはみんな風になる

庸佑 宇乃子 佐和子 歌留多 志津子 幸雀 千恵子 雀舎 幹治 (笑)玲 美津子 堅坊 則彦 巴子 求芽 千枝子 賢子 見清 (笑)玲 寿美子 美義 朝子 満子 紀乃 千代 美智代

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半締切 生活・削ぐ・断じて・ニュース	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0824 岸和田市葛城町891-22 岩佐ダン吉
川柳塔 みちのく	19日(土)午後5時締切 相棒・伏せる・ぼつぼつ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	20日(日)午後2時締切 困る・ユーモア・余裕・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日)午後2時締切 コート・丁寧	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日)午後2時締切 ふわふわ・匂う・叩く	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	21日(月)午後1時40分締切 書く・内緒・ぜび・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
南大阪 川柳会	21日(月)午後6時から 雪・すぎる・愛情・空しい	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前9時半から 牛・鬼・敷く・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	26日(土)午後1時締切 晴れ・物事・まずまず	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	26日(土)午後0時30分から 椅子・想像・鬼	和歌山商工会議所4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「読者のひろば和歌山三幸川柳会」係
はびきの 市川柳会	27日(日)午後1時締切 鬼・妬く・コップ・未来	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	27日(日)午後1時半締切 入口・ブランク・場違い	鳥取駅 2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
京都 塔の会	28日(月)午後2時締切 積む・あやかる・声	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	28日(月)午後7時半締切 船(舟)・頭・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	3日(木) 午後1時開場 仰ぐ・里・見栄	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北会 川柳会	5日(土) 午後1時開場 回る・ガラス・傘・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	5日(土) 午後1時開場 芯・期待・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳会	5日(土) 午後2時締切 笛・和解・粘り	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 あまがさき	8日(火) 午後2時締切 往復・許す・いらいら・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 午後1時半締切 湯・こだわる・しっかり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さかい	10日(木) 午後1時から こだわり・淡い 「く・る・み(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川柳会	11日(金) 午後2時締切 怒る・声・角度	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分 道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	12日(土) 午後2時締切 じっくり・坂・本心	地下鉄長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後2時締切 明り・自由・染める・ケータイ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 打吹	12日(土) 午後2時締切 芯・威張る・押す	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	13日(日) 午後1時半締切 納得・火・笑う・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかや 吟社	13日(日) 午後1時40分締切 横・防寒・そのまま・ぞ(助詞)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川柳会	14日(月) 午後1時45分締切 余る・常識・ちらちら・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 さんだ	15日(火) 午後1時から 本音・重ねる・霜・ふらふら 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和

柳界展望

朝日新聞社賞

大空を舞台に父は鉄を振る

特選

英霊のホタルが探す妻や子よ 上垣キヨミ

★京都塔の会平成22年度年間成績は次の通り。

最優秀賞Ⅱ該当者なし。

一位Ⅱ高島啓子。二位Ⅱ都倉求芽。三位Ⅱ榊本宏子。四位Ⅱ藤井則彦。五位Ⅱ片山かずお。

▽同人動向△

☆米田恭昌さん(奈良市・参与)から、第16回川柳塔まつりのビデオテープを寄贈いただきました。貸出し希望者は事務所まで連絡のこと。

☆西村哲夫さん(東大阪・会計監査)は、インターネットUチューブのおおさかささん(第9回)に採り上げられた。一五九四年ごろ開基の淨福寺第15代住職として、月一度の報恩講や婦人部コーラス、年一度の夜店などの幅広い活動が紹介された。また趣味としての

川柳なども披露した。

▽柳界動向△

◇川柳作家・時実新子展 1月5日～2月6日、徳島市中前川町2丁目の県立文学書道館(088・625・7485)入場料500円、月曜休館

◇川柳塔のぞみ(代表・播本充子さん)は二月句会から「のぞみ川柳会」に改称。

▽計報▲

●山本益子さん(同人・鳥取市)は、平成22年12月10日逝去。享年80歳。

▽出版版△

◇井上勝視さん(同人・唐津市)は懐古句集「茹で蛙」を出版。B6版191頁。(鑑賞文は3月号掲載予定)

新同人紹介

島田誠一

— 天笑・月子・玄也推薦

目皆皆勤賞↓皆勤賞。P127

上段21行目煽られて、煽てられ。

▽新誌友紹介△

松江市 藤井 寿代

岡山市 西原 知里

紹介者 小鳥 蘭幸

柏原市 森吉留里恵

紹介者 宮西 弥生

八幡市 今井万紗子

紹介者 井上じろう

常任理事会Ⅱ1月7日(金) 出席者22名。①特別・常任

理事会と代表者・役員拡大 会議について②第17回川柳

塔まつりと大阪川柳大会の 兼題と選者の選定③定例確

認事項④各部報告事項⑤その他 次回Ⅱ2月4日(金)

79-35-0700

▽住所変更△

○藤村亜成さん(枚方市・会計監査)。新任所は〒573

112枚方市西船橋2丁目16

5。

▽お詫びして訂正△

▼12月号 P97上段17行目

「文集」の頃の↓項。P125中

段、平成23年度業務分担表

↓22年度。

▼1月号 P18下段23行目

使名↓指名。P26下段1行

目富田ルイ子↓富山。P50

上段7行目波田野五楽庵↓

波多野。P54下段16行目待

つてゝ持つてゝ。P95上

段12行目大川桃代↓桃花。 P109、10行目マ、グロ、マ、

マ。P110下段13行目千恵子 ↓千枝子。P111上段6行目 宣子↓恭昌。P113中段25行

葭乃先生と猫

清水 白柳

万代の川柳塔社を訪れたことのある柳人なら誰でも気付いたことだろうと思うが、いつ行っても必ず猫にお目にかかったものだ。迎えにも出て来たし、また送つてもくれた。それ程麻生家と猫は切つても切れぬものであった。

いつ行つても猫はいるのだが、その猫は大きかったり、小さかったり、色もさまざまだったので、その猫が何代目の猫なのか少しもわからなかった。聞いたのかも知れないが、元来余り猫好きではないので聞き流してしまつたのかも知れない。

葭乃先生に叱られると甘えた鳴き声で首をすくめる小さな猫などは可愛らしかった。先生が意識しておられたのかどうかは知らないが、あの雑然と積み重ねてあつた古い柳誌は一枚も、ねずみに囓られた跡がなかったのは猫のいた威力の賜だと思われた。明治時代の

古びた紙切れが無事に残つていたのも猫のおかげだと言えなくもない。

その猫も生駒までお伴可愛がられているのは川柳塔にのせられた葭乃先生の句にもうかがい知ることが出来る。

猫のイゴイスムがイゴイスムな人と住み猫のわがままに共鳴をする雅量出来背の青い魚は食わぬ猫を抱く

(二、三月号)

葭乃先生と猫とのおつき合いは五十年にもなることが古い柳誌を調べていたら判つた。それは、路郎先生が発行しておられた柳誌、「雪」大正五年六月号にのつている一文からである。原文のままのせさせていただく。

埃一束

ヨタリスト

路郎クン何処よりか子猫を貰い来りてカイゼルと名づく。妻君二人の子供さえ中々面倒なるにとて顔をしかむ。まあ、ええがなあと路郎クン三人の子持ちの積りなり。妻君、諦めてカイゼルに与ふるに洋食皿を以てす。それに長女の牛乳の幾分を注ぐ。路郎クン、やれやれと思ひ、まづまづ家庭円満と。

妻君再び曰く純ちゃん(長女)の茶碗からカイゼルがご馳走に預からんとし、カイゼルの洋食皿から純ちゃんがいやしんぼして困りますと。妻君又曰く、御世ちゃん(二女)の

胸の上にカイゼルがあがつて困ります。路郎クン遂にカイゼルを門下生に贈る。

(大正五年六月一日)

このカイゼル君を贈られた川柳家はどなたであつたかは知る由もないが、葭乃先生の句集「福寿草」の中にある猫の句を見ると、いっつうのほどにか麻生家には猫がいたのである。

箸うごく通りに猫の首動き

お店繁盛忘れられてる猫の皿

飼猫の盜癖ゆるす氣にもなり

叱られもせず迷猫納屋で産み

猫今日もお粥のしずくだけ貰ひ

句集「福寿草」から

こうした長年の猫とのおつき合いの中から川柳塔「三月号」に葭乃先生がお書きになつた「猫なみの目的」という名文が生まれたのである。いま生駒で葭乃先生という猫はどんな猫かは知らないが倅せな猫だと思ふ。

うちの猫

葭乃

どうせ開く障子を猫は外で待ち
お膳から追われ毛を掻く猫のやけ
猫甲斐もなくうちの猫骨を立て
嗅いでみて食べない猫に育てられ
星月夜猫も詩情を知る如く

(川柳塔七月号)

(川柳塔昭和41年11月号より)

編集後記

★手に足に関節のある寒さかな
薫風

★『麻生路郎読本』の感想が続々と寄せられている。一部をご紹介します。「これだけのものを纏められるのには、ご苦労も多かったことでしょう。資料として大切に活用させて頂きます」

「六大家といえども、纏まった資料が少ない。川柳塔社はすばらしい仕事をされましたね」。「麻生路郎読本三日三晩かけて読了。六大家は一人も読んでいなかったが、路郎は面白かった。川柳塔の前進が川柳雑誌とはスゴイ歴史」。資料を提供して下さったご遺族から「仏前にお供えしました」

★インターネットで「麻生路郎読本」と検索してみてもほしい。いろんな書き込みがある。俳誌「船団」のホームページにも、「坪内稔

典今日の一句」として路郎の句が取り上げられ、「この冬の読書が楽しくなりそうな一冊だ」の一節が嬉しい。

★そんな反響の中に中川さんからお手紙が届いた。便箋数枚に几帳面に書かれた内容は、路郎の資料としても貴重なもので、中川さんのご好意により全文を掲載させて頂いた。心から感謝申し上げます。

★堺利彦さんには「麻生路郎読本鑑賞」の寄稿をいただいた。お人柄そのままの誠実な鑑賞が心にやさしく染み込んでくる。「多忙な中をご執筆いただき、ありがとうございます。ごさいました」

★原稿を書くのにワープロのお世話になって十年。「パソコン全盛の時代」にまだワープロかいな」と友人は笑うが、原稿を書くにはワープロに限る。昨年修理に出したとき「これが最後ですよ」と引導を渡された。

ひとこと

吉良さんに思う

東映時代劇が華やかなりし頃12月になるとオールスター総出演で「忠臣蔵」が上映され人気を呼んでいた。最近、松平健主演の忠臣蔵を観たが、同じような場面では泣いてしまった。
伊藤四郎が吉良上野之介を演じていたが、吉良さんの当り役であった月形龍之介と比べて遜色はな

かった。

池宮彰一郎の「その日の吉良上野之介」を読んだ時は、通説の吉良さんと違う姿に少なからず興奮したものだ。十三日までは大石笑われる

井上剣花坊

まさに言い得て妙。川柳の面白さにここに有り。一句でも代表作と言える句を残したいと思う。
(森松まつお)

以後、大事に使っているが不安である。そこをお願い。

反事件が強制起訴になった。

★パソコンの陰で眠っている「東芝RUPO」はあります。私的なお願いに貴重な誌面を割いて申し訳ないが、お譲りいただける方は事務所まで一報いただければ幸いです。(朱)

◇検察審査会の存在が最近クローズアップされている。
◇検察は法廷で有罪がほぼ確定な案件は起訴するが無罪の可能性の高い案件は不起訴にすることが多い。
◇検察の判断で不起訴となった事案で、検察審査会は起訴相当と議決をする。そこで、検察は再度調査をやり直す、が再度不起訴とする。検察審査会も再度調査をするが、やはり起訴相当と二度議決する。二度議決をすると強制起訴になる。

◇明石歩道橋事故、JRF福知山線事故のような公共性の高い事故、西松建設や小沢氏への政治資金規正法違反の可能性がある高い案件は不起訴にすることが多い。
◇検察審査会は遺族の申し立てや民意を無視する事はできなかつたであろう。国民は裁判によって有罪か無罪かを判断してもらいたい、と願っている。
◇川柳塔社では同人、誌友の声を大切と心掛けて取り組んでいます。皆さんの声をどんどんお寄せ下さい。編集部は万全を期していますが不行き届きの点はご容赦下さい。(光)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(4月号)

地名

都府道市
都府道市
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「くつきり」 (2月15日締切)

4月号発表

山本希久子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府

姓
雅号

地名

市都
道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

初歩教室 一路集 (3句) 檸檬抄 (2句) 愛染帖 (3句) 水煙抄 (8句) 川柳塔 (8句)

「チーム」(3句) 鈴木公弘担当
「いよいよ」 石原淑子選
「つかむ」 春木圭一郎選
「前向き」 山口光久選

4月号発表 (2月15日締切)

小島蘭幸選 西出楓選 新家完司選 三宅保州共選 山本希久子選

5月号
檸檬抄 「にらむ」
一路集 「丸い」「トリック」
初歩教室 「たけのこ」
「流す」

本社2月句会

とき 2月4日(金) 午後13時開場・2時締切り
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ アウイナ大阪 3階 葛城の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「法隆寺と詩人たち」 中原比呂志氏
兼題「二階」 渡辺富子選
「意味」 伊達郁夫選
「きりぎり」 古久保和子選
「畏」 都倉求芽選
「特別」 山本希久子選
小島蘭幸選 (各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円(切手可)

本社3月句会
7日(月) 午後13時から
兼題「平」行「スイーツ」「互い」
「恥」「毎日」

第29年度 夜市川柳募集

第9回「出会い」 西口いわゑ選
ハガキに3句 2月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌絡込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所所取扱い)、檸檬抄は本紙絡込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一一年(平成二十三年)二月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六七七九三九九番

振替〇〇九八〇四二九八七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

すりごま

長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
ジを一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十三年二月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻一〇〇五号

川柳塔

二月号

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版 『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版
514頁
定価 三〇〇〇円
(郵送料共)

目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語(遠野大八)
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生路郎作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区太道1丁目14番17号

電話 06-67779134
花野ビル201号

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番
川柳塔社

定価 〇〇〇円(送料 八十四円)